劇団皇帝ケチャップ第7回本公演

ソノ先に在る、あるいは居るモノへ

作・吉岡　克眞

第１話『善意と悪意と幾許かの優しさ』
○シーン１「いつもの喫茶店」

ＳＥ黒電話の音が鳴る中、暗転。上手エリア板付きは泰子、すみれ、芙美子。明転、テーブルの上の紙(文字は書かれていない)を見ている３人。泰子が喋りだそうとしたところＳＥお盆が落ちる音が響き渡る。

ウェイトレス(声) 失礼しましたぁ。
泰子　(溜息とともに)台無し。
すみれ　何が？
泰子　今これから話をしようとしているのにあの音で台無しだって言っているのよ。
すみれ　いいじゃない。誰だってミスはするわ。物を落とせば音は鳴るし、壊れるものよ。
芙美子　平常心が大切よ。やっちゃん、いつも眉間に皺寄せてるイメージだからね。

芙美子、ティーカップにふうふうとやっている。(ことにより間を埋める)

すみれ　(間)…ん？
芙美子　どうかした？
すみれ　それはつまり眉間に皺は寄せていないのよね。
芙美子　何で？
すみれ　だから、あなたのイメージだから、実際にはないんでしょ？
芙美子　イメージというのはイメージよ。それ以上でもそれ以下でもないの。あろうがなかろうが、それは大事なことじゃないのよ。
泰子　ないのよ、結論。そして芙美子の言葉には意味が無いのよ。
すみれ　ああ。
芙美子　それ失礼だと思います。
すみれ　(卓の上の紙を見つめ)で、これは何なの？
泰子　契約書。
すみれ　なんの？
芙美子　参列契約書って書いてあるよ。
泰子　よく読めました。えらいわねぇ。
芙美子　やっちゃんに褒められちゃった。
すみれ　バカにされてんのよ。
芙美子　え？
すみれ　なんでもない。何で私が貴方のことでイライラとさせられないといけないのよ(語尾は不明瞭になってもいい。ゴニョゴニョ。照れ隠しか)
芙美子　で、その契約書がなに？
泰子　書いて。名前。

間。

すみれ　はぁ！？

芙美子　やっちゃん。書いてって言われて書く人いる？　よく分からない契約書なんだよ。

すみれ　芙美子にのっかるわけじゃないけど、まあ、私も「はい書きます」ってならないわね。まずは説明してくれない。

泰子、伏し目がちに契約書を見る。

芙美子　ちょっと待って。

泰子、すみれが芙美子を見遣る。

芙美子　ちなみに。その説明で私がわかるとも限らないわ。

なぜか胸を張って芙美子は言うが誰もフォローはしない。すみれ、続けてと、泰子を手で促す。※すぐに芙美子の集中力は切れ、目の前のクッキーを食べたくなる。

泰子　いつもの喫茶店、いつものメンバー、いつもの紅茶。いつものクッキー。

すみれ　いつものいつものって何が不満？

泰子　不満ってほどでもないわよ。

すみれ　その顔がイヤイヤって言ってるわよ。

泰子　そんな顔してる？

すみれ　いつもの行動に飽き飽きしてるって言いたげだわ。

泰子　飽きているには飽きているかしらね。

すみれ　もし私達があなたに飽きられているのであれば別に一緒にいることを強制はしないわ。あなたの人生だし、好きにすれば。でも、それと契約書とどうつながるのか未だに見えてこないんだけど。

泰子　私が言いたいのはそういうことじゃなくてね、

芙美子　(空気を読まずに)これチョコクッキーなんだけどね、やっぱ温かいうちに食べた方がおいしいと思うんだよね。クッキーを２つに割るでしょ。片方を紅茶につけてもよし、もう片方はそのまま口に放り込んでもよし。割る、割らない？

すみれ　横からごちゃごちゃうるさい！

すみれ、芙美子のクッキーを奪い、真っ二つに割る。

芙美子　あーーー、私割りたかったのに。やっちゃん、スーミンがひどいことをします。
すみれ　ムーミンみたいな感じで呼ばないでよ。
芙美子　ムーミンいいじゃない。愛くるしいじゃない。ね、やっちゃん。

泰子、徐ろにクッキーをつまみ、二つに割る。

泰子　頭をかち割られたい？

芙美子、首をロボットのように横に振り、しょげつつも大人しくクッキーを頬張る。刹那、晴れやかな笑顔を見せる。

泰子　私は好きにしているわよ。だからこうしていつものメンバーで何かを真剣に語らうわけでもなく、夕食の準備をする時間までお喋りしてる。まるで高校生に戻ったみたいにね。
すみれ　高校生との違いは宿題がないってことと、財布に余裕があるってことね。
芙美子　テレビ見放題、課金し放題。
すみれ　あなたね、宿題の代わりに家事をやらないといけないでしょ。主人は手伝ってくれないし、子供もそう。夕飯ぐらい自分で作ればいいのに。作ったところで美味しいとも不味いとも言わないし。なんなのあれ。いただきますは？　ごちそうさまは？　食器ぐらい洗ったってバチは当たらないわよ。
芙美子　それが夫っていうものよ。

泰子とすみれ、そんな発言をする芙美子を見遣る。（芙美子は二人を待たずに次のセリフを）

芙美子　それが、子供というものなのよ。

その視線に気づかずに嬉しそうに笑う芙美子、クッキーを頬張る。

泰子　こんなことしてる間にも刻一刻と帰宅の時間は迫ってるわ。
芙美子　ねえ、別の種類のクッキー頼んでもいいかな。紅茶もおかわりしていいかな。
すみれ　好きにしなさいよ。
芙美子　ありがとう。

芙美子、手を挙げてウェイトレスを呼ぶ。ウェイトレス入り。

芙美子　あの、おすすめのクッキーってなんですか？
ウェイトレス　私が好きなのは、全部ですねぇ。

芙美子　ひとつだけ教えてほしいんですけど。
ウェイトレス　お店からそう聞かれたら全部ですと答えなさいと言われてますので。
芙美子　でも注文が全部になってしまいます。そんなに食べたらお夕飯が食べれません。
ウェイトレス　なんとかなるんじゃないでしょうか。
芙美子　なんとかって無責任です。どうしましょう、これは困りました。
ウェイトレス　私はそれほど困っていませんが。あ、わかりました。全種類盛り合わせとかにすればいいんじゃないですか。
芙美子　ああ。でもメニューにはなかったけれど、あるんですか？
ウェイトレス　あればいいですよねと思っただけです。
芙美子　だとするとますます困ります。無いということは無いということで在るということでは無いので。ねぇ(同意を求める)。
すみれ　あーー、なに、そのやりとり。えーと、一番人気の商品ってどれですか？
ウェイトレス　チョコクッキーです。

すみれ、ゆっくりとテーブルの上にあるクッキーに視線を移す。その視線を追って芙美子、ウェイトレスもクッキーを眺める。

すみれ　(切り替えて)じゃあ、その次に人気の商品はどれかしら？
ウェイトレス　バナナクッキーです。
すみれ　じゃあ、それ。芙美子もそれでいいわよね？
芙美子　私はクッキーであればなんだっていいわ。味わかんないし。
ウェイトレス　かしこまりました。少々お待ちくださいませ。

ウェイトレス下手はけ。

泰子　時間は無限、されど人生は有限。
すみれ　え？
芙美子　(困った笑顔を浮かべ)てつがく？　難しい話？　蕁麻疹出ちゃう。
泰子　全然難しくはないわ。自然の理なんだから。
すみれ　どうしたのよ突然。
泰子　今のウェイトレスと芙美子のやり取り。一言で表現してみて。
すみれ　無駄。
芙美子　ひどい。
すみれ　ひどくないわよ、何よあの時間。あのウェイトレスもウェイトレスだけどさ。って言うかいつまでかかってるのよ。
芙美子　スーミン、いくらなんでもそんなにすぐは出てこないわ。
すみれ　袋だか瓶だかから取り出してお皿に盛るだけでしょ。
芙美子　ちっちっち。甘いなぁ。バナナクッキーより甘いですよスーミン。このお店の売

りは何？　焼きたてを提供するお店だよ。
すみれ　これから焼くの？(と言いつつ時計を見る)
芙美子　そう。こうやって、房から必要な数もいでね。
すみれ　だとしたら私たちはタイムリミットよ。帰らないと。
芙美子　えー、私のバナナクッキーは？
すみれ　知らないわよ。あなただけ残って食べていけば。
芙美子　子供が帰ってきちゃう。
すみれ　そうでしょうよ。
芙美子　ちょっと言ってくる。早く出来ませんかって？
泰子　(ウェイトレスに気付き)その必要はなさそうよ。
芙美子　え？

ウェイトレス入り。手には皿(お盆に乗せて)。

ウェイトレス　お待たせ致しました。
芙美子　あの、これって焼き立てですか？
ウェイトレス　もちろんです。うちは焼き立てのみを提供させて頂くお店ですので。
芙美子　だとしたら早くないですか？
ウェイトレス　早いといけないんですか？
芙美子　そういうわけじゃないんですが。まるで既に焼いてあったものをお皿に盛っただけみたいな(速さで出てきたので)。

ウェイトレス　(間)ご注文は以上でしょうか？　失礼致します。

ウェイトレス、相手の言葉を待つことなく矢継ぎ早に言葉を吐いてはけ。
すみれ、バナナクッキーを触り、頬張り、わかったように頷く。芙美子、その反応を見て、理解して、悲しそうな表情を浮かべる。

芙美子　あ(紅茶が空であることに気づいたが)。(誰に言うわけでもなく)大丈夫。我慢できるわ、私だって大人だもの。
泰子　ねえ、人間の寿命ってどのぐらいか知ってる？
すみれ　今度は何？
泰子　いいから。
すみれ　女性であれば８７、男性であれば８１、だったかな。
泰子　ご名答。私達が病気にもならずにそこまで生きたとして、あと５０年近くあるわけね。
すみれ　うん。
泰子　では聞きます。私が死んだら貴方たち、私の葬式に来る？

芙美子、クッキーに伸ばした手を止め、泰子を見遣る。すみれも何を言っているのかと訝しく思いながら泰子を見つめるがかける言葉を見定められない。

泰子　(戸惑う二人をよそに)私って、きっと死んでも葬儀に参列してくれる人いないんだろうなぁって思ったの。

芙美子　そんなことないよ。

すみれ　だから何の話？

泰子　死んだ時の話よ。

すみれ　なんで今。

泰子　実はさ、先月、うちの祖父が亡くなったの。葬式に夫と子供連れて行ってきたんだけどね、なかなか寂しい葬式だったなぁって。ほぼ身内だけで友人知人がいなかった。

すみれ　密葬でしょ。

泰子　いいえ。ちゃんと案内は出したって聞いたわ。でも大半が何かしら用事があるとかなんとか。用事なんてみんなあるわよ。それに定年退職して数十年の人たちに何の用事があるってのよ。生きてるなら来なさいよ。

すみれ　それは招く側の論理だからねぇ。

芙美子　生きてたって行けない事情があるかもしれない。

泰子　例えば？

芙美子　例えば？　…ほら、足腰が弱っているのかもしれないじゃない。

泰子　私、ぴんときたのよ、その時。ああ、おじいちゃんもきっと友達がいない人生だったんだなって。

芙美子　やっちゃんには私達がいるじゃない。

泰子　聞くけど、それって永遠？

芙美子　え？

泰子　だから、その友情って永遠なの？

芙美子　永遠だよ。うん。多分永遠だよ！

すみれ　とも限らないわね。

芙美子　ちょっとスーミン。

すみれ　貴方も今多分って。でもさ、人間だから。何があってもおかしくないじゃない。気持ちなんてころっと変わるものよ。今日はチョコクッキーが食べたいなぁ。あ、でもバナナクッキーの方が食べたいかも。ってのと一緒よ。

芙美子　違うよ。そんなのと一緒にしちゃ駄目だよ。

芙美子、両手に持つチョコクッキーとバナナクッキーを振りかざして言う。

泰子　私はね永遠なんて信じないからさ。

芙美子　それは悲しいよ。寂しいことだよ。
泰子　だから私考えたのよ。参列を契約してしまえば寂しい葬儀にはならないんじゃないかって。
すみれ　それでこれ？
泰子　そう。
芙美子　こんなことしなくても私は行くよ。
すみれ　そうよ。私だって行くわ。
泰子　あなたたち。(じんわりと優しい空気が漂う、が)二人とも私がこの中では一番早く死ぬと思っているのね。

照明変化。テーブルの上の小道具を持って泰子、すみれ、芙美子はけ。セリフ中に花菜、亜紀入り。下手エリア。

○シーン2「放課後の教室」

亜紀　進学しないって聞いたんだけど。
花菜　誰にですか？
亜紀　萩本先生。
花菜　口軽いなぁハギー。
亜紀　先生をあだ名で呼ぶのはやめなさい。百歩譲ってハギー先生はいいとして、私はなんて呼ばれてるの？

花菜、無表情に近い顔から、『ニカッ』と顔の筋肉をめちゃくちゃ使って微笑む。それで全てが物語れているぐらいに強烈な笑顔。

亜紀　わかった。言わなくていいわ。でもね、萩本先生だって心配して言ってるんだから。私がね、最近気になることありますか、って聞いたらね、猫の食欲があまりなくて病院に連れて行った方がいいのかしらとか悶々と考えて2週間ぐらい経つんだけどって言われるから、あ、先生、猫飼われているんですかって聞いたのよ。そしたら何でよって言うのね。だって猫の食欲がって言われたから、言われた方としてはそう思うじゃない。そしたら野良で時折見かける猫なんだって。
花菜　先生話が見えません。
亜紀　人の話は最後まで聞くものよ。で、ひとしきりいい動物病院はないかとかお金はいくらぐらいかかるのかとか話してたら次の授業のチャイムが鳴ってね、そう言えば戸田さん、就職するみたいな話をしてましたよって。わかる？　その時の担任の惨めな気持ち。聞いてないんだもの、相談されてないんだもの。ものは相談なんだけど
花菜　はい？

亜紀　私が先に聞いてたってことで良いわよね。その時はうまくごまかしたから。
花菜　えーと。私の話って萩本先生にとっては野良猫の次だってことはわかりました。
亜紀　何を言ってるの。猫の食欲は大事よ。
花菜　すみません。大事ですよね。猫は。ええ。
亜紀　で、どうするの。
花菜　そうですね。働こうかと思っています。私、あまり勉強とか好きじゃないので。
亜紀　好きだから勉強をするってものでもないでしょ。ご両親とはちゃんとお話してる？
花菜　あの人達は私のことなんて興味ないですから。
亜紀　私にも子供がいるんだけどね。
花菜　今度は何の話ですか？
亜紀　まあまあ。でね、すっごくかわいいのよ。写真見る？

亜紀、いそいそとパスケースを出そうとするが。

花菜　大丈夫です。
亜紀　あ、そう。でね、そんなかわいい存在なのにちょっと反抗的な態度を取られたりもするわけ。その度にママはとっても寂しい気持ちになります。だからあの人たちなんて言わないの。わかった？
花菜　はい。
亜紀　よろしい。それにね、もしかしたらお母様もお父様も何かアドバイスをくれるかもしれない。
花菜　くれないかもしれない。
亜紀　またそうやって。
花菜　先生は何で学校に通っていたんですか？
亜紀　なんで？
花菜　さっき言いましたよね。好きだから勉強をするってものじゃないって。
亜紀　そうね。どちらかと言えば嫌いだったかな。まあ部活にも入っていなかったから勉強ぐらいしかやることはなかったけど。
花菜　楽しかったですか？
亜紀　お友達と話すのは楽しかったわよ。ここだけの話、私そんなに出来が良いほうじゃなかったし。
花菜　わかります。
亜紀　え？
花菜　え？　あ、いえ、なんでもないです。
亜紀　でも教師にはなれた。人生何が起きるかわからないわね。
花菜　人生の話ですか。…

亜紀　ねえ、戸田さん。
花菜　はい。
亜紀　あなた、何か悩んでない？
花菜　占い師みたいですね。
亜紀　そうじゃなくて。本気で働きたいって思ってる？
花菜　思っていますよ。
亜紀　その顔は思ってないわね。
花菜　決めつけはよくないと思いますけど。
亜紀　先生に言ってごらんなさい。今日言えないのであればいつでも、戸田さんが言えると思ったらでいいからさ。

花菜、考えている。言うべきか言わないでおくべきか。亜紀、立ち上がる。

亜紀　なければないでね、ほっとするじゃない。

亜紀、下手へ行こうとして。

花菜　先生。
亜紀　ん？
花菜　…でも先生は無理ですよね。
亜紀　なんで？
花菜　だって先生は、

千代、話を切るように入り。

千代　まだ？

花菜、千代を見る。にこにこと笑っている千代。
無表情で鞄を持って立ち上がる花菜。

亜紀　佐川さん？

千代、笑っている。

亜紀　え、なに？

千代に亜紀の言葉は届かず、千代、窓の外(方向については立ち稽古時に)に視線をやり。

千代　(独り言つように)夕方が夜になってしまう。

その詩的な音を空間に響かせて。残して。意味は無いはずなのに、その言葉が意味を持つような空気が漂う。夜、闇というイメージが静かに彼女たちに不穏な影を落とすかのよう。花菜、千代の方に歩いて行く。

亜紀　戸田さん待って。さっきのことって(どういう意味?)。

花菜、亜紀の言葉を待たずにそのままはけ。

千代　先生さようなら。

千代、余裕のある感じではけていく。亜紀、それを見送り、窓の外を見る。

亜紀　夕方が、夜になってしまう、か。

照明変化。亜紀はけ。浩二とすみれ、セリフ中に入り。上手エリア板付き。照明変化後、会話が始まる。

○シーン3「戸田家」

すみれ、紙の束とにらめっこしている。借用書の整理だ。顔も上げずに会話をするすみれ。

浩二　契約書?

すみれ　そ。また不思議なことやり始めたって思うだけなんだけどね。

浩二　泰子さんだっけ?　そんなに変わってるんだ。

すみれ　貴方も会ったことあるでしょう?

浩二　あるけど、そんな変な人には見えなかったけどなぁ。

すみれ　人が人に対して見えている部分なんて一部分でしかない。これは貴方が言ったんだったわね。

浩二　どうだったかな。忘れてしまったよ。

すみれ　なんでも忘れてしまうのね、貴方って。価値あることもないことも。大概忘れてしまったって。

浩二　悪いことだろうか、忘れたり失くしたりするのは。

すみれ　時と場合によるわ。でも忘れるべきではないことは覚えておかないと。(不図顔を上げて浩二を見る)しまいには私のことすら忘れてしまうんじゃない?

すみれ、冗談のつもりで言ったが、浩二、真剣な顔をして考える。間。再び紙に視線を戻すすみれ。

浩二　それは、(再び顔を上げるすみれ)……健忘症的な？
すみれ　(笑い)違うわよ。
浩二　すみれ。
すみれ　ただの冗談じゃない。
浩二　(間)ああ、冗談か。そんな兆候が出ているのかと思ったよ。

浩二、すみれの手元にある紙を取り上げようとする。

すみれ　ちょ、駄目よ。
浩二　何が？
すみれ　個人情報だから。
浩二　また友達にお金貸してるの？　時々夜出かけてるのだってお金貸しに行ってるんだろ。お金借りたいならそっちが来るのが道理じゃないか。
すみれ　貴方が怒らなくてもいいでしょ。困ってれば助けてあげたくなるじゃない。ただそれだけよ。私が夜出歩いているからって夜遊びとかはやめてよね。
浩二　そんなことしてないって。お小遣いが足りません。なんてね。

すみれ、借用書をまとめる。浩二、机上の参列契約書が目に留まり、手に取る。

浩二　参列契約書、ね。で、サインするの、これ？
すみれ　どうだろう。わからないわ。でも、何もそんなことまで契約にしなくてもいいのにね。

照明変化。ＳＥ街角。車の走行音。すみれ、借用書を持ち、浩二から契約書を奪ってはけ。泰子、会話中に入り。二人すれ違う。誰かを探している様子の泰子。

○シーン４「街角・回想」

泰子　おまたせ。
浩二　(泰子に気づいて)というほどには待ってはいないよ。
泰子　相変わらずね。
浩二　何が。
泰子　そういう時は待ってないって言うか、待ったことを笑いに変えるぐらいの努力をしないと。私が悪いことをしたなって思うじゃない。

浩二　はは。でも実際には思ったりはしないだろう。
泰子　ええ、そうね。私たちはもう、

泰子、そう言って辺りを見回す。同じように待ち合わせをしていたカップルを見つけ。

泰子　あの子達のようにはもう若くはない。
浩二　(若いカップルを見つめ)そうだね。羨ましいような羨ましくないような。
泰子　年は取りたくないと思っていた時期はあったけれど、気づけば私も貴方も確実に1日1日死へと向かって歩いている。老いることを強いられ、やめることは出来ない。……ねぇ。
浩二　どうかした？
泰子　あとどのぐらい…

泰子、言葉を喪う。喪った言葉を見つけようと遠くに視線を投げる。

浩二　どのぐらい？

二人は一つの解に辿り着く。『あとどのぐらい私たちは一緒にいられるのかしら?』しかし一度喪われた言葉は二度と彼らの手元には戻ってこない。泰子、常々感じている果てなき不安を嚥下する。

泰子　(小さな、とても気づきようのない笑み)いいえ。春だというのにまだ寒いわ。
浩二　この時間になると冷え込むものだ。早くお店に入ろう。いい感じのお店をこの前見つけんだよ。
泰子　いい感じって日本語的よね、表現が。
浩二　何故なら僕らは日本人だからね。でもホントにステキなお店なんだよ。
泰子　じゃあ行きましょう。そのいい感じにステキなお店とやらに。

浩二、泰子をエスコートしてはける。千代、芙美子、会話中に入り。

○シーン5「佐川家」

芙美子　え、えっと、ちょっと待って。考えるからお母さん。
千代　考えなくていいから。結論は出てるし。
芙美子　だってそういうことって1人で決めていいことじゃないじゃない。家族の問題じゃない。
千代　私個人の問題だから。

芙美子　卒業したら家を出るとか、全然聞いてないんだけど。
千代　こうなるのが嫌だったから言わなかったの。お父さんには言ったし。
芙美子　なんでお父さんなの。私は？
千代　お父さんからは承諾もらったし。もう家も探してるし。
芙美子　私は認めません。だってあなたまだ１８歳じゃない。
千代　もう１８歳よ。
芙美子　料理だってできないでしょ。
千代　やろうと思えばなんだって出来るし。外で買ってくればいいし。
芙美子　不経済、不健康よ。コンビニ弁当ばかりだなんて。マクドばかりだなんて。
千代　サイゼリヤだって行くし松屋だって行くわよ。
芙美子　じゃあお母さんも引っ越します。
千代　それじゃあ意味が無いんだって。ってかお父さんどうするのよ。
芙美子　お父さんには暫く１人で生きてもらいます。もう大人なんだから。
千代　私だって大人よ。もうそろそろ子離れしてよ。
芙美子　あなたがどんなに大人ぶったところで私は貴方の母親で、貴方は私の子供なの。いい。いくつになってもその関係は変わらないんだからね。
千代　もういい。時期が来たら本当に出てくから。
芙美子　そんな勝手は許しません。
千代　じゃあいくつになったら私は家を出られるの？　答えられないでしょ。それはお母さんに答えがないからじゃない。逆に答えがあるのか。いくつになっても出て行かせないって答えが。
芙美子　千代ちゃん！
千代　こんな一方的に私の人生から自由を奪うなんて契約、私は生まれてこの方したことはないんだから。子供を育てるのは親の権利であり義務でも在るとして、その子供が育てられるという権利を放棄するって言ってるんだから認めればいいでしょ。

千代、言い捨ててはける。

芙美子　千代ちゃん。

芙美子、追ってはける。

○シーン６「立ち飲み屋・続回想」

前のシーン中に泰子と浩二、中央板付き。グラス持参。※立ち飲み屋。カウンターあるいはテーブルをマイムで表現するかは検討をする。浩二は前斜めにあるテレビの野球中継が気になっている。

泰子　(バカにするわけじゃなくて)貴方のいい感じがよくわかったわ。
浩二　いいでしょ。何がいいって野球中継を見ていてもチャンネルを変えろって言われない。
泰子　野球、興味ないんだ。
浩二　全く。まさか自分の給料で買ったテレビで自分が観たい番組を観られないとは思ってもいなかったよ。
泰子　あのさ。
浩二　え？
泰子　私と居る時は家の話やめてよ。
浩二　なんで？
泰子　魔法が解けちゃうから。
浩二　魔法？
泰子　そ。魔法。
浩二　ロマンチストだね。
泰子　そうよ。知らなかった？

浩二、酒を飲む。

浩二　僕には視線を逸らすことが出来ない現実ばかりのしかかってくる。
泰子　そんな現実から目を背けたいから私と居るってあなた、そう言ったわね。
浩二　そうだったかな。
泰子　そうだったわ。また忘れちゃった？
浩二　気をつけてるんだけどね。すみれにも何度も指摘されて、もう呆れらているよ。
泰子　だからそういう…
浩二　でも今はこうして君と居るだろう。お酒だって君と飲んだ方が美味しいんだ。
泰子　私は酒の肴じゃないのよ。
浩二　怒るなよ。
泰子　怒ってなんかいないわ。ただすねて見せているのよ。
浩二　そっか。
泰子　恨まれちゃうかしら。
浩二　何？
泰子　恨まれちゃうって言ったの。
浩二　聞こえてるさ。
泰子　あなたはいいの？
浩二　僕？　恨まれることには慣れているからね。
泰子　悪い人。
浩二　君は恨まれたくないわけ？

泰子　誰だって恨まれる人生より恨まれない人生を選びたいと思うでしょ。
浩二　違いない。
泰子　ばれたらどうなるかしら。
浩二　どんなに望んだとしても、変わらずの生活とはいかなくなるだろう。僕も君も。
泰子　今のままで十分幸せなのよ私。これ以上は望まないわ。

泰子、酒を飲む。浩二、その姿を見つめている。浩二の携帯に妻からのＬＩＮＥが。『これから出かけます』というのが見えた。泰子、携帯の画面を見ている浩二に気づくが気づかなかったように酒を飲む。

浩二　今夜、遅くなってもよくなった。
泰子　あらそう。
浩二　あらそう、って君。つれないね。
泰子　泣いていいわよ。指差して笑ってあげるから。
浩二　(笑いながら)残念だけど、僕はもうそこまで若くないんだ。
泰子　知ってるわ。だから泣けない？
浩二　泣かない。
泰子　……これ飲んだら行きましょ。
浩二　どこに？
泰子　さぁ？

と言って笑っている泰子に対してやれやれという思いの浩二。照明変化。泰子はけ。回想が終わり、すみれが戻ってくる。※照明の色、明度で回想と回想以外については変化を。

すみれ　ねえ、変なこと聞くんだけど。
浩二　何？
すみれ　貴方、浮気してないわよね？

照明変化。浩二だけはけ。すみれ、ゆっくりと移動して椅子に座る。花菜、会話中に入り。椅子に座って本を読み始める。

○シーン７「戸田家、花菜のケータイに着信」

読書中の花菜。本は『天文ガイド２０１７年３月』。ケータイが震える。ＳＥバイブ音。ちらっと表示されている名前を見て、無視しようかと思うが出てしまう己の弱さを呪いたくなる。

花菜　もしもし。

千代入り。手にはケータイ。

千代　なぁんですぅぐ出なぁいのかなぁ。
花菜　ごめん。ちょっと、
千代　言い訳は聞きたくないから。
花菜　言い訳ってわけじゃないんだけど。
千代　先生に何か言った？
花菜　別に。ちょっと進路について相談してただけ。
千代　進路？　ならいっか。妙なこと、ま、言わないよね花菜は。…お父さん、
花菜　言わないよ。何か用？
千代　用があるからかけてるんでしょ。
花菜　ごめん。
千代　あのさ、ごめんって思ってないのに反射的に謝るのやめなよ。むかつくから。
花菜　ごめん。
千代　わざと？
花菜　そういうつもりじゃ。
千代　じゃあ、どういうつもりよ。
花菜　ごめんなさい。
千代　(溜息を吐く)もういいわ。(切り替えて)あのね、明日３万円ほど持ってこれない？
花菜　３万？
千代　そそ。３万円。

照明変化。花菜、千代はけ。会話中に泰子、芙美子入り。まるでお店で待ち合わせて徐々に入ってくるイメージ。

○シーン８「いつもの喫茶店」

泰子　書いてくれた？
芙美子　何を？
泰子　サイン。
芙美子　サインって私有名人じゃないし。
泰子　契約に必要だからでしょ。
芙美子　怒らないでよ。
すみれ　契約って聞くと何だかすっごく重い気分になるわね。拘束されるっていうか。
泰子　拘束するために作ったんだから当たり前じゃない。破ってもいいかななんて軽くはないわよ。

芙美子　どうしよう？
すみれ　どうしようって言われてもねぇ。
泰子　契約書、今日持ってきてないなら私余分に印刷して持ってるから(カバンをごそごそと漁る)こっちに書いてくれればいいから。今日の日付と名前ね。フルネームで。あとＬＩＮＥで送っておいたけど印鑑は持ってきてる？　忘れた人は拇印でもいいわよ、私朱肉も持ってきたから。
すみれ　本気？
泰子　冗談でこんなことやらないわよ。私とあなた達はこんな紙一枚だけども契約関係を結ぶことになる。私の葬式には人が来るという安心を得て私は死ねる。
芙美子　破ったらどうなるの？
泰子　枕元に立って一生離れない。死ぬ瞬間まで後悔するぐらいに呪ってあげるわ。
すみれ　それって幽霊が存在すればって話じゃない。
泰子　存在するわよ。させてみせるわよ。あと裏切れないように連帯責任になるから、欠席者がいた場合は。
すみれ　いくら葬儀が寂しいのは嫌だからって言ってもね。こんなことされたらちょっとあれよ。
泰子　あれって何よ。ぼかさずに具体的に言いなさいよ。私が言いたいのはさ、５年後もこうしていつもの喫茶店で紅茶飲んでクッキー食べてなんてやってると思うかってこと。１０秒後の未来すら思い描いた世界とは違うかもしれない。貴方達が思っている以上にこの先の世界は曖昧で透明なのよ。
すみれ　だから、契約とかしなくても私達行くわよ、貴方の葬式。
泰子　それは今此処に居る貴方の発言でしょ。半世紀先に生きている貴方の言葉、あなたの意思はどうなの？　口約束なんて破る保険よ。
芙美子　やっちゃん、何かあった？
泰子　だから言ったでしょ。私の祖父がね、
芙美子　そうじゃなくて。もっと直接的な、理由？

泰子、黙ってテーブルの上に載っている契約書を見つめている。すみれ、芙美子、顔を見合わせる。

すみれ　どうしたのよ。
泰子　なにもないわ。あったってなんで貴方達に話さないといけないのよ。
芙美子　友達だから。お互いの葬式に駆けつけるような友達だからよ。
すみれ　その友達に契約を迫るってどういうことよって今思ってるけどね。
芙美子　スーミン。
泰子　別に連帯保証人になってくれとかじゃないし。サインぐらいすればいいじゃない。何が問題なのよ。わかった。あれでしょう。将来の自分が約束を破るんじゃないかって、不安なんでしょ。

芙美子　違うよ。

沈黙が訪れる。ウェイトレス入り。

ウェイトレス　お客様、他のお客様のご迷惑になりますので。
芙美子　あ、ごめんなさい。大丈夫ですから。
ウェイトレス　ほんとに？　カップとか投げ合ったりしません？
芙美子　しませんよ。そうなったら外に出ますから。
ウェイトレス　そうなる前に出てもらいたいです。

信用していないオーラを醸し出しながらウェイトレスはけ。すみれ、テーブルの上の契約書を取り上げ、名前を書き始める。芙美子もペンを持つ。照明変化。泰子、芙美子、はけ。すみれ残る。すみれが契約書を書き始めるタイミングで花菜入り。泰子離席タイミングで入れ替わるようにして椅子に座り、本を読む。

○シーン９「戸田家」

すみれ　あのさぁ。

花菜、本から顔を上げる。

すみれ　なんでここで読むのよ？　自分の部屋があるでしょ。
花菜　でもここで読んじゃいけないっていうルールはないと思うんだけど。
すみれ　気になるじゃない私が。
花菜　別に騒いでないけど。
すみれ　存在が気になる。集中してやらないといけないことだから、これ。

花菜、立ち上がって部屋に戻ろうとする。

すみれ　いいわよ。別に。
花菜　いいよ。部屋に戻るわ。
すみれ　いなさいよ。私が悪いみたいになるのは嫌じゃない。

花菜、再び椅子に座り、黙々と読書をしている。
帰宅する浩二入り。

浩二　ただいま。
花菜　おかえりなさい。

と言いながら花菜はけ。

浩二　ん？　喧嘩でもした？
すみれ　思春期だから。
浩二　お父さんの洗濯物と一緒に洗わないでとか言われないだけうちはまだましだな。
すみれ　それってやっぱりショックなこと？
浩二　そりゃ、まあ。え、もしかして分けられてる？
すみれ　んー、どうでしょう。
浩二　なんだよ。で、夕飯は？
すみれ　食べるの？
浩二　そりゃ腹は減ってるさ、人間だもの。
すみれ　なんか適当にチンしてよ。
浩二　冷凍モノかぁ。
すみれ　おいしいわよ私が作るものより。
浩二　味気ないな。昔はもっと。
すみれ　昔の話なんか持ち出さないでよ。人は過去には戻れないんだから。
浩二　わかったわかった。

キッチンへとはける浩二。テーブルには花菜の置いていった本が。ページを捲るすみれ。SE学校のチャイム。照明変化。すみれ、本を持って上手はけ。すみれはける前に千代入り。椅子に座る。

○シーン１０「放課後の教室」

亜紀下手入り。

亜紀　あれ、佐川さんだけ？
千代　はい。
亜紀　何してたの？

千代、少し考えるような素振りで。

千代　それ、答えないと駄目ですか？
亜紀　いや、駄目ってわけじゃないけどね。
千代　けどね？　けどねってなんですか？
亜紀　気になるじゃない。授業も終わった放課後に一人教室にいる生徒って。

千代、笑う。

亜紀　私、おかしなこと言った？

千代　いいえ。ただ、まるでうちのお母さんみたいだなぁって。

亜紀　お母様？

千代　過保護で、とっても口うるさいんです。今日だって何で遅かったのって帰宅するなり言われると思うんですよ。

亜紀　それは佐川さんのことを心配なさってるからでしょ。

千代　頼んでもいないのに？

亜紀　親ですもの。

千代　答えになってないですよ。それは親の理屈ってやつですか？

亜紀　どうしたの。ムキになって。

千代　子供扱い、やめてください。

亜紀　いや、そういうつもりじゃなかったんだけど。

千代　また、けどって。

亜紀　あのね、先生も同じ。生徒のことを心配してるんだから。

千代　だからそうやって押し付けないでほしいんですよ。

亜紀　佐川さん？

千代　私たちには私たちにしか理解できない世界があるんです。もう先生にはわからないような日常や現実が。

亜紀　わかるわよ。

千代　わかっているつもりになってるだけです。そういうのは知ったかぶりって言うんです。

亜紀　違うわ。先生にだってね。

千代　先生にだって学生時代があった、ですか？

亜紀　そうよ。

千代　それがそもそも間違いなんですよ。過去の一時期を持ち出して私達のことをわかったとか言うのは。今先生は先生じゃないですか。仮にその経験をもって私達のことを想像して理解しようとしても半分も理解出来ていない。いいえ、先生の場合は理解しようともしていないんです。

亜紀　何を言っているの？

千代　知っていますか、先生はこの教室に起きていること。

亜紀　え？

千代　知ってると思うんだけどなぁ。でも見てみないふりをすることにしたんですよね。仲のいいグループ。友達。楽しいお昼ごはん。部活や勉強に勤しむ生徒。休憩時間の他愛のないおしゃべり。授業中に回してる手紙。何もかもが嘘、幻想です。いいかげんに目を覚ましましょうよ先生。でなければ、ずっと先生は先生の理想の中で眠り続けていてくださいよお願いですから。

照明変化(いつもの喫茶店とは異なる明かりで)。亜紀、千代はけ。
※会話中にすみれ、芙美子入り。椅子に座る。小道具カップ持参。

○シーン１１「場末の喫茶店」

芙美子　いつもありがとね。

上手エリア。芙美子、銀行の封筒を鞄にしまいながら言う。

すみれ　いいんだけどさ、この前貸した分っていつぐらいに返せそう？
芙美子　えーと、今月はちょっと難しくて。
すみれ　だからいつ？
芙美子　再来月とかかな。
すみれ　再来月ね。わかった。
芙美子　ごめん。
すみれ　返済が滞ると私も友達として貸してあげたくても貸せなくなるからさ。そこだけは気をつけてよ。よそでも借りてるんでしょ？　レイク？　プロミス？
芙美子　どっちも。
すみれ　その毎月の支払いを私に借りてるって自転車操業じゃない。末期よ末期。分かってるの？
芙美子　わかってる。大丈夫だよまだ。
すみれ　まだって。一体何に使ってるわけ？
芙美子　いろいろ？
すみれ　その色々ってのを教えなさいよ。
芙美子　絶対誰にも言わない？
すみれ　芙美子にお金貸してること、泰子にも言ってないわよ。

すみれ、ティーカップを持つ。

芙美子　(躊躇いつつ)娘とも夫とも付き合い方がわからなくなる時があるのね。それでどんどんストレスがたまってね。
すみれ　うん。

すみれ、紅茶を飲む。

芙美子　ちょっとホスト通いを。

すみれ、紅茶を飲もうとしてむせかえりそうになる。

すみれ　はぁ？　バカ。ほんとにバカ。

芙美子　そう言わないでよ。バカだって自分でも思ってるんだから。

すみれ　金借りて借金膨らませて。え、ホスト？

芙美子　私なんかでもね持ち上げてくれるんだよ、あの人達。あそこにいるだけで私、ちょっとの時間だけでもお姫様みたいになれるの。

すみれ　お姫様。お金で雇ってるようなもんでしょ。真実の言葉なんかそこにはないわよ。

芙美子　わかってる。

すみれ　わかってない。

芙美子　わかってるって。

すみれ　わかってないから通い続けてるんでしょうが。気分良くなってまた通っちゃうんでしょうが。

芙美子　この生活があるから私救われてるのよ。

すみれ　救いなら教会にでも通えばいいわ。そして存分に救ってもらいなさいよ、神様に。

芙美子　神様？　そんな存在も怪しいものに頼ったところでどうにもならないよ。

すみれ　信じれば救われる、藁をも掴むつもりで乗り切ってるのよ、誰もが。

芙美子　私は仁くんに救ってもらうの。

すみれ　仁くんなんかにあなたを救えない。

芙美子　救える。

すみれ　救えない。

芙美子　救える。

すみれ　救えないったら救えないったら救えない。そんなにあなたのことは考えてもいない。

芙美子　現実をいきなり突きつけないで。

すみれ　バカバカしいお金の使い方はやめて、返済をしっかりしなさい。そして家族を大事にするのよ。

芙美子　すみれに家族を大事になんて言われたくないわ。あなたこそ大事にすべきよ。

すみれ　私は私なりに頑張ってるのよ。頑張らない程度に。

芙美子　頑張ってるの？　頑張ってないの？　よくわからないわ。

すみれ　この前だって、私は行かなかったけど親子二人で野球観戦に行ったぐらいに仲良いのよ、うちは。

照明変化。二人はけ。

○シーン１２「野球観戦」

ＳＥ球場の音。花菜入り、浩二入り。花菜上手椅子に向かって歩きながらセリフ。

※椅子の向きなどを観覧席に見立てるため変える。花菜のみ座る。浩二はセリフに合わせてアクト。花菜がまだ座っていないとしても椅子に座っている体で。ビールのカップか缶を持って、フェンス越しに観戦。花菜はジュースのコップを持っている。

花菜　私は父が好きでも嫌いでもなかったけれど一緒に野球でも見に行こうと言われたらついて行くぐらいには嫌いではないのだと思う。売店でビールとジュースを購入して、父は子供のように、でも子供ではない程度にはしゃいでいて、私が大人しく椅子に座って観戦をしていると、面白いだろうと聞くので、うん、面白いねって答えて、たまにはこういうのもいいねと父が喜びそうな言葉をかけたりした。子供は子供なりに大変なのだ。

花菜、椅子に座ってジュースを飲む。

浩二　どっちが勝ってるかわかるか？　どっちが勝つと思う？

花菜　野球のルールわからないから。

浩二　でもホームランとかはわかるだろう。塁に人がいて、ホームに戻ってくれば点が入る。パ・リーグとセ・リーグの区別がつかなくてもいいさ。どっちが勝つかな？

花菜　じゃあ、青い方。

浩二　なるほどね。でも今シーズンはあまり結果出せてないしなぁ。花菜、好きな色で選んだろ？

花菜　だってわかんないから。

浩二　いいよいいよ。勝つ方が勝つんだから。いいかい、強い方が勝つんじゃないってのが重要だ。

花菜　うん。

浩二、試合の行方を見ている。花菜、手元のジュースを見ながら。

花菜　お父さん。

浩二　ん？

花菜　何で今日私を誘ったの？

間。

浩二　(その間を受けて)一人で見るよか娘と見に来たかったんだな。

花菜　ふぅん。

浩二　信じてないな、その顔は。

花菜　うん。

浩二　正直だな、母さんに似て。
花菜　お父さんは正直じゃないの？
浩二　父さんは、(嘲りが表情に浮かぶ)嘘ばかりついている。
花菜　例えばどんな嘘？

その時試合が動き、球場内に響き渡る歓声(ＳＥ)。身を乗り出す浩二。

浩二　お、入るか入るかぁぁぁって入らないかぁ。もう今日はどっちが勝つか決まったようなもんだな。
花菜　お父さん。
浩二　ああ。お父さんがついている嘘な。まあ、色々とあるけど、…
花菜　うん。
浩二　お父さん、花菜のこともお母さんのことも大事に思ってるんだ。これは本当。
花菜　うん。
浩二　でも、そこには一つの嘘が含まれている。
花菜　…
浩二　お父さんな。
花菜　うん。
浩二　…お父さん、浮気してんだ。

花菜の目から涙がこぼれていく。
黙って涙を拭っていく。拭っても拭ってもこぼれていく。

花菜　あれ。おかしいな。おかしいや。

浩二、振り返り。その涙を見る。

浩二　……悲しいか？　憎いか？
花菜　…分かんない。
浩二　わからないことはないだろう。涙が出るってことはさ。
花菜　わかんない！
浩二　……そうか。

そこに再び歓声(ＳＥ)。花菜はその音に紛れて泣いている。照明変化。

花菜　私は涙を止める事が出来ませんでした。父が浮気をしていることは、現場を目撃した、千代に聞かされていたので知っていました。だから父から聞かされたとしても平気だと思っていましたが、想像以上にショックだったみたいです私。

照明が徐々に変わっていき俯く花菜、泰子下手入り。それに気づく浩二。

○シーン１３「逢瀬を重ねて」

花菜と浩二。泰子、それを眺めている。

泰子　泣かせたんだ。
浩二　泣かせた。
泰子　かわいそう。
浩二　また心にもないことを。

浩二、泰子の隣にやってくる。

泰子　心にはあるわ。花菜ちゃんとは何回か会ってるし、子供を泣かせたいわけじゃないのよ。
浩二　すみれは？
泰子　同じよ。悪意を持って不幸にしたいとか考えていないから。
浩二　でも君は確実に彼女たちを不幸にしている。

間。

泰子　私だけが責められているのかしら、これは。
浩二　別にそういうわけじゃない。
泰子　なんだかとても良くない流れね。
浩二　なにが？
泰子　あなたは、魔法を解こうとしてる。
浩二　それは違うよ。
泰子　どう違うの？　娘の涙にほだされた？　父性に目覚めちゃった？
浩二　違うんだ。ただ僕は娘を悲しませてしまったと、そう思ったから。
泰子　だから何？　なんで浮気してるって言ったの？　やめてよお父さんとか言ってもらいたかったの？　救われたかったの、貴方だけ。
浩二　妻に秘密を抱えながら君と付き合っていくことには特に罪悪感はなかった。彼女は僕なんて見てないからね。ただ娘はさ、思春期で反抗期ではあるけれど、可愛いものでね。だからちょっと、困った。
泰子　人はそれを後悔と呼ぶのよ。
浩二　まさか。
泰子　人の心は移り変わるものだから。だから言ったでしょ。一時の病だって。

浩二　僕は捨てられるのか？

間。泰子、「私が捨てられようとしてるのよ」と言いそうになるがこらえる。

浩二　(何も気づかず)そういうことか。

泰子　(精一杯の強がり)女々しい男は嫌いよ。

照明変化。浩二、泰子はけ。

※会話中に千代と亜紀入り。

○シーン１４「放課後の教室」

千代　花菜、あれ、持ってきた？

花菜、千代と亜紀がいる下手エリアに移動。

千代　何、泣いてるの？

花菜　違う。ちょっと目にゴミが入ったみたいで。

花菜、涙を拭う。

千代　なんだか私が悪者みたいになるから泣かれてもねぇ。

花菜、封筒をテーブルに置く。千代、中身を確認する。凝っと見ている亜紀。その視線に気づく千代。

千代　先生、この封筒の中身、何が入っているか気になりますか？

亜紀　そうね。何が入っているの？

千代　白々しいなぁ。逆にこっちが白けちゃうから、私が疑いを持てないぐらいに騙してくださいよ。この中身が何なのか薄々気づいてはいるんだけどねってのが伝わってきてるんですってば。

亜紀　わからないから本当に。

千代　まあいいですよ。それならそれで。ジャジャン！　クイズです。この封筒には何が入っているでしょーか？

亜紀　手紙かしら。

千代　ハズレ。他には？

亜紀　あとは、そうね、あ、私ね、毎年お年玉年賀はがきで切手が当たるんだけど、それを封筒とか（で管理してたりしてね。）

千代　(食い気味で)ハズレ。他には。あっ、ていうか今のわざとですか？
亜紀　何が？
千代　何がじゃないでしょ。
亜紀　それより戸田さん、進路の件なんだけどね、やっぱり大学には行った方がいいと思うのよ。大卒が応募条件になる会社がやはりまだ大半だからね。
花菜　先生。
亜紀　え？
花菜　何に悩んでいるのとか進学しないのとか相談事があればいつでもとか言っている先生には何が見えているんですか？

千代、離れて楽しそうに二人の様子を眺めている。

亜紀　私は生徒のことを一番に考えて、
花菜　先生が一人でも多く進学をさせたいと思っているのは私たち生徒の親たちに高い評価を貰いたいって話ですよね？
亜紀　先生は戸田さんの味方よ。

間。

千代　あーあ。出ちゃったよ。
亜紀　何？　え？
千代　(悪意あるデフォルメものまね)なに？　え？

千代、亜紀に近づいていく。

千代　味方ねぇ。その言葉の効力、先生考えたことありますか？
亜紀　効力？
千代　大人が使う味方って言葉、私達が最も嫌っているってこと知っていますか？
亜紀　嫌いって。先生は生徒のことを守るのが仕事。戸田さんも佐川さんも私は大切に想ってるし。大事な生徒よ。
花菜　封筒からだいぶ離れましたね。
千代　ほんとだ。私、封筒について質問してたのに。あ！　これも作戦ですか？
亜紀　封筒は手紙を入れるもの。それでいいでしょ。その中に何が入っているかなんて大した話じゃない。違う？
千代　違いますよ。今起きてることを受け入れて理解して、それで先生はやっと私達の世界の一部分を見ることが出来るんです。先生は今その権利を放棄されたんです。

花菜、千代の手から(あるいは机上にある)封筒を手に取り、亜紀に差し出す。

花菜　見たら後には引けないですから考えて下さい。次にどう行動するか。

亜紀、封筒を見つめる。戸惑い、躊躇い、手を伸ばし、止める。指先がようやく封筒に辿り着こうとした瞬間、花菜は封筒を持っている手を下ろす。

花菜　行こう。

千代　いいよ。

花菜、封筒を千代に渡す。千代、鞄にしまう。そのまま千代と花菜はけ。暫く立っている亜紀だが、一気に力を失って椅子に座り込む。数秒後照明変化。亜紀はけ。

○シーン15「いつもの喫茶店」

前シーンの間に泰子、すみれ、芙美子入り。上手椅子に座る。

泰子　さっきのウェイトレスの顔見た？

すみれ　ひきつってたわね。

芙美子　どうしてだろう？

すみれ　また騒がしくすると思ったんじゃない。

芙美子　そんなことしないのにね。

泰子　今日集まってもらったのは。

すみれ　契約書なら書いたでしょ。

泰子　その契約書についてだけど、あれ、なしで。

間。

すみれ　はぁ？　なしってなによ。

泰子　言葉の通り。なかったことで。勿論、取っておいてもらっても構わないけど。

芙美子　もう少しわかりやすく説明してくれる。

泰子　気づいちゃったのよ。

すみれ　馬鹿なことだったって。

泰子　そうじゃない。

すみれ　人に愛されない原因？

泰子　違うわよ。貴方いちいち気に障ること言うのね。そうじゃなくて、死んだ後のことなんて、よく考えたらどうでもいいなって。生きている間に起きていることだけが重要なんだって思えたのよ。

芙美子　そりゃそうだよ。美味しいものだって生きているから美味しいって思えるんだもの。だからさぁ、今度自由が丘にあるケーキ屋さんに付き合ってよ。
すみれ　あなた、また太るわよ。
芙美子　ひっどいぃ。でも私知ってるんだから。
すみれ　なにを？
芙美子　私、スーミンよりも体脂肪率は少ないんだからね。
すみれ　そんなの自慢になりません。
泰子　本当にお店追い出されるわよ。あ、あと、すみれ。
すみれ　なに？　あなたも私が隠れ肥満だって言いたいの？
泰子　違うわよ。ただね。…ごめんなさい。

すみれ、芙美子も何故泰子が謝ったのかわからず。

芙美子　え、私には？
泰子　あなたはバナナクッキーでも食べてなさい。
すみれ　でも、なによ、ごめんって？
泰子　なんとなく。必要だと思ったから。

間。暫くしてすみれ、納得顔をするが、浮気のこととは違うことで謝っているのだと思いこんでいる。例えば友達に契約を迫ったこととか。

すみれ　わかった。許す。私心広いからさ。
芙美子　え、何？　分かったの。私全然分かってないんだけど。
すみれ　あなたはバナナでも食べてなさい。
芙美子　バナナクッキーだからね。のけものはイジメだからね。子どもたちがマネしたらどうするの。

芙美子の膨れ面を弄ぶすみれ。二人の姿を見つめる泰子。

泰子　ねえ貴方達。私が死んだらさ、（葬式に来てよね。気持ちが今と変わらずにいてくれたならさ。）

ＳＥ黒電話の鳴っている音。照明変化。３人はけ。

第１話『善意と悪意と幾許かの優しさ』　了

第２話『（１＋１）１＝１という数学的誤りと悲劇的側面に関する考察』

○シーン１「森の中。穴を掘る人影」

前のシーン黒電話の音ＦＯ。ＳＥ土を掘る音。森の中。暗闇。蠢く人影、下手エリア。喜久子、スコップで穴を掘っている。息が上がっている。暫くして永島が台車を押して入り。台車にはブルーシートが被せられている。遅れてセレーナ入り。喜久子、作業を止めて二人を見る。

喜久子　ちょっと、何で持ってくるの。
永島　　え、だってこれのために穴掘ってるんだろ。
喜久子　それはそうだけど、掘り終わってからでいいじゃない。
永島　　行ったり来たりはごめんだぜ。なぁ？
セレーナ　　ゴメンだわ。車まで意外と歩くし。
永島　　ここまで来るのに何歩ぐらい歩いた？
セレーナ　　歩数は数えてないわ。え、数えてた？　もし数えてたら笑えるんだけど。
永島　　数えてないって。笑われたくないし。
セレーナ　　それってさぁ。本当は数えてましたってことなんじゃないの？
永島　　はぁ？　違うって。
セレーナ　　怪しくない？　ねえ、怪しいわよねぇ？
喜久子　よくわからないわ。
セレーナ　　わからないって逃げ方、やめた方がいいわよ。
喜久子　なんでよ？
セレーナ　　言われた方は言った方の想定していない程度でイラッとするから。
喜久子　ああ。
セレーナ　　ああって？
喜久子　いや、そういうものかなって改めて思ったから。
永島　　じゃあ、これ戻してくればいいのか？　え、二度手間じゃない。もう戻さなくて良くない？
喜久子　戻してきて、お願いだから。
永島　　何で？
喜久子　もし誰かが突然現れて、「それは何ですか？」って聞かれたら、どう答える？
永島　　えーと、荷物？
喜久子　じゃあ、「そちらの穴は？」って聞かれたら。
永島　　聞かれないでしょ。つーか、誰もいないし来ないって。心配しすぎなんだよ。
喜久子　誰も来ない保証ないじゃない。来たら聞かれるよ。私スコップ持ってて、その横には穴があるんだから。交互に見比べて思うわよ。ははーん、何か埋める気だなこいつって。
永島　　じゃあそいつも埋めるさ。

喜久子　そういうわけにはいかないじゃない。
永島　でもよ、もう後戻り出来ないところまで来てるわけだろう。そんなお前を助けてやろうって俺もセレーナも来たわけだしさ。…セレーナ、何してんの？

自撮りを撮ろうとしているセレーナ。

セレーナ　記念写真。(シャッターが切られる)
喜久子　やめてよ。
永島　その写真どうするんだ？
セレーナ　埋葬なう（って投稿しようかなって）
永島　ブラックジョーク。背景ぼかしとけよ。
セレーナ　ぬかりなく。
喜久子　真面目にやってよ。お願いだからさ。
永島　大丈夫だって。
喜久子　全然、大丈夫じゃない。

SE固定電話の着信音、コピー機の音。永島、セレーナ台車とスコップ持ってはけ。美代子入り、一恵入り(喜久子バッグを持ってくる)。エリアは上下。**照明変化**。

○シーン2「オフィス。虐げられる女」

美代子の手には企画書。

美代子　なんですか、これ。
喜久子　え？
美代子　え、じゃなくてですね。
喜久子　(少し考えを巡らせて)文字？
美代子　そんなこと言ってるんじゃないんです。
喜久子　ダメですか、動物カメラマン特集。
美代子　「動物カメラマン・佐伯涼子の見ているセカイ」ね。
喜久子　はい。
美代子　私はですねこの企画書のクオリティについて言っているんです。他の人だったらこの十倍も二十倍も同じ題材で面白い構成、内容に仕上げてきますよ。これ何度目の注意になりますか。他の人にも聞いてみましょうか。私があなたに注意するのが何度目かって。もしかしてすぐに人の言葉を忘れちゃう人？　だったらメモとかしてもらってもいいですか？　それもできませんか？　分かりました。ではですね。

喜久子　いや、大丈夫です。
美代子　あなたが大丈夫とかそんなこと知りませんよ。私が大丈夫な企画書を提出して下さい。今すぐ。ほら、メモ！

喜久子、慌ててメモをする。書き終えてから。

喜久子　あの、でも、それは難しいというか、無理というか。今出せるのがそれなので。
美代子　分かってますよ。分かった上で言ってるんですけど。そのぐらいのことやってのけないと、あなたバイトからやり直しますか？　メモ！

何を書けばいいのかわからないまま「バイトからやり直し」とメモをする喜久子。

喜久子　(書きながら)すみません。すぐ直します。
美代子　いつまでに出来ます？　私、午後には外出してしまうんですが。

言われなくてもメモをし始める喜久子。『午後外出』

喜久子　お戻りには？

間。

美代子　資料を見るためだけに私に帰社しろって言ってますか？
喜久子　メールで。
美代子　メールで？
喜久子　送っておきますので、お手隙の際にご確認頂けますでしょうか。
美代子　でもそれっていつまでに送れるものなんですか？　明日の会議で必要な資料が今時点でまったく出来ていないとして。
喜久子　出来るだけ早く。
美代子　出来るだけ早くというのは。あのですね、曖昧なことを言うのやめてもらえます？
喜久子　すみません。
美代子　もう謝るとかもいいですから早く着手して下さい。時間は止まることはないんですから。(携帯が鳴りすぐに出る)はい、芳原です。

佐伯涼子入り。カメラを構えつつ電話をしている。

涼子　あ、みーちゃん、佐伯です。
美代子　お世話になってます。どうされたんですか、佐伯さん。え、いまどちらに。今度飲みましょうよ。

涼子　今度今度って言うけど、逃げ回ってるのはあなたの方でしょ。全然連絡よこさないし。それと佐伯さんって。え、佐伯さんって。こっちはみーちゃんって愛をこめて呼びかけているのに。
美代子　じゃあなんて呼んでほしいんですか？
涼子　りょうたん。
美代子　佐伯さん、私達、もうそんな若くないじゃないですか。
涼子　心はいつも高校生。
美代子　痛くないですか、言ってて。
涼子　多少。
美代子　それに高校生だと飲めないじゃないですか、お酒。ということでいつ行きます？
涼子　いつって言われてもねぇ。
美代子　お店も予約しちゃいますよ。新橋と錦糸町、好きな方選んでいいですよ。
涼子　今新潟だからさ。
美代子　えーー、行けないんですか？　行かないんですか？
涼子　じゃあ東京に帰ったらでいい？
美代子　それいつなんですか？
涼子　動物の都合次第だからこればっかりは。
美代子　ちなみに今追ってるのって何ですか？
涼子　ツチノコ。
美代子　ツチノコ？
涼子　…っていると思う？
美代子　うわぁ、びっくりさせないでくださいよ。
涼子　いたら撮ってみたいなって。
美代子　実際に撮れたのは？
涼子　野良猫が３匹とカラスが二羽。
美代子　ツチノコは遠いですねぇ。明後日でいいですか？
涼子　もう少し粘らせてよ。
美代子　だってないですよ。無理無理ツチノコ。あ、そうだ。今新潟なんですよね。だったら私の実家で飼ってる光代でいいと思います。
涼子　と思いますって言われてもね。って言うかミツヨって何？　犬？　猫？
美代子　人間で言うともう５６歳ですが、私の母です。
涼子　なんで新潟に来てみーちゃんのママを撮らないといけないのよ。私動物の写真が専門なんですけど。
美代子　光代だって動物です。
涼子　その前にヒトだから。…(蠢くものに気づいて)ちょっと待って。電話切るわ。
美代子　どうしたんですか？

涼子、動物が逃げないようにゆっくり迫りつつはけ。

美代子　もしもーし。変わった人ですねぇほんとに。

美代子、携帯をデスクに置きつつ、じっと立っている喜久子に対して。

美代子　え、まだいたんですか。早く席に戻って仕事をして下さい。立ってるために給料払ってるわけじゃないんですから。

喜久子、頭を下げると自席(上手エリア)に戻る。

一恵　大丈夫？　今日も長かったわね。

喜久子　短い方だと思う。

一恵　アビスパとホークスどっちか負けたのかしら。

喜久子　知らない。

一恵　福岡出身でもないのにね。きっとあれだわ。彼氏が福岡出身なんだと思う。

喜久子　そもそも彼氏がいるのかすら怪しいけど。

一恵　お、言うね。ランチでもあとで行く？　ドリンクぐらいおごるよ。

喜久子　時間ないからいい。

一恵　そう。残念。

一恵、仕事に戻る。SEキーボードを叩く音(複数)、シュレッダーやコピー機の音が重なっていく。**照明変化**。一恵、美代子はけ。永島とセレーナ入り、下手エリアへ。SEテレビ(バラエティ番組か何か)の音。

○シーン3「帰宅」

喜久子、バッグを持って上手エリアから下手エリアへ。

喜久子　ただいま。

永島　お帰り。やっぱ最近このタレント見かけてなかったと思ったらさ、そういうことだったんだな。

セレーナ　じゃあ仕方ないよ。いいやつじゃん。私イメージ変わったわ。

永島　謝っておいたほうがいいんじゃない。

セレーナ　テレビに向かって？

永島　そう。

セレーナ　マジ？

永島　まじだよ。

セレーナ　(テレビに)じゃあごめんなさい。

永島　気持ち伝わってこないんだけど。
セレーナ　これ以上は無理無理。笑えてくるから。
永島　そういうところがダメなんだって。
喜久子　あのさ、楽しそうなところ悪いんだけどね、ここ私の家だよね。
永島　ああ？　そうな。そりゃそうだ。ここは喜久子の家だよ。
喜久子　じゃあ、誰なの、その人。
永島　セレーナ。ほら、言われる前に挨拶だろ。出来てねぇよな、そういうところ。
セレーナ　はじめまして。セレーナです。
喜久子　本名じゃないでしょ。何やっている人？
永島　それ聞いてどうするんだよ。
喜久子　どうするってこともないけど。
永島　じゃあ、聞くなよ。聞いていいことと悪いことがあるんだよこの世の中には。それ聞いてお前は差別をするのか？　もしセレーナが前科のある殺人犯だって聞いたら扱いが変わるのか？
喜久子　差別とかはしないけど。
永島　何だよその歯にものが挟まったような言い方は。
喜久子　ごめんなさい。
永島　そう。このぐらい感情入れないと謝罪にはならないんだって。
セレーナ　勉強になったわ。ありがとう。
永島　そんなところでずっと立ってないで座れよ。お前の家なんだからさ。
喜久子　うん。

喜久子、荷物を下ろして、椅子に座る。

喜久子　あのね。ちょっと話があってね。
永島　悪い。俺、今テレビ見てるんだわ。
喜久子　ああ、うん。じゃあ、また今度。
セレーナ　ねえ、ハル。今度さここ連れてってよ。
永島　めんどくせぇ。つーか、恋人じゃねぇから。
セレーナ　連れてってくれてもいいじゃん。そして美味しいものでも奢ってよ。
永島　お前のそういう性格、(ちょっと間)嫌いじゃねぇな。でも行かねぇから。
セレーナ　いいもん。別の人に連れてってもらうもん。
永島　そうしろそうしろ。
セレーナ　お酒、まだあったっけ？
永島　お前が飲みすぎてなければあるんじゃねぇの。

セレーナはけ。**照明変化**。**SE**森の音。セレーナ、スコップを持って入り。喜久子、永島、スコップを受け取ってすぐ掘り始める。セレーナはけ。

○シーン４「森の中。少し休憩」

掘った穴の中(下手エリア)。永島、体を反らせる。

永島　なぁ、大分掘ったからさ、ここらで休憩入れないか。
喜久子　まだだよ。全然掘れてないよ。
永島　全然ってことはない。え、全然か、これは？
喜久子　…(見回して)全然ってことはない。うん。あ、誰か来たらどうしよう？　この穴見られたらどうしよう。
永島　だから来ねぇってーの。来たら来た時に考えろよ。起きてもないこと心配しても仕方ないだろう。
喜久子　ハルくんはそうやって問題を後回しにする。
永島　そう言うなって。手伝ってやってるし。
喜久子　やってるしって何？
永島　え？
喜久子　本当だったら巻き込まれたくなかったって言ってる？
永島　まあ、そりゃあ、ねぇ。
喜久子　あんまりだよ。
永島　冗談だって。今のは言葉の綾だろ。
喜久子　ほんと？
永島　よく考えてもみろ。俺、お前のこと好きだろ。彼氏だろ。でも警察に自首しろとか言わなかったわけだ。
喜久子　うん。
永島　そういう考え持った俺が彼氏で良かったな。
喜久子　うん、ハルくんでよかった。
永島　車も出してやるし、掘るのも手伝ってやる。埋めるのだってな。だからさ、ちょっとぐらい休憩してもバチは当たらねぇよ。
喜久子　でも。
永島　それに、ちと手やら腰やらが痛いんだよ。こんなに肉体労働したことないからさ。俺、どちらかといったらホワイトカラーじゃない。
喜久子　わかった。
永島　よし。

照明変化(中央エリア)。セレーナ入り。休憩する3人。ＳＥ夜の森の音。

セレーナ　飲み物とか食べ物とか買ってくればよかったね。
永島　そうだな。今度からはそうしよう。

セレーナ　失敗は成功のもとってやつね。
永島　人はしくじりから反省をすることで学び大成していくんだ。
喜久子　のんきなものね。
セレーナ　のんきなぐらいが日本人にはちょうどいいのよ。
喜久子　…
セレーナ　なに？
喜久子　やっぱ偽名なんじゃない。
セレーナ　ん？　源氏名？
喜久子　お店、どこ？
セレーナ　上野。今度あなたも来たら。
喜久子　嫌よ。
セレーナ　なんで？
喜久子　私、お酒飲めないから。
セレーナ　じゃあ、フルーツ盛り合わせでも頼んでればいいわ。
喜久子　高そう。
セレーナ　だいぶね。
喜久子　ねえ。
セレーナ　なに？
喜久子　生きているの、楽しい？
セレーナ　楽しいよ。悲しいことも同じぐらい多いけどね。
喜久子　そういう時はどうするの？
セレーナ　そういう時？
喜久子　悲しいことがあったら。
セレーナ　寝て忘れる。食べて忘れる。楽しいことやって忘れる。
喜久子　忘れられるって素敵ね。
セレーナ　忘れることは人間の特権よ。あなたも忘れてしまったらいいじゃない。
喜久子　そんな簡単に忘れられるものじゃないわ。
セレーナ　私が許す！
喜久子　何なの、この人？
永島　セレーナだって。この前挨拶したろ。お前がやばいことになったって言ったら私も行くって聞かなくてさ。
喜久子　たった一回しか会ってないのに。
セレーナ　回数じゃない。こういうのはフィーリング。
喜久子　フィーリングねぇ。

喜久子、つい笑ってしまう。

セレーナ　なに？

喜久子　いいえ、あなたがね、(友達だったら良かったのに)。

SE風が吹く。木々が揺らめく。葉っぱがざわつく。徐々に音がオフィスの音に。
３人はけ。美代子、一恵、涼子会話中に入り。空いている椅子に座る。**照明変化**。

○シーン５「オフィス。残業。家にはセレーヌ」

涼子　ここにこうして閉じ込められて３時間が経つんですが。
美代子　この会議室、何時まで取れてる？
一恵　終日大丈夫です。
美代子　まだ時間はありますね。
涼子　監禁だ。これは最早監禁じゃないか。
一恵　そう言わないで下さいよ。うちとしては涼子さんが企画に対してもう少し協力的になって頂けたらなと。
涼子　協力してるじゃない。ちゃんと写真だって撮ってきてるじゃない。
美代子　ええ。さっき写真は全部拝見しましたよ。ステキなヘビやトカゲにあとはカエルでしたよ。でもいつ誰が爬虫類縛りで撮ってきてほしいって注文しましたか？
涼子　光代は？
美代子　みーちゃんママには会ってないわよ。
涼子　なんでですか？
美代子　なんでですかって、住所知らないし。って、違うから。ほら、爬虫類好き女子って最近増えてるんだって。それにカエルは両生類です。そんな区別もつかずによく雑誌の編集長なんてやってられるわね。
涼子　そんな区別がついたって自慢になんか一ミリもなりませんから。
美代子　みーちゃん、悔しがってるねぇ。
涼子　誰が。いいですか。たとえ百歩譲って爬虫類とか両生類が好きな女子が増えているとしてもですね、うちの雑誌の読者は違うんですよ。どちらかと言えば犬とか猫とか、
美代子　そんなの他の雑誌でも取り上げてるし。そっち買えばいいじゃん。
涼子　そこは今グイグイ来ている涼子さんの実力で他誌との差別化を図った写真を提供してもらいたくてお願いしてるわけじゃないですか。

間。

涼子　私、グイグイ来てるの？
一恵　ええ、そりゃもうググイって感じで。
涼子　そっかぁ。ググイかぁ。グイグイのググイ、かぁ。ふふふ。
一恵　ふふふ。

美代子　ちょっと休憩しましょうか。
涼子　休憩なんて取っている場合か！　撮るならいい写真だろう！
一恵　よ！　新進気鋭のフォトグラファー、佐伯涼子！
美代子　上げすぎじゃない？
一恵　このぐらいでいいんですって、こういう人には。
涼子　なに？
一恵、美代子　なんでもありません。
涼子　じゃあ、引き続き何を撮るかについて考えましょうか。
美代子　ここはパンダとか。
涼子　却下。人気や流行なんかにあやかって他の雑誌が出し抜ける？　否！
一恵　一理ありますね。じゃあ、ここは柴犬を。
涼子　しばいぬぅだぁ？　いや、かわいいけどさ、かわいいんだけどさ、そうじゃないじゃない。今話してるのは。
一恵　違いますか？
涼子　そこで私考えました。考えて考えた結果、一つの答えに辿り着きました。
美代子　聞きたくない気がしています。
一恵　そんなこと言わずに聞いてみましょうよ。もしかしたらとんでもないグッドアイディアが出るかもしれませんし。
美代子　どうぞ。
涼子　ツチノコ。
美代子　ああ、そうですね。世界の珍しいキノコなんていいかもしれませんね。
涼子　ツチノコだって。

間。そこには自信満々の涼子だけが異質のものに見える。

美代子　ないないない。ツチノコって噂はあっても実際に捕獲した話、ないじゃないですか。ということは存在していないのと同じですよね。
涼子　うーん、でもさ見かけた話があるってことは存在はしているってことにはならないかなぁ。
美代子　例えばツチノコを捕まえたとして、それがツチノコだって誰が証明するんですか。
涼子　矢追純一とか大槻義彦とか。
美代子　宜保愛子とか織田無道とか？
涼子　宜保さんは亡くなってるじゃない。
美代子　そうでしたね。
涼子　別に私ふざけて言ってるわけじゃないんだけど。
一恵　あの、いいですか？
涼子　どうぞ。
一恵　何故涼子さんはツチノコにこだわ(っていらっしゃるんですか？)

涼子　の方が面白いじゃない！
一恵　でもうち女性誌じゃないですか。
涼子　知ってる。何か問題が？
一恵　いや、読者の誰がツチノコ見て「きゃー、これかわいい」って言いますか？
涼子　潜在的にいるって。ツチノコの写真見て、「きゃは。ツチノコ、かわゆすなー、ギザかわゆす」って、
一恵　完全にしょこたんじゃないですかそれ。しょこたんは読者じゃないですから。
涼子　じゃあ何たんならいいのよ。ノンタンでもいいわよ。千秋連れてきなさいよ。
美代子　脱線しまくりだからちょっと落ち着きましょう。実際問題、うちはムーじゃないですからねぇ。出来ればかわいい動物写真がほしいんです。
涼子　つまんなーい。そんなどこにでも在るような写真撮って何が嬉しいのか。それは雑誌社の、編集者の怠慢ではないか。そして同時にそれは読者を馬鹿にしている行為ではないのか。読者はそんな写真に辟易しているのだよ。
一恵　そこはプロなんですから、野良猫でも一味違う感じに撮ってきて下さいよ。
涼子　つーてもね、あ、そうだ。野良猫で思い出したんだけど、この前新潟で撮ってきた野良猫写真見る？
美代子　ああ、結局野良猫とカラスでしたっけ？
涼子　野良猫とカラスを笑うものは野良猫とカラスに泣かされるってもんだよ。

涼子、カメラを美代子に渡す。美代子その写真を見て、うっとりと見入っている。

美代子　カワユスな。
涼子　ギザだしょ。
美代子　腕は良いんですよねぇ、ヒトとし残念ですが。
涼子　そんなに褒めないでよ。照れるじゃない。
一恵　聞こえていない。肝心なところが聞こえていない。…身近な動物写真、駄目ですかねぇ。
涼子　それがいいなら頑張るよ。でもねぇ。あ、麒麟は？
一恵　どっちですか？
涼子　と言いますと？
一恵　動物園に居るあれでいいんですよね。
涼子　えーと、漢字で書く方のじゃ駄目？
一恵　駄目ですよ。だってあれ、
涼子　伝説上の霊獣だよ。撮影出来たらすごくない？
一恵　今自分で伝説って。だからうちムーじゃないんですって。それじゃあドラゴンとか河童でとかもないですから。
涼子　んじゃあイエ
一恵　イエティもビッグフットもフライングヒューマノイドもなし！

涼子　つまんない雑誌だわぁ。
一恵　つまらないとかじゃないんです。現実的な仕事をして下さいって。ちょっと美代子さんからも何か言って下さいよ。
美代子　うん、もうちょっと待って。今とても私癒やされてるんですよ。
涼子　もうその野良猫でいいんじゃないかな。
一恵　うわ、やる気が一気に感じられなくなってるし。
涼子　私のやる気を奪ったのはあなた達でしょ。…あれ、そういや喜久ちゃんは。これって彼女の企画でしょ。そう聞いてるんだけど。外出か何か？

美代子、カメラをすっと涼子に返して。

美代子　彼女、なんで居ないんでしたっけ？
一恵　私に聞かれても。電話してみましょうか？
美代子　いいです。自分の仕事であるという認識がない人に用はありません。
涼子　厳しいねぇ、相変わらず。
美代子　彼女が甘いんです。
涼子　誰だって最初は不慣れなもんだと思うけどねぇ。

照明変化。涼子はけ。

美代子　そうだ。宗田さん。
一恵　ギャグですか？
美代子　やめてくださいよ。
美代子　今日って暇だったりします？
一恵　暇ではないですけど。
美代子　じゃあ、残業できませんよね？
一恵　今日はちょっとＮＧですね。
美代子　そうですか。
一恵　すみません。
美代子　え、用事ってなんですか？　あ、デート。
一恵　そういうプライベートのことはいいじゃないですか。
美代子　ですね。

一恵、お辞儀をして自席(上手エリア)に着く。
喜久子入り。

美代子　原口さん、今何時だと思っていますか？
喜久子　え、会議は５時からですよね。

美代子　何言ってるの？　１５時からよ。もう佐伯さんとの会議は終わっていますよ。
喜久子　え、でも。
美代子　でもとかまたお得意の言い訳ですか。
喜久子　そんな、違います。
美代子　じゃあなに？　あなたが１５時からの会議を５時からだと認識していた。これは単なる勘違いでしょ。だからメモって言ってるのに。そのメモが間違ってたんですか？
喜久子　はい。５時と記載していました。
美代子　じゃあしょうがないですね、って話にはなりませんよね。それはわかりますか？
喜久子　わかります。
美代子　じゃあどうしますか？
喜久子　あとで佐伯さんには謝罪の電話を。
美代子　あなたがすっぽかした会議はもう開かれることはないんですよ。それに言いたくないですけど、あなたがいないことで意外と企画は詰められました。どうせまだ見ていないと思いますが、会議の内容に関してはメールを送っておいたので、確認の上、企画書を更新しておいて下さい。
喜久子　わかりました。

とぼとぼと席に戻ろうとする喜久子。

美代子　あ、それとは別件なんですけど、今日残業出来ます？
喜久子　すみません。用事が。
美代子　それは用事なんかじゃありません。ちゃちゃっとやれば数時間みたいな仕事ですよ。もしかして数時間も私の頼みには時間を割いてくれないというんですか？会議をすっぽかしたのに？
喜久子　いえ。そういうわけじゃないんですけど。でももう５時近いので。
美代子　だから残業出来ますかって聞いてるんじゃないですか。はいじゃあ決まりですね。申し訳ないんですが宜しくお願いします。詳細メールあとで送っておきますね。じゃ、お疲れ様。
喜久子　お疲れ様です。

美代子、会話中、帰る支度をしつつ。そのままはけ。喜久子、椅子に座る。

一恵　ごめん。私のせいだ。
喜久子　ううん。私が１５時を５時って勝手に聞き間違えたから。
一恵　でも。
喜久子　一恵さんは会議出たんでしょ。もしこれが私の聞き間違いじゃなかったら一恵さんが私に間違った情報を伝えたってことになる。そんなことないじゃない。

一恵、小さく頷く。

喜久子　しょうがないよ。こればっかりは。
一恵　うん。…でもさ、目の敵みたいにしてるよねあの人。耐えられそう？
喜久子　私は、うん、大丈夫。全然平気。
一恵　ひどくなったら会社に相談した方がいいよ。それ専門の部署というか担当者がいるはずだから。私、証人になってあげるし。
喜久子　ありがとう。でも宗田さんにも迷惑かかるといけないし。
一恵　いいのいいの。
喜久子　ほんとに、ありがとう。
一恵　ねえ、気づいてる？
喜久子　何を？
一恵　定時前だってこと。どんだけフライングするのよ。これから何処に行くか知ってる？
喜久子　ううん。興味ないし。
一恵　お琴教室だって。何その趣味は？　いつの時代の花嫁修業よ。
喜久子　人それぞれだしお琴は悪くないわ。
一恵　人にデートかなんて聞いてくるとかもほんと腹立たしいわね。
喜久子　そうね。あ、じゃ、私、残業だから。
一恵　ごめん、邪魔しちゃって。
喜久子　また話聞いてくれたらいいから。
一恵　了解。でも溜め込みには注意だからね。じゃあ、お先。
喜久子　お疲れ様。

一恵、はけ。**照明変化(徐々に暗くなっていき)**。自宅に電話をかける。電話に出る永島。この時点で二つのゾーンのみを残して暗く。

喜久子　あ、ハルくん。
永島　ちょっと遅ぇよ。何やってんの？
喜久子　ごめん、仕事終わらなくて。
永島　はぁ。今日は夕飯食べに行こうって喜久子から言ってきたんじゃん。それで残業ってありえないだろ。(セレーナに)なぁ。
セレーナ　なぁ。
喜久子　うん。わかってる。私が悪いよね。でも残業だししょうがない部分もあるでしょ。
永島　しょうがない部分ってなによ。事態をしょうがないで済ませていいわけ？
喜久子　だからこの埋め合わせはするわ。
永島　いいよもう。セレーナ、飯食いに行くぞ。

セレーナ　了解。背中とお腹がくっつきそうよもう。
喜久子　なんでセレーナがいるのよ。
永島　そんなのいいだろ。いてくれてよかったじゃねぇか結果的に。
喜久子　なにが。
永島　お前は帰ってこられない。俺は一人寂しく飯に行かずに済む。万々歳じゃないか。
喜久子　そうかもしれないけどさ。
永島　けどさ？
喜久子　だからね、私がもし残業もせずに帰れたら、約束通り帰れたらどうするの。どうしたの？
永島　そうしたらセレーナにはご帰宅願ったさ。
セレーナ　え、ご帰宅？　私ご帰宅？
永島　違う違う。今日はいいんだって。じゃ、切るから。
セレーナ　私ご帰宅じゃない。飯行く。
永島　お前何者だよ。

永島、笑いながら電話を流れで切る。喜久子の耳にはその笑い声だけが残った。

喜久子　残業がんばれぐらい、言え。

照明変化。森の中。闇。座っている永島、セレーナを見遣る喜久子。

○シーン６「森に蠢く生物在り」

永島　なあなあ。なあって。
喜久子　なに？　そろそろ再開しよう。
永島　まだいいって。身体が休みたがってるんだよ。
喜久子　ハルくんはいっつもそうじゃない。休み過ぎなんだよ。
永島　俺の何が休み過ぎだってんだ。ちゃんと働いてるし。
喜久子　働くのは当たり前のことでしょう。
永島　ああ、そういう物事の考え方俺嫌いだな。当たり前のことじゃないんだぜ働くって。働く場所があって、働く気持ちがあって初めて働けるんだから。喜久子は恵まれてんだよ働けて。
喜久子　(小声で)恵まれてるんだったらこんな気持ちにはなってないんだよ。
永島　なに？
喜久子　何でもない。で、なに。
永島　なにって？
喜久子　さっき何か呼んでたでしょ。なあなあって。
永島　ああ。それか。忘れてた。

喜久子　それで。
永島　いや、大した話じゃないんだけどさ、この辺りの話、知らない？
喜久子　この辺りの何？
セレーナ　あ、それって殺人事件の現場って話？
永島　お前に回答権与えてねぇだろう。勝手に答えてんじゃねぇよ。
セレーナ　ごめん。フライング。
喜久子　殺人事件って？
永島　実際ここで起きたんだよ。テレビのニュースでもやってた気がするけどな。
喜久子　覚えてない。
セレーナ　私、観たわ。日テレの朝の。
喜久子　知らない。
永島　なんで知らないんだよ。結構大きく取り上げられてたけどな。
セレーナ　ねぇ。
喜久子　テレビ見てる余裕があなた達よりないからよ。
永島　それは言えてる。
セレーナ　私だってそれほどヒマってわけじゃないんだけど。
永島　店終わって朝のニュース見ながら寝てるじゃないが。
セレーナ　睡眠は大事だもの。暇で寝てるわけじゃないもの。
喜久子　で、どういう事件なのよ。
永島　興味ある？
喜久子　多少。
永島　(不満そうに)多少？
セレーナ　多少？
喜久子　大いにあります。
永島　最初からそう言えよ。なぁ。
セレーナ　被害者は女の子だったっけ？　ＯＬ？　女子高生？　まあ、その子がこの森で殺されたのよ。ホントに怖いわよねぇ。私なんかキレイだし、若いしで、狙われちゃう。
永島　何でお前が言うんだよ。お前に説明権与えてねぇし。
セレーナ　フライングフライング。でも私キレイだしょ？
永島　だしょってなんだ、だしょって？　反省してるならそこでスクワットでもしろよ。
セレーナ　今日スカートだからさ。
永島　だからなに？
セレーナ　見えちゃうからさ。
永島　見えない程度にやるんだよ。
セレーナ　それはスクワットなの？
喜久子　あのさ、スクワットの話はもういいから。で、その殺人事件があったのがここなのね。

永島　だったと思うぜ。で、俺達もまたここにってね。何かが呼ぶんかねぇ。
喜久子　わからないわよ。でも私、そういう非科学的なこと信じないから。
永島　だろうな。
セレーナ　非科学的なことも信じたら面白いものよ。
永島　スクワットはどうした？
セレーナ　うやむやになったからいいかなって。
永島　そういうとこダメだよなぁ。

セレーナ、スカートを気にしながらスクワットを始める。それを見ている永島。

永島　(スカートを気にしながら)出たりしてなぁ。
喜久子　何が？　幽霊とか言わないでよ。
永島　でもよく言うだろう。こういう話してると近寄ってくるらしいぜ。
喜久子　やめてよ。
セレーナ　私は幽霊でも会いたい人がいるなぁ。
永島　誰よ？
セレーナ　教えなーい。どうせハルの知らない人だし、って覗いてんじゃないよ！
永島　いいだろう。どうせ見えないんだからさ暗くて。ああ、男って生き物はこれだからなぁ。なぁんで昼間じゃねぇんだよ！

永島、もんどり打って、地面をのたうち回る。

喜久子　気は済んだ？
永島　(冷静になって)だいぶ。
喜久子　じゃあ、そろそろ再開しようか。
永島　ああ、一瞬忘れられていた現実が一気に押し寄せてきた感じするわ。
セレーナ　がんばれぇ。
永島　気がないエールとかまじいらないから。炭酸の抜けたソーダ水かよ。
セレーナ　違うわ。
永島　分かってんだよ。比喩だろうが。
セレーナ　ああ、比喩か。(わかっていない)

スコップを握りしめる喜久子。嫌々持って立ち上がる永島。そこにSEガサガサという葉っぱがこすれるような音が徐々に大きくなっていく。

永島　なんだ？
セレーナ　なんか来るんじゃない？
永島　何が？

セレーナ　幽霊？
永島　嫌だぜ俺そういうの。
セレーナ　何で？
永島　だって物理的な攻撃とか効かないだろ。
セレーナ　幽霊だもの。
喜久子　静かに。幽霊なんているわけがない。いたとして人でしょ。しかもこんな時間に森の中にいるってことは。
永島　殺人鬼！
喜久子　あるいはパトロール中の会いたくない職種の。
セレーナ　それで先手必勝だよ。

と言ってスコップを指差す。

永島　おうよ。(とは言うがビビってる)

喜久子、冷静にスコップの持ち方を変えて、打撃を加えられるように持ち直す。SEのガソガサ音が大きくなり何かが出てきた。涼子入り。

涼子　ちょ、ちょっと待って。不審者でも獣でもありませんから。
永島　誰？　何？
涼子　怪しいものではほんとにないですから。そのスコップを下ろして下さい。
喜久子　え、佐伯さん？

涼子、喜久子を見る。

涼子　喜久ちゃん？　え、ええ、何、この偶然。え、最早必然？
喜久子　どうしたんですか？　あ、写真ですか？
涼子　そそ。お仕事だよ。あーびっくりした。危うくイノシシか何かと間違えられて殺されるところだったよ。

反応が出来ない面々。

セレーナ　この人、誰？
涼子　おたくこそどなた？　森に来るのに似つかわしくない格好だし。森をなめてるでしょ。
セレーナ　なめてないよ。ただ非常事態だったから着の身着のままにここに来たんだから。
涼子　非常事態？

喜久子　あーー、えーと、今日の獲物はなんですか？
涼子　ん？　ああ。フクロウ。全然出てきてくれなくてね。もしかしたらあなた達がいるからかもね。さっきからガヤガヤなんか言ってたでしょ。
喜久子　ごめんなさい。まさか撮影中だとは思わなかったので。お仕事の邪魔でしたよね？
涼子　うん、まじ、邪魔。殺意ってこんなに単純にわくんだなって、いい勉強になったわ。

反応が出来ない面々。

セレーナ　だから誰なのよ、あなたは？
喜久子　ご紹介しますね。こちら動物カメラマンの佐伯涼子さん。で、こっちがセレーナと永島です。
涼子　永島？　あ、喜久ちゃんの彼氏さん？
喜久子　ええ、まあ。
涼子　うわぁ、こんなところで会えるとはねぇ。じゃあ、プライベートで、え、森？
喜久子　まあ、プライベートで、森、ですかねぇ。
涼子　そうかぁ。森かぁ。森はいいよねぇ。
喜久子　いいですよねぇ。
涼子　でも皆さん軽装なんですね。
永島　だから非常事態だからって。
喜久子　ほら、近くに車止めてあって、荷物はいったん置いてきたんですよ。現地確認を優先して。
涼子　そうか。で、その穴は何？
喜久子　え、えーと。なんですかね。
涼子　そのスコップで掘ったのよね。え、プライベート？
喜久子　あ、温泉。このあたりの噂、知りませんか？　温泉が最近出たって。だからこうして、ねぇ。
永島　え？　んー、そうなぁ。そうだそうだ。
涼子　温泉ねぇ。

言葉に窮する喜久子。反して冷静になった永島はスコップの握りを変えた。**SE**葉っぱが風で揺れるような音。不気味な空気。そして徐々にキーボードを叩く音に乗り替わっていく。**照明変化**。喜久子のスコップはセレーナが持ってはけ。永島、涼子はけ。喜久子、椅子に座る。

○シーン7「オフィス。残業」

一恵入り。手にはコンビニの袋。

一恵　お疲れ様。
喜久子　え、どうして？
一恵　どうしてって。用事が終わったから、戻ってきちゃった。

一恵、自分の席について、コンビニのレジ袋から白い袋を取り出して見せる。

一恵　オフィスのクーラー強いよねぇ。ってことで肉まんとあんまん、どっちがいい？
喜久子　(逡巡して)肉まん。
一恵　素直じゃないんだ。
喜久子　なにが。
一恵　甘党なのに。ってことではい、あんまん。

一恵、喜久子にあんまんを渡す。おずおずと受け取る喜久子。

喜久子　あ、お金。
一恵　こういう時はありがとうって言えばいいの。
喜久子　ありがとう。
一恵　召し上がれ。

喜久子、あんまんを一口食べる。

喜久子　おいしい。
一恵　でしょう。コンビニにしてはやりよるっていうぐらいに美味しいわよね。

一恵も肉まんを頬張る。暫く食べる二人の画。そしてそっと、食べかけのあんまんを置く喜久子。それを見て一恵も食べることをやめる。

一恵　どうしたぁ。
喜久子　ううん。おいしいよ。おいしいんだけどね、胃が痛いんだよね。
一恵　うん。
喜久子　私、頑張ってるつもりなんだけど、足りないかな。
一恵　いいえ。十分やってると思うよ。それを評価できないやつが悪い。
喜久子　ありがとう。
一恵　どういたしまして。って、私言葉をかけてあげるしか出来てないね。
喜久子　あんまんくれた。

一恵、笑う。喜久子、つられて弱々しく笑う。

喜久子　私のこと心配で見に来てくれたんでしょ？
一恵　用事が終わったからだよ。
喜久子　用事ってなんだったの？　って聞いてもいい？
一恵　まあ、…実はさ、私、今度結婚するのよ。
喜久子　え？　それはおめでとうだね。
一恵　ありがとうだね。でね、旦那がさ、あ、正式にはまだ旦那じゃないんだけど、彼が結婚指輪買いに行こうって言うからね、二人してお店に見に行ったの。
喜久子　そうだったんだ。じゃあ、今つけてるのって婚約指輪？
一恵　うん。左手に付けてると色々と言われそうだからね。

一恵、そう言って右手の薬指を見せる。

喜久子　戻ってきてよかったの？
一恵　うん。気になる同僚がいるから会社戻っていいかなって旦那に聞いたらさ、それは行かなきゃダメだって。旦那、彼が言うんだからそりゃもう行くっきゃないって。だから気にしないで。指輪を買ってもらって気分が良くなってるついでに来てみただけだから。だからもう帰ってたら帰ってたでよかったし。私、ひとりオフィスで肉まんとあんまん食べて帰るだけだし。ついでついで。
喜久子　ついでか。ならいいか。
一恵　なんだと！　ってウソ、ウソ。でもまあ心配だったってのはホント。あの人、今日中に終わる仕事かそうでないかわからずに押し付けて帰るじゃない。ねえ知ってる？　あの人の勤怠、ほとんど定時上がりだって。
喜久子　知ってるよ。誰よりも早く帰ってるの見てるし。
一恵　だよねぇ。よく上司なんて管理職やってるよねぇ。あの人、なにも管理してないのに。
喜久子　だからさ、私、あの人が会社にやめさせられるのをずっと待ってたんだけどね。
一恵　うん。
喜久子　どうもそれ無理みたい。というか私がそれまで耐えられないと思うから。
一恵　うん。
喜久子　辞めようかな、会社。
一恵　なんで。
喜久子　え？
一恵　なんで原口さんが辞める必要あるの？
喜久子　だって、このままだと私、生きてるのも辛くなる。
一恵　だったらさ、(間)殺しちゃえばいいじゃん。
喜久子　何言って(るのよ)。
一恵　だってあんな人のために死ぬとかはなしだよ。人生なんて生きてればなんとでも

なるんだからさ。原口さんが死ぬってなら、もう殺すほかないって。正当防衛だよ。

喜久子　ただの殺人だよ。殺すなんて、私には出来ないわ。やっちゃいけないことだもの。

一恵　あ、違うって。本当に殺すんじゃなくてね、空想で、妄想で殺すの。気休めにしかならないけどさ、一瞬でも胸がすーーっとするから。私なんてあの人、何度も殺してるわ。これも正当防衛。

喜久子　怖い人。

一恵　そうよ、私は怖い人なんだから。あんまんを食べられたのも一生忘れないわ。

喜久子　返すわよ。

一恵　食べかけじゃない。

喜久子　…遠くに行きたいな。会社とかもうどうでもいい。

一恵　全部放り出して逃げてもいいじゃない。資料なんてシュレッダーにかけちゃいなさい。私、かけようか。

喜久子　(否定の意味で)いい。…うん、いいよ。

静けさと照明の暗い中、一恵、上手はけ。美代子上手入り。椅子に座ると同時に**照明変化(夜から朝に)**。

○シーン8「オフィス。朝」

喜久子、資料を手に、美代子のところへ。

喜久子　資料出来ました。

美代子　資料、ですか？

喜久子　はい。

美代子　ごめんなさい。なんの、資料ですか？

喜久子　昨日残業してやるようにと言われた資料です。

美代子　言い方。私、朝までかかってやるように指示しましたか？

喜久子　いえ。でも。

美代子　でもじゃないんですよねぇ。平気で朝まで仕事をされて、打刻を素直にされると私が人事にあーだこーだって言われちゃうの、分かってますか。あ、わかってやってるんだ。ひっどいなぁ。私なんてさっさとクビになってしまえばいいのにってそう思ってるんですよね。私の前では媚びた振る舞いをして、腹の中では何を考えているのやらですね。

喜久子　でも前回残業して、朝仕上げればいいと思って帰ったら、残業を指示するってのは朝には必要な資料だからって。

美代子　ちょっと待って下さい。え、あの、もしかして柔軟には考えられないタイプの人間だったりしますか？

喜久子　柔軟に？
美代子　ええ、ですからね、残業してくださいねって私が言ったことは全て明朝までに仕上げて欲しいという意味に取られても困るんですよ。むしろ昨日、貴方からいつまでに仕上げればいいですかって聞いてくれたら良かったのに。そうしたら朝までには必要なものじゃないから、ある程度やったら明日に回してもいいですよって言えたじゃないですか。なんで貴方はそういう目で私を見るんですか。勝手に恨まないでほしいですね。
喜久子　私、どういう目で見ているんですか？　自分には見えないものですから。
美代子　そういう目はそういう目ですよ。今すぐトイレで見てきたらいいじゃないですか。
喜久子　わかりました。ちょっと行ってきます。

喜久子、上手はけ。一恵、上手入り。

一恵　どうかしたんですか、原口さん？
美代子　トイレ行って、自分の顔を見てきなさいって言ったら本当に行っちゃった。
一恵　そりゃあ行きますよ。上司が行けって言ったんだったら。
美代子　なんでこんなにイライラさせられないといけないのかしら。
一恵　あ、ちょっとお時間いいですか？
美代子　今ですか？
一恵　はい。出来ればここじゃないところで。
美代子　そうですか。タバコも吸いたいので屋上にでも行きます？
一恵　顔に似合わずですよね。

一恵、そう言いながらタバコを吸うジェスチャー。

美代子　顔とタバコは関係ないですよ。

照明変化。ＳＥ鳥の鳴き声。一恵、美代子上手はけ。喜久子、セレーナ、永島、涼子上手入り。先程と同じ配置に。

○シーン９「森。カメラが捉えていた真実」

涼子　なにあな？
永島　なにあな？　なにあななにあな。なにあな。何か卑猥だな。
涼子　(イラッとして)何用に掘った穴なのこれ？
喜久子　だから温泉ですって。
涼子　それ信じられるほど私アホじゃないんだな。

永島、考えることを放棄してセレーナを見遣る。

セレーナ　（事もなげに）トイレよ。

涼子　トイレ？　にしては広いし深くないかしら？

永島　深くて広いトイレを作る挑戦してんですよ、今。逆に邪魔しないでほしいな。

涼子　そのスコップで叩き殺されちゃうわね。

喜久子　叩き殺すだなんて。

涼子　さっき飛び出してたら一撃食らわされてたでしょ。『動物カメラマン佐伯涼子、森を彷徨い、動物と間違われて撲殺される。』なんて記事、読みたくないわ。死んでたら読めないけど。

永島　撮影ができそうにないならもう帰ればいいんじゃないのかねぇ。

涼子　手ぶらでなんて帰れませんよ。

セレーナ　じゃあ、さっき拾ってすぐに捨てた動物の骨、あれあげるから帰りなさいよ。

涼子　いりませんよ。なんだってそんなに人払いしたいんですか？　え、もしかしてプライベートで森の中って、結構怪しいと最初っから思ってたんですけど、何か疚しい事してるんじゃないでしょうね。ねえ、喜久ちゃん、どうなの？

喜久子　やましいことなんて神に誓って何も。

涼子　こんな時に出される神という言葉、存在。かわいそうだわ。

喜久子　何の根拠があってそんなに私たちを疚しい存在に仕立てようとするんですか？　私、何かやりましたか。確かに佐伯さんに協力頂いた企画ですが、上司に差し戻されましたよ。

涼子　あ、あれ、差し戻されたの？

喜久子　差し戻されましたよ。でもそれがどうだって言うんですか？

涼子　どうだって言われてもね。協力費としてお金もらってるから私としては損はしてないけど。残念だったわね企画。撮りたかったなツチノコ。

喜久子　ツチノコ？　何バカなこと言ってるんですか？　そんなもの居るわけないじゃないですか。ほんと残念な企画ですよ。

涼子　なんだか自虐的な意味になってるわよ。同時に私まで貶められた気もするし。そうじゃなくてね。……私、見てたからさ。

間。誰も口を開こうとしない。

涼子　フクロウをここに撮りに来たってのはホントの話よ。みーちゃんがツチノコも爬虫類もダメだって言うからね。でも撮影できたのは梟じゃなかったわ。車が止まる音に気づいてカメラを向けたらさ、中から貴方達が出てくるじゃない。で、声かけようと思ってまさにこんな感じで手を挙げて近寄っていったわけ。そしたらさ、こういう写真が撮れたんだよね。（カメラを渡す）何が写ってる？

喜久子　私達ですね。
涼子　他には？
喜久子　台車が、
涼子　他には！　台車の上には何が写ってる！　原口さん！　あなた、何をし(たのよ)。

涼子のセリフ中にセレーナが手にしていたスコップで彼女を殴打した。そのまま転倒して動かなくなる涼子。

喜久子　え、佐伯さん。(セレーナに)何してるのよ。
セレーナ　　ちょっとうるさかったから。
喜久子　うるさいだけで人殺したら駄目じゃない。
永島　でもさ、これでよかったんじゃねぇの。
喜久子　良かったって何よ。
永島　そう突っかかってくるなって。
喜久子　だって。
セレーナ　　あのさぁ。一人埋めるのも二人埋めるのも同じでしょ。個数がたった一、増えるだけだし。それに、穴はこんなに、広くて深いんだからさ。

三人、穴の中の暗がりを見下ろし。ＳＥフクロウが鳴く。永島、涼子の死体を抱きかかえてセレーナとともにはけ。**照明変化**。森からオフィスの屋上に。

○シーン１０「屋上」

美代子、一恵入り。タバコを咥えてライターを探すが見当たらない。

美代子　ん。
一恵　はい？　ああ、私、吸わないので。
美代子　(半目で一恵を見つつ)禁煙、しようかな。
一恵　それがいいですよ。空気すらおいしく感じるようになりますから。

美代子、タバコをしまう。

一恵　こんなに清々しい良い天気なのに、夕方から雨が降るらしいですよ。わからないものですね。
美代子　で、何の用ですか？
一恵　何の用ってほどでもないんですけどね。ちょっとやりすぎかもなぁと思いまして。
美代子　ああ。
一恵　ああ、じゃなくてですね。

美代子　そんなことを言いにきたんですか？
一恵　結構噂にもなり始めていますから、そろそろやめておいた方が。パワハラとかうるさい時代ですからね。本人が会社に訴えなくても周りの善意が動くってこともありますし。
美代子　その善意ってのはあなた？

一恵、笑う。ひとしきり笑い終え。

一恵　はー、脇腹が攣りそうになるようなこと言わないで下さいよ。死にそう。笑い死ぬって耳にした感じ幸せそうに思うんですけど、状況としてはとてもマヌケな死に方ですよね。いやぁ、笑った笑った。
美代子　答えは？
一恵　やめてくださいよ。善意だなんて。だってこのゲームを提案したの私じゃないですか。
美代子　そうですよね。
一恵　この辺りが潮時かなって単に思っただけです。
美代子　潮時ねぇ。この場合どっちがゲームに勝ったことになるんですか？
一恵　まあ、結果だけを見れば『辞めていない』ですからね。私の勝ちです。
美代子　もう少しだったのに。やっぱ悔しいですね。
一恵　あなたのイジメ度合いもちょうどいい感じでしたよ。イジメって言うとあれですけど。プレッシャーというのかしら。
美代子　あなたの提案にはいつも驚かされます。
一恵　部署として仕事が増えていく中でやはり衝突とか軋轢とか生じてしまって、表面上に出ていないガスが溜まっていましたからね。人ってイキモノは他人の不幸を喜ぶ習性がありますし、あの人よりはマシと思えるような状況を作ることは出来ました。おかげさまで数ヶ月前より部署全体の作業効率も上がっています。データ見ます？
美代子　じゃああとで。
一恵　はい。
美代子　でもよかったの？
一恵　何がですか？
美代子　あなたと原口さんって同期でしょ？　仲も良かったように思えたけれど。
一恵　別に。彼女よりも仲のいい同期いますし。それに友だちじゃないですから。
美代子　だから平気な顔して付き合って、犠牲にも出来たと。
一恵　犠牲なんて言ったら彼女がかわいそうですよ。でも、(とびっきり明るく)あの私だけが我慢していればいい的な顔が気に入らなかったんですよねぇ。
美代子　わかる。悲劇の主人公みたいな顔でしょ。
一恵　そうそう。あの顔される度に壊したくなってしまうんですよ。どこまでいったら

この子は壊れてくれるだろうって。…じゃあ戻りましょうか。あ、あの子がトイレから戻ってきたら少しでいいので労ってあげて下さいね。もしかしたら今トイレで辞表を書いてるかもしれませんけど必要でしょう、こういうパフォーマンスは。

美代子　労いと言われても今更気持ち悪いですよねぇ。言う方も言われる方も。

一恵　見ている方も気持ち悪いですからみんなで気持ち悪くなりましょう。

二人、下手はけ。背中で喜久子は聞いている。右記セリフ中にセレーナと永島板付き。

○シーン１１「喜久子宅・電話。助けを求める相手は神でなく人なれど」

照明変化。ＳＥテレビ(野球中継とか)を観ている永島とセレーナ。缶ビールを飲んでいる。喜久子、感情が乱れ、慌てて電話をかけようとするが手が震える。ようやく永島の携帯にかけることが出来た。ＳＥ電話の着信音(バイブ)。

永島　(つまらなそうにテレビを観ている流れで電話に出る)はい。

喜久子　私。

永島　お、ワタシワタシ詐欺ですか？　ここはどこ？　私は誰ってな。

喜久子　喜久子。

永島　ノリ悪いな。なんだよ。今日も遅いのか？

喜久子　違う。

永島　どうかした？　ちょっと聞き取りにくいんだけど。なあ、セレーナ、さきいかあったっけ？

セレーナ　ないよ。コンビニ寄った時、私がつまみに買ってったらって言ったのに、ハルったらくせぇからいらねぇって。

永島　じゃあ、ちょっと買ってこいよ。お金渡すからさ。

セレーナ　テレビは死にたくなるほどにつまらなくはあるけれど、それはとても面倒くさい。あ、くさいつながり。つながったよ、ハル。

永島　うるさい。

セレーナ　さいつながり。

喜久子　ごめん。ハルくん。

永島　なんで喜久子が謝ってんだよ。悪いのはセレーナだろう。

喜久子　そうじゃないんだ。そうじゃなくてね。ごめん。私ね。

永島　悪い。やっぱ電波が悪いのかな、聞こえにくいんだけど、もしもし。

喜久子　私、もうダメかもしれない。

永島　え、なに？　ダメって何がダメなんだよ。

喜久子　ハルくん。ハルくん。

永島　だから何。どうしたんだ。
セレーナ　　どうかした？
永島　いや、なんだかわかんねぇんだけど。
喜久子　私ね。
永島　ああ。
喜久子　人、殺しちゃった。

間。ＳＥテレビの音(ホームランを受けての歓声とか)だけが辺りに響き渡る。

喜久子　ねえ、どうしよう。どうしたらいい？
永島　落ち着けって。意味わかんねぇんだけど。んなこと突然言われてもさ。ホントに殺したのか？　本当に死んでるのか、そいつは？

セレーナ、「殺し」というワードに反応をする。

喜久子　何度も確認したよ。死んでなかったらいいなって思って呼吸とか脈とかみたけど、どっちもないんだよ。ちゃんと死んでるんだよ。
永島　そりゃ、そう思ってるだけなんじゃねぇ。喜久子は医者じゃないんだからさ。脈なんてみれないだろ。
喜久子　医者じゃなくてもわかるよ、ぴくりとも脈打ってないんだから。
永島　呼吸は？　お前を驚かそうとして止めてんじゃないのかよ。
喜久子　だとしたらもう１０分ぐらい止めてるよ。
永島　止められているとしたらとんだビックリ人間だな。
喜久子　これから警察行ってくる。
永島　なんで？
喜久子　だから人を殺したからだよ。
永島　ああ。
喜久子　自首した方がいいよね？

永島、考える。心配そうに様子をうかがっているセレーナ。

永島　あのさ、
喜久子　なに？
永島　自首は認めない。
喜久子　何言ってんのよ。
永島　何でそんなことが起きてるのか俺は知らねぇよ。でもさ意味もなくお前は人を殺すようなやつじゃない。それは俺が十分知ってることだ。それだけでいいんだ。
喜久子　ハルくん。

永島　今何処にいる？　殺した相手ってのはそばにいるのか？
喜久子　うん。一緒にいる。
永島　今から迎えに行くから。住所わかるか、そこの？
喜久子　わかる。
永島　じゃあ送れるな？
喜久子　送る？
永島　俺の携帯に住所。
喜久子　うん。
永島　俺が行くまでしっかりな。

喜久子、黙っている。

永島　しっかりしろよ。
喜久子　うん。死体が見てくるよ。
永島　死体なんて見るな。お前が見なければやつも見返しては来ない。じゃあ住所待ってるから。な。
喜久子　わかった。

永島たちのエリア、**照明が落ちる**中でセレーナと話をしている。そしてバタバタと永島はけ。残される喜久子とセレーナ。必死に、ゆっくりと携帯を操作する。

○シーン１２「森。台車。運ばれてくる死体の正体」

ゆっくりと照明変化(室内から森へ)。に合わせて携帯をしまう。

セレーナ　(目視できるがまだ遠い永島に)遅いんですけど。

台車に死体(ブルーシートを被せてある)を載せて永島入り。

永島　文句言うならお前がやれよ。
セレーナ　私、これでも女って知ってる？
永島　知ってるよ。知ってて敢えて言ってる。こっちは土掘って疲れてるんだからな。
セレーナ　はいはい。おつかれさま。じゃあ、その人も埋めちゃいましょ。
永島　って俺がやるんだよな。ちょっとこき使いすぎじゃね。休ませろよ。
セレーナ　終わったらたんまり私の膝の上で休ませてあげるわよ。
永島　今疲れてんだって。
喜久子　ハルくん、私やるよ。
永島　持ち上げられないだろ。

喜久子　台車から滑らせて掘った穴ん中に落とすわ。
永島　…いいや。俺やるし。でもやる前にさ、ほんの少しでいいんだよ、ちょっとでいいからさ、最後の休憩させてくれよ。
喜久子　…わかった。
永島　よし。(その場に尻餅をついて)あーーー、疲れたぁ。
喜久子　大声出さないで。また人が来ちゃう。
セレーナ　そうしたら1が2に、2が3になるだけよ。
喜久子　なんでそんなに平気でいられるの？
セレーナ　だってただ人を殺しただけでしょ。こんなことなんでもないわ。

セレーナ、指を折って数えている。

セレーナ　あれ？
喜久子　どうかした？
セレーナ　あなたが1、私が1。おかしいな。ハルは0じゃん。
永島　ああ？
セレーナ　いや、こんなかで誰も殺してないのハルだけだなって。不公平だ。
永島　その分働いてますけど。働かされてますけど。
セレーナ　そんなことで私たちと肩を並べて同じ空気が吸えると思うなよ。
永島　じゃあどうすりゃいいのよ。
セレーナ　そんなことも1人で考えつかない程度の想像力しか持ってないから彼女に人を殺させちゃうのよ。
永島　なんだよそれ。俺が元凶みたいじゃんか。
セレーナ　あなたはいつまでもひとりでじゃんかじゃんか言ってればいいわ。ねぇ、喜久子。
喜久子　え。
セレーナ　ん？
喜久子　あ、名前で呼ばれてちょっと、戸惑った。
セレーナ　そういうところかわいいよね。
喜久子　死体のそばで話すようなことじゃないわね。
セレーナ　そう？　人が傍で死んでいようが、お腹は減るし、眠くもなるわ。
喜久子　それはそうだろうけれども。

永島、立ち上がる。

永島　やるかぁ(伸びをしたり柔軟したり)。
喜久子　そうね。夜が朝になってしまうものね。会社休めないし。
セレーナ　掘った穴は埋めないといけないし。って、会社行く気なんだ。

喜久子　そうしないと疑われるかもしれないから。
セレーナ　　ああ。

永島、台車に近づいていき、押した時に死体の右手が台車から滑り落ちる。

永島　　いっけね。（手を戻そうとして）
セレーナ　　チョット待って。あのさ、この指輪ってもらっちゃってもいいよね。
喜久子　（逡巡の後）いいよ。どうせもうその人には必要のないものだから。

セレーナ、一恵の指から指輪を取ろうとするような仕草をする。転換音楽。ＳＥ
黒電話のコール音。

第２話『（１＋１）１＝１という数学的誤りと悲劇的側面に関する考察』　了

第３話『上書き保存される迷える魂』
○シーン１「病院」

美優紀の前には指示する男(衣装は上だけ持ってきてもらい変える。ブルーシートの中に入れておいてもいい)が座っている。照明変化。

美優紀　え、じゃあ、それって騙したってことじゃないんですか？
指示する男　人聞きの悪い事言わないでくださいよ。困ったなぁ。

指示する男、困ってもいない様子で癪に障る感じの笑い方をする。

美優紀　話聞いた限りじゃそうでしょ。
指示する男　でも私は悪いことをしたって感覚がないんですよねぇ。
美優紀　感覚があろうがなかろうがよ。私が植え付けてあげましょうか罪悪感。
指示する男　嫌ですよ。何で見ず知らずの人に罪悪感なんて植え付けられないといけないんですか。
美優紀　いけないんですかって言われてもねぇ。いいじゃない。ちょっとだから、そっとやるから。私上手いんだから植え付け？　田植えみたいなものでしょ。
指示する男　違いますよ。え、違いますでしょ。そもそも罪悪感を植え付けるってのはどうやるんでしょうか？
美優紀　知らない。
指示する男　え、自分から話しておいて今とっても無関心じゃないですか。置いてけぼりですか？
美優紀　ちょっと待って！

間。

美優紀　何よ。この間。
指示する男　いや、待てって言われたから。
美優紀　あなた、ははーん、さては、あのお店で林檎を買ってきてって言ったら買ってくるタイプでしょ。
指示する男　まあ、お金をくれるなら。
美優紀　だめだめ。そんな人に何か言われて「はい」なんて言ってしまう日本人なんて日本人らしくない。
指示する男　そうですかねぇ。
美優紀　そりゃそうよ。え、日本人よね？
指示する男　多分。
美優紀　多分ってなんでそこぼやかすの？

指示する男　　確実に日本人です。
美優紀　だったらそうであることを誇りなさい。
指示する男　　はい。
美優紀　もっとぉ！
指示する男　　はいっ！
美優紀　よし。だからって嘘は駄目よ。。
指示する男　　話が戻った。だから私はですね、

医師入り。

医師　古賀さん。

照明変化。同時にゆっくりと指示する男はけ。

美優紀　あ、はい。
医師　今のは？
美優紀　さぁ。
医師　知らない人と話していたんですか？
美優紀　気さくに話しかけてこられたので。そうしたら、
医師　どうかしましたか？
美優紀　あ、いえ。ただ、本人がいないところでその人の悪口言うのもなんだなと思ったので。
医師　気をつけてくださいね。病院という場所がら誰でも入ってこられるので。最近も妙な人間が出入りしているという噂が。
美優紀　気をつけます。
医師　まあ噂はあくまで噂ですのでね。で、今日はどうされたんですか？
美優紀　ちょっと風邪かなと思うんですが。
医師　風邪？　この前もひいたって言ってませんでした？
美優紀　私ですか？
医師　ええ。
美優紀　他の古賀さんじゃなく？
医師　ええ。そう言われると。そもそも古賀さんじゃなかったのかしら。
美優紀　私、そんな短い間に風邪ひかないですよ。病院に来るのだって久しぶりだと思いますけど。
医師　あらそうなの？　私の思い違いみたいね。忘れて忘れて。

照明変化。医師、美優紀から離れた場所の椅子に。移動はゆっくりと。

美優紀　他者と私の違いとは何か。各種の要素で私は構成され、他者との違いを作り上げてはいるがその要素とはそもそも何なのか。ヒト？　主婦？　二足歩行？　それで私の何を言い表せるだろう。この医師が私だと思っていた人間はどうやら違う人間だった。私が違うというのだから私に似た誰かだったのだろう。しかし人の記憶とは実に曖昧で、思い違いで片がつくようなことは四六時中、この世界の何処かで起きていて、別に珍しい現象じゃない。でもそれが思い違いで片付けられなかったらどうすればいい。私という存在が私ではない誰かに奪われて、当の私が私という存在を失い、違う人の情報で上書きされたとしたら。

美優紀はけ。少年入り。ボールを手で弾ませて遊んでいる。医師、美優紀のセリフ終わりに合わせて移動を終えて、椅子に座り、頭を抱える。看護師入り。照明変化。

看護師　先生。今寝てたんじゃないんですか？
医師　違いますよ。ちょっと考え事を。
看護師　紛らわしい。そんな私寝てますみたいな感じで考えたりしないで下さい。そんなことよりそろそろなんとかして下さい。
医師　何を？
看護師　何を？　何を！？　みんな疲弊してるじゃないですか。
医師　(何をに気づいて)私の一存で何とか出来るならしているわ。でもねぇ。この数日で一気に増えたわね。
看護師　受け入れ出来たとしてもあと数十人が限界です。
医師　これ以上増えなければと祈ったところで起きることは起きるから。どうすればいいと思う。
看護師　他の病院にも問い合わせが増えているそうです。
医師　そう。まあ、ぎりぎりまで頑張るしかないわね。
看護師　解決する手段が見つかるまでは。

少年のボールが転がっていき、医師の足元に。

少年　あ、ごめんなさい。
医師　ああ、ボールね。

ボールを掴み、立ち上がる医師。ボールをじっと眺めている。

看護師　まぁた考え事ですか？

看護師、医師からボールを取り上げて少年に返す。

少年　ありがとう。

少年はけ。

医師　今の子は？

看護師　え？　ああ、あの子は最近入った子で名前はなんていったかなぁ。

医師　名前はいいわ。

看護師　冷たくないですかぁ。

医師　どうせこちらがつけた偽名でしょ。ここには名前を持たない人しかいない。違う？

看護師　そりゃあそうなんですけどね。だから私はこっそり「少年」と呼んでいます。「やあ、少年。今日も元気かい」とかね。

医師　呼びたいように呼べばいいけど。でもあの子は。

看護師　いいじゃないですか。便宜上の話なんですから。

医師　悪い影響が出なければいいけど。で、親は？

看護師　さぁ。

医師　さぁって。無責任なこと言って。

看護師　私担当じゃないんですよ。本人曰くお母さんが忘れてしまったみたいです。

医師　そう。そういうケース珍しくなくなってきたわね。間接的喪失。

看護師　未成年者の喪失については警察も極秘裡に動いているそうですよ。

医師　それどこ情報？

看護師　決まってるじゃないですか。

医師　(溜息混じりに)探偵？

看護師　ザッツライト！

医師　あの人も売店の横陣取ってコーナー作っているのは注意した方がいいわよ。

看護師　私担当じゃないんですよ。

医師　あのね、「私担当じゃないんですよ」って言えばどうにかなるって思うのやめなさい。それに患者さんのフォローは私達の仕事でしょ。

看護師　まあ、そうなんですけどねぇ。最近じゃあ、文春や新潮を買うよりも探偵の話を聞きに来る人の方が多いとも聞きます。まあ本人が言っているだけかもしれませんけど。

医師　当たった例はないというのにね。

医師、看護師話しながらはけ。照明変化。

○シーン2「道にて遭遇」

見知らぬ女、電話。指示する男入り。彼もまた電話をしている。

見知らぬ女　来たわよ。
指示する男　お疲れ様でした。それでは最後の指示を出させて頂きますね。
見知らぬ女　早くして。
指示する男　何を焦っているんですか？　大丈夫ですよ。私の言う通りにして頂ければ全てうまくいきますから。
見知らぬ女　嘘じゃないのよね？　詐欺じゃないのよね？
指示する男　大丈夫。信用して下さい。うちはあなたの利益を優先してサポートしているのですから。いいんですか、私達が手を引いても。私たちなしで頑張れますか？　出来ないでしょう。そりゃそうですよ。では黙って指示に従って下さい。悪いようにはしませんから。
見知らぬ女　お願いよ。藁をもつかむ思いであなた達に依頼したんだから。
指示する男　私たちは藁ですか？　なぁんて。では、早速ですが、最後の指示です。決して間違ってはいけませんよ決して。よろしいですね。

照明変化。見知らぬ女が電話をしている最中に美優紀、鞄を持って入り。
美優紀、ケータイで夫の圭一と話している。

美優紀　貴方のそういうところが嫌い。私そんなこと言ってないじゃない。そうじゃなくてね、いいわよ。信じないんなら、私もあなたの話、金輪際絶対信じないから。謝ってももう遅いですから。知らない。……なんでもいいの？　本気？　わかった。じゃあ、シュークリームで許してあげる。あ、今安い女だって思ったでしょ。思ってないってその言葉が思ってる響きなのよ。コンビニのじゃないからね。ちゃんとお店のやつよ。違うわ。コンビニがとかじゃなくて、時間と労力を私のために惜しまなかったという事実が赦しに繋がるんだから。誰のって、私のよ。うちからコンビニまで走ったら４０秒じゃない。私への謝罪は４０秒相当でちょうどいいってわけですか？…はい。わかったら行ってらっしゃい。

この会話中、見知らぬ女は電話の指示を受けて、人を探してきょろきょろと辺りを確認している。指示する男は電話を切った段階ではける。そして美優紀の存在に気づき、様子を窺いつつ近づいてくる。美優紀、気づきながらも、まだ危機を感じないままに話し終える。

見知らぬ女　あの。
美優紀　はい？

ケータイをしまいながら相手をする美優紀。

見知らぬ女　　あの。美由紀さん？　美由紀さんですよね？
美優紀　え、そうですけど。あのどこかでお会いしました？
見知らぬ女　　ほんとにいた。よかったぁぁ。お会い出来ないかと思っていました。あの、これ。

見知らぬ女、鞄から封筒を取り出す。厚みのある封筒である。
※封筒のサイズはＡ４サイズ程度。数百万円が入っている。

美優紀　えーと、なんですか、それ？
見知らぬ女　　いいから。受け取って下さい。お願いします。
美優紀　お願いしますって言われてもですね。まず中身が何なのかを教えて下さらないと。
見知らぬ女　　…美由紀さんですよね？
美優紀　ええ。それはそうですけど。
見知らぬ女　　だったらわかるはずです。これが何であるか。私が誰かも分かっていらっしゃいますよね。何で知らないふりなんてするんですか。
美優紀　と言われましても。
見知らぬ女　　お願いですから。

もみ合いながら、「あの」とか「ちょっと」などのつなぎの言葉を入れつつ、いつしか封筒を握らされている美優紀。このもみ合いで封が開いた状態にしておきたい。

美優紀　ですから。…あ、これきっと人違いとかじゃないですか？　何をその人に渡すのか知りませんけど(と言いながら軽い気持ちで封筒の中を覗いてしまう)。
見知らぬ女　　そんな。今更それはないでしょ。美由紀さんとご自身が認めていらっしゃるのに。それが人違いってどういうことですか、高島美由紀さん。

美優紀、ようやく「みゆき」違いであると理解する。が、同時に恐る恐る封筒を覗き込んでおり、中身が大金であることも理解する。

見知らぬ女　　どうかしましたか？
美優紀　あ、いいえ、随分お金が。
見知らぬ女　　そうですよ。それでなんとか。
美優紀　でも、この束をこんな茶封筒にって。
見知らぬ女　　それはあなたの指示じゃないですか。

間。一瞬生まれたその沈黙とともに「もしかしたらバレないんじゃないだろうか」という魔が差す。

美優紀　え、ああ。そう、ですか。じゃあ、仕方ないですよね。はは。

見知らぬ女　　何がおかしいんです？　とりあえず渡しましたからね。私はこれでもういいですね。ホントお願いしますよ。

見知らぬ女はけ。しばし呆然と立ち尽くす美優紀。

美優紀　私、何に巻き込まれた？

照明変化。同時に美優紀はセリフ。鞄と封筒を持って帰宅。その小道具をはけさせる。ブログを携帯で打ち込む。台詞と同時にタイミングよく行う。稽古時に調整していきましょう。

○シーン３「古賀家、夫の帰宅」

美優紀　そう、私は自分の意志ではなく、いや、半分は私の意思が入っているには違いないけれども、妙な事件に巻き込まれてしまった。さてここからどうする。誰でもいいから教えてというか救ってヘルプミーみたいなことを私はブログに書き綴った。誰が読んでいるのか、はたまた誰も読んでいないのかわからない私の個人的な胸の内を吐露し続けるアメブロに読者は０人。月に一度ぐらい入ってくるコメントには明らかに記事を読んでいない人間が「こんにちは、いつも読んでます。応援してます。私のブログも読んでくれたら嬉しいです。」とか書き込まれるぐらいだ。……だぁぁぁぁれが見るか、あほたれぇぇぇぇい。コメントは消せども消せどもまた書き込まれる。どんだけ暇だというのだ。私の危機的状況を鑑みて書き込めっつーの。むしゃくしゃする。こんな時にお酒が飲めると少しは心が楽になるらしいけれど、私はお酒が飲めない。飲むとすぐ吐き気が。って、そうじゃない。今は私とお酒の関係性について語っている場合ではない。つまり先程私は封筒の中身を帰宅するとともに確認したわけで。束は５つ。それが１００万円の束だと言うならば５００万入っていたことになる。…やばいよやばいよーという出川哲朗の生霊が降りてきた私はひとまず冷蔵庫の野菜室に封筒をしまった。あそこならば私以外誰も見ないはずだ。さぁ、もうそろそろ私を救う神は現れるのではないか、現れてもいいのではないか、という気持ちで新たなブログを書いている。私だって暇ってわけじゃない。このあときっとシュークリームを買って帰ってくる何も知らない夫君のために夕食を作って、それを片付けて、お風呂に入って、眠らないといけない。全く暇じゃない。そういえばブログ、ツイッターと連携してたっけ。もしかしたらそっちにコメントが来てたりぃぃと思いつつ。……リプなし。いいね！すらなし。ガッデム。神は死んだかぁ？

美優紀のセリフ中に圭一入り。手にはコージーコーナーの箱。声をかけるにかけられない状態で立っている。**照明変化**。

圭一　ただいま。どうした？　買ってきたよ、シュークリーム。

照明変化。スポットの切り替えとかでも構わない。あるいは2点スポットをつけておく。**※照明と要相談箇所**。

美優紀　そこにおいておけぇ。こっちはそれどころじゃない。（携帯のキーを激しく押す）阿呆面をぶら下げて夫君がご帰宅だ。手にはコージーコーナーの箱。中身は彼が言うとおりシュークリームだ。なぜかって。それは私のご機嫌を取るために買ってこいって私が言ったからだ。私はコージーコーナーが大好きだ。そのミジンコクラスの脳みそしか持ち合わせていない夫君でもそのぐらいは覚えていたらしい。日々の教育の賜物か。

照明変化。

圭一　こんなに買ってこなくても良かったね。だって君、シュークリーム好きだって言ってるけどさ、そんなに甘いもの得意じゃないもんね。

照明変化。

美優紀　そうです。私はどちらかと言えば辛党なんです。辛ラーメンと中本があればなんとか生きていけるぐらいに。だからきっとシュークリームを私は一個食べればもう満足するはず。あとは彼に任せる。これがうちの流儀。さぁ、話を戻そう。神は死んだか否かについてだったか。…違うそうじゃない。私のご機嫌は何とか直ったとしても私が置かれている状況は少しも改善されていない。さぁてどうする。夫君！

照明変化。圭一、シュークリームを二つ取り出して一つを美優紀の方に、一つは自分の方に置くと、箱を持ってはけていく。**照明変化**。

美優紀　夫君はどうやら私の心の声までは聞こえていないようだ。心の声と言いつつ全てブログに書き込まれていることなのだが、彼はこの投稿もブログの存在もきっと死ぬまで気づかないことだろう。私がブログの中で密かに彼のことを夫君と呼んでいることも。実際に呼ばれたら彼はどんな顔をするだろうか。顔を赤らめて悶絶するだろうか。それとも青ざめて引かれるだろうか。どちらにせよそれはそれで見てみたい気もするが、…その前に私が恥ずかしさの極みでコンクリートの地

面に顔を埋めてこすりつけて全生命体に見逃してくれと泣き叫ぶだろう。よし、再度話を戻そう。お金だ。お金をどうする。は、待てよ。夫君はあのコージコーナーの箱をどこにしまうつもりだ。あの箱が入るような場所は、…野菜室。いやいやいや、シュークリームは野菜じゃありませんよぉ、ってミノムシ並の脳みその彼だ。まさかをやりかねない。いやいやいや。

照明変化。

美優紀　(キッチンに向かって)ねえ。
圭一(声)　ん？
美優紀　シュークリーム、どこにしまうつもり？
圭一(声)　冷蔵庫。
美優紀　野菜室はいっぱいだから他の場所がいいと思うわ。
圭一(声)　ははは。シュークリームは野菜じゃないよ。

照明変化。

美優紀　よし！　そのぐらいのことはわかっているようだ。しかし、今私はバカにされたのか、バカにされてしまったのだろうか、と考えたが細かいことをとやかく言っていても始まらない。夫君にバレる前になんとかお金は返そう。どうやって。同じ場所で彼女が現れるのを待つ。もし現れなければ「これ落ちてました」と無邪気さを演出しつつ、無辜な瞳をきらきらさせてお巡りさんに届けよう。それがいい。もうそれ以外の選択肢はどれも不正解としか思えない。ということで明日の朝交番に行ってきます！　今はシュークリーム！

携帯を持つ手をゆっくり落とし、合わせて徐々に**照明変化**。
※圭一は美優紀のセリフ中に戻ってきてシュークリームを食べ始めている。

圭一　甘い。これは2個が限界かも。
美優紀　なんでそんなに購入してきたの？
圭一　謝りの度合いを示すため？
美優紀　減点。
圭一　なんでさ。
美優紀　疑問符つけたから。
圭一　甘いなぁ、ホント。でもうまい。

間。美優紀も食べようとしてシュークリームの袋を掴む。

美優紀　(手の中のシュークリームを見つめつつ、転がしつつ)あのさ、もしもね、もしもの話なんだけどね。
圭一　うん？　甘っ。
美優紀　人から突然大金を渡されたらどうする？
圭一　ごめん、よくわかんないんだけど。コーヒー入れてこようかな。飲む？

圭一、立ち上がる。

美優紀　え、うん。いや、だから、ちょっと集中して聞いてくれないかな。私もわかんないのよ。
圭一　はい？
美優紀　あ、えーと、例えばの話よ、例えばの。
圭一　例えばの話を集中して聞かないといけない状況がまず飲み込めないんだけど。どうして渡されるんだろう。ちなみにいくら？
美優紀　５００万。
圭一　あー、なんかの犯罪がらみ、かな？
美優紀　やっぱそう思う。そう思うのが自然よね。
圭一　まあ、単純に考えて。でも何で見ず知らずの人に渡すんだろう。
美優紀　渡された方は知らないの。でも渡した方は知っているの。
圭一　またわかんなくなってきたなぁ。
美優紀　人違いなのよ。
圭一　人違いですよって教えてあげなかったの？　その受け取った人は。
美優紀　だって５００万円だよ。
圭一　でも人違いなんでしょ？　受け取ったらまずいでしょ。
美優紀　そうなんだけど受け取っちゃったんだから受け取ったことを否定されてももうどうにも取り返しがつかないのよ、そういうシチュでもう一度考えてみてよ。
圭一　まあ、受け取らないって選択肢がベストだけど。できるだけ早く手元から離した方がいいね。組織が絡んでたりするかもしれない。
美優紀　組織？
圭一　犯罪組織だよ。
美優紀　映画じゃないんだから。
圭一　設定がもう現実離れしているんだもの、組織の一つや二つ出てくるさ。
美優紀　怖いこと言わないでよ。
圭一　だってもしもの話でしょ？
美優紀　もしももしもってさっきからもしも。そんなにもしもが好きならもしもボックスにでも入っていればいいでしょ。
圭一　もしもって言い出したのは君じゃないか。そんなもしもってことだけで目くじらを立てることもないだろう。なんで僕たちはもしものことで口論しなくちゃいけ

ないのさ？　おかしいよ。シュークリームでも食べなよ。
美優紀　食べるわよ。(袋を破るけど)でも今はシュークリームは関係ないでしょ。
圭一　せっかく買ってきたんだよ。

黙々とシュークリームを食べる二人。美優紀、台詞。圭一変化。
※美優紀という存在を認識できなくなるという現象。いきなり変化が起きるのではなくまどろみの中、徐々に隣りにいる人間が誰であるかを認識できなくなる。知っているようで知らないようで、夢で出会った何処かで会ったことのある懐かしい誰かみたいな感覚が拡がりどんどん記憶が薄れていく。その消失が気持ちが良くて、同時に切なくて、手を伸ばそうとして、握りしめて、でもその指と指の間から残酷にも零れ落ちていく砂であり水であり空気のような記憶。

美優紀　受け取ってしまったことは後悔しているのよ。どうして受け取っちゃったかなぁって。でも金額にやっぱ目が眩んだっていうかね、バレなければ別にって考えたんだと思うのね。見間違うほどに似ているんだとしたらどうせ次会った時に金返せって言われても知りませんって言ってしまえばいいって。でもうん。何かに巻き込まれたのは事実だし、受け取った人がいる反面、受け取れなかった人がいるんだものね。…ねえ、聞いてる？
圭一　え？　うん。…
美優紀　あと、これ(シュークリーム)、ありがとね。おいしかった。
圭一　あ、……はい。
美優紀　何よ。私が感謝の言葉を述べているんだから空返事やめてくれる。
圭一　……そういうつもりでは、…ないんですが…
美優紀　ないんですがって、え、ないんですがってなに？
圭一　すみません。あの、どちらさまでしょうか？

美優紀、一瞬言葉に詰まるが、きっと夫のイタズラだろうと思う。

美優紀　あのさぁ、いくら私がいじめるからってそれはないんじゃない。怒るよ。
圭一　いや、そうじゃなくて。すみません。ホントにわからないものですから。
美優紀　ここはどこ？
圭一　私の家ですね。
美優紀　あなたは誰？
圭一　古賀圭一。
美優紀　私は誰？
圭一　誰？
美優紀　ちょっとやめてよ、あなたの妻でしょうが。それ以外のなんですか？
圭一　妻、あなたが私の。冗談ではなく？

美優紀　冗談にしたいの、私との関係を？　生年月日！
圭一　１９８３年６月２５日。
美優紀　血液型！
圭一　Ｏ型。
美優紀　出身！
圭一　東京都文京区出身。
美優紀　小学校の担任の先生は？
圭一　村井俊之先生。
美優紀　思い出のデートの場所は！
圭一　浅草寺！
美優紀　奥さんとはじめてのデートはいつ、どこ！
圭一　２００８年１１月２日、神田古本まつり。
美優紀　じゃあ私は？
圭一　美優紀。

ここまでを一気に掛け合う。肩で息をする二人。見つめ合う二人。
※この掛け合いで徐々に圭一は思い出していく。

美優紀　でしょう。そうでしょう。何なのよ、今のは。ふざけるのもいい加減にしないと怒るよ。
圭一　ごめん。なんか突然さ。

圭一、今の現象を理解しようとして。

圭一　今目の前にいる君が他人のような気がしたんだ。
美優紀　大丈夫？
圭一　うん。
美優紀　そう。あ、ちなみにさ。
圭一　うん。
美優紀　浅草寺って誰と行ったの？

照明変化。美優紀、圭一はけ。ボールを持って探偵入り。持ち主を探している様子。遅れて少年入り。

少年　お、探偵。
探偵　そういう君は。
少年　少年。看護師にはそう呼ばれてる。でもそれが僕の名前じゃないってことはわかるよね。

探偵　名乗るべき名前はどこに落としたんだい？
少年　僕のせいじゃないさ。お母さんがなくしたんだ。だからその子供である僕もなくさざるを得なかったってわけ。わかる？
探偵　それはお気の毒なことで。
少年　よしてくれそんな安い同情。
探偵　同情に高いも安いもないだろう。
少年　あるさ。でももし少しでも僕に同情するって言うなら、ここから出してくれないかな。
探偵　それは御法度だということを君は知っているはずだ。
少年　御法度だなんて難しい言葉を使うものじゃないよ。勿論そんなことは知っているんだ。でも僕にはどうしても行かないといけない場所がある。そこで待っていないといけないんだ。
探偵　何を待つ誰を待つ。
少年　本当の僕を待つ。そしてお母さんを待つ。ここに居たんじゃそれは叶わないことだって悟ったんだ。
探偵　賢いね。だがしかし。
少年　どうやって抜け出す、だろ。僕が何も目的なく中庭でボール遊びをしていたと思うかい？
探偵　聞こうじゃないか。その脱出プランってやつを。

照明変化。探偵、少年はけ。見知らぬ女入り。電話。指示する男入り。

見知らぬ女　あ、もしもし。済みましたよ。
指示する男　何がでしょうか？
見知らぬ女　何が？　何がはないでしょう。あなたの指示通りお金、渡しましたよ。
指示する男　あ、そうですか。それはお疲れ様でした。無事に渡せたんですね。
見知らぬ女　ええ。
指示する男　では確認をいたしますので少々お待ちください。
見知らぬ女　好きなだけ確認してみたらいいわ。でも早くしてちょうだい。

指示する男、電話を持ったままはけるが何もしない。ギリギリ不審に思われない程度に時間を潰し、再び電話を耳に押し当てる。

指示する男　お待たせ致しました。
見知らぬ女　ええ、で、どうなるの？
指示する男　申し訳ございませんが、確認することが出来ませんでした。本当に私が指示した人間に渡されたんですよね。
見知らぬ女　間違いないわ。ちゃんと名前も確認したんだから。

指示する男　そうですか。でも確認できないものは確認できないので。
見知らぬ女　ちゃんと確認して。渡したお金は数千円とかじゃないのよ。あのお金で私は自分を取り戻すの。そのための全財産だったんだから。
指示する男　そうですよね。そのための私たち「藁」ですから。
見知らぬ女　何よ藁って。ふざけたこと言わないで。受け取ってない、確認ができないとかじゃ済まされないんだから。
指示する男　困りましたね。これでは、取り戻すことができなくなりますよ。
見知らぬ女　私は渡したって言ってるんだから。もう一回調べて。ちゃんと調べ直してからかけ直してくれる。ずっと待ってるから。

見知らぬ女、電話をしまいはけ。照明変化。

○シーン４「公園。探偵と少年」

少年入り。靴紐が解けていることに気づかずに、ポケットに手を突っ込んだりして、しきりに何かを探している。遅れて探偵入り。

探偵　靴紐が解けているよ。
少年　ホントだ。これじゃあ歩きにくいはずだよ。でもうまくいったろ。あの時間は警備員も巡回していて手薄なんだよ。だからかな。最近、見舞客でもなさそうな男が出入りしているんだ。あいつはきっと悪人だよ。
探偵　なんで分かる。
少年　そんな匂いがプンプンするんだ。
探偵　それが事実だとしたら大問題じゃないか。でもとりあえず紐を結ぼうか。
少年　貴方は探偵だろ。この事件をそのまま看過ごすというの？
探偵　看過ごすわけでもないけれど、病院の外に出てしまった以上は中の人間で解決してもらわないと。それに今すぐ解決できることじゃないか、紐を結ぶなんてことは。
少年　紐を結ぶ結ぶ結ぶって言うけれどそれがどんだけ重要な事件なのかな。事件なのかなぁ。
探偵　もし君が紐を結ばなかったとしたら。
少年　としたら。
探偵　転ぶ可能性は結んである状態の靴を履いている時よりも確実に高くなる。私はそういう話をしているんだ。
少年　転ぶと、痛いだろうね。
探偵　血が出るかもしれない。
少年　それはやだな。僕は痛いのは嫌いなんだ。
探偵　じゃあ、どうすればいいかな。

少年　その答えにはちょっと時間がほしいね。
探偵　いいだろう。思う存分考えてくれ。私たちには時間だけはあるはずなんだから。
　　同時に色んなものを喪ってはいるけれどね。
少年　(食い気味で)紐は結ぶことが出来ます！
探偵　いきなりだね君はいつも。
少年　結ぶのを手伝って欲しいんだけど。
探偵　しかも甘えん坊ときてる。やれやれだな。

探偵、片膝立ちになって紐を結んであげようとすると、少年は土足で探偵の腿に足を置いて結び始める。

探偵　これは…
少年　紐ぐらい自分で結べるよ。子供じゃないんだからさ。馬鹿にするなよな。
探偵　まだまだ幼いじゃないか、私から見たら君は。
少年　そりゃそうでしょう。
探偵　ん？　どういう意味かな。場合によっては地面這いつくばって靴を舐めることになるよ。
少年　えーと、他意はありません。
探偵　子供なら子供らしく「他意」なんて言葉は使うものじゃない。もう少し説明してご覧。私が老いていると言いたいのかね。
少年　穿った見方しないでよ。僕は素直に探偵さんのこと尊敬してるんだから。
探偵　穿った？　漢字で書けもしない言葉をこれまた。っていつまで君は。調子に乗るんじゃない。
少年　調子だって。ただ足を載せていたんだよ僕は。とても置き心地がよかったからね。

探偵、立ち上がり土埃を払う。※少年、靴紐は結び終わっていて下さい。
少年、軽やかに、踊るように、ステップを踏んで探偵との間合いを取る。

少年　さぁてと、何処に行きますか？
探偵　何処？　解せないな。君は君と出会うために私に病院の脱走を手伝わせたんだろ。
少年　そうでしたそうでした。でも僕は本当に来ると思いますか？
探偵　来るさ。君が君を探しているように、彼もまた彼を探しているはずだ。
少年　探偵はまだ付き合ってくれるの？
探偵　また甘えん坊かい。
少年　そうじゃないさ。
探偵　私はね意外と君が思っている以上にとても暇なんだ。あそこに帰ったところでやることと言えば売店の隣でゴシップをばら撒くことぐらいさ。
少年　裏も取れていないゴシップばかりね。医師たちが頭を抱えていたよ。

探偵　頭を抱えたところで何も彼らはしない。つまりはそのぐらいの存在なのさ私は。
少年　じゃあ、付き合ってくれるんだね。
探偵　ま、病院にいたら君は君と会えないと言ったけれど、それは真理かもしれない。
　　此処にこうしていれば、もしかしたら。
少年　あ。なるほどね。つまりは探偵も探偵を捜そうとしているんだね。
探偵　探偵が自分探しとは笑い話にもならないがね。
少年　何処で何時喪ったかとか分からないの？

照明変化。美優紀入り。そわそわとあの見知らぬ女を探している。封筒は鞄の中。
探偵と少年、何かを探している美優紀を見つめる。先に少年が動く。

少年　あの、ちょっといいですか？
美優紀　(警戒する)なんでしょうか？
探偵　警戒させてどうする？　すみません。
美優紀　えーと、本当になんでしょうか？
探偵　怪しいものじゃないんです。まあ怪しくない人間は怪しくないんですよなんて言葉すら言わないものですが。恐らくなんですが、あなたの身にも私達と同じようなことが起きているんじゃないかなと思いまして。
美優紀　同じようなこと？　え、どういうことですか。
少年　お姉さんもさ自分を失ったんじゃない？
美優紀　言っている意味が。
少年　だから、わっかんないかなぁ。
探偵　単刀直入に申しあげますが、あなた最近誰かのふりをされませんでしたか？
　　美優紀、心当たりがあったが、同時に組織という言葉が出てきてすぐに反応できない。
美優紀　何のことを言っているのか。
探偵　隠す必要はありません。別に恥ずべきことではありません。ただ単に人のふりをして奇妙な日常の中へとうっかり滑り込んでしまったにすぎないのですから。
美優紀　宗教かなんかでしたら別の方に当たって下さい。
少年　宗教じゃないって。人の言葉を聞く耳持ったほうがいいよ。
美優紀　あなたの子供？
探偵　違いますよ。保護者代わりとでも申しましょうか。
美優紀　私忙しいのでこれで。

　　美優紀、そそくさと早足に去っていく。

探偵　(彼方の美優紀に対して)ちょっと待ってください。話はまだ終わっていませんから。
少年　あーあー、走ってるよ。脇目も振らずに走り去っていくよ。
探偵　また会うこともあるでしょう。でもこのままだとあの人、私達みたいになってしまいますね。
少年　失ってしまわないと気づかないんだ。
探偵　そう。失うからそこに在ったということを我々は認識出来る。

圭一入り。医師と看護師、圭一とは別のエリアに入り。
照明変化。美優紀入り。二人顔を合わせて。

圭一　誰ですか？

照明変化。美優紀のみ離れて座っている。圭一、医師、看護師に囲まれる。

○シーン5「病院、そして帰宅」

医師　お名前は古賀圭一さん。
圭一　はい。
看護師　ご職業は？
圭一　プログラマーをやっています。
看護師　パソコンに強い、と。(カルテに書いてみる)
医師　で、最近記憶障害が著しいということですが？
圭一　記憶障害、そうですね。
看護師　お話では奥様についてのみ記憶が消えることが在るとか。

看護師、医師、顔を見合わせる。美優紀スポット(照明は交互に切り替えるなどを想定)。携帯でブログを書いている。

美優紀　夫君が私のことを忘れるという現象、…その現象に名前があるかなんて私が知るわけもなく、現実的な出来事として考えればそれは病気の兆候じゃないかと思って私は夫君に病院に行って欲しいと頼んだ。私が頼み事をするのはもちろんシュークリームを買ってこいとかは別にして、こういう、何ていうんだろう、シリアスな状況？での頼みごとは珍しい。だから夫君も言うことを聞いて病院に行ってくれた。実際、彼が私のことを認識できなくなるのは徐々に短期間に発症し始めてもいたし、その喪われたままの時間がどんどん延びていたのは私達の共通する懸念だった。
圭一　ええ。一回ぐらいであれば気にもしないんですが、すっぽり抜け落ちることが増

えていて、一日に一回が一日で三回、十二時間で五回という具合に、妻を妻として認識できなくなっていて。だからこの前も家に帰ってきたらソファに座ってテレビを見ている妻に「警察呼びますよ」って言ってしまい。

医師　知らない人が家に上がり込んでいてテレビ見ていたら、そりゃあビックリもされますよ。

圭一　でもしばらくしたら記憶は戻ってきて、ああ、そこにいるのは自分の妻だなぁってわかるんです。

看護師　ちなみにですが発症し始めたのがいつか、正確にわかりますか？

圭一　恐らく。

医師　なるべく正確に。

圭一　五日前ぐらいかと。

医師　その日、何か変わったことはありましたか？

圭一　いや、特に変わったことは。

看護師　奥様には変わったことは？

圭一　それはわかりません。

医師　今度、出来るだけ早くがいいのですが、奥様と一緒に来て頂けませんか？

看護師はけ。

照明変化。圭一、美優紀のエリアへ移動。美優紀はブログを書き続けている。

美優紀　病院から帰宅した夫君から検査結果について聞かされた。眼球にも脳にも心にも問題があるという診断はくだされなかったらしい。良かったとは思ったものの何一つ解決できていない。夫にイジワルをしてしまう私に、人のふりをしてお金を手に入れた私に神様が引き起こした罰だというのだろうか。もしこのブログを読んでいる人がいればどうか私を救って下さい。人じゃなくてももう構いませんから。……で、なんだって、先生。

照明変化。

圭一　いや、今度は奥様と一緒に来てくださいねって。

美優紀　だから私ついて行こうかって言ったのに、「いい、いい」とか言うから。

圭一　ごめん。でもさ、奥さんに付き添われて病院に行くのとかカッコ悪いじゃん。

美優紀　もともとそんなにカッコは良くない。

圭一　えーと、今ちょっと結婚したことを後悔しました。そしてショックを受けました。

美優紀　嘘だよ。

圭一　わかってる。

美優紀　めんどくさ。

圭一　君も同じぐらいめんどくさい性格してるよ。

美優紀　喧嘩売ってる？
圭一　売ってない売ってない。
美優紀　でも先生、私にも来てくれって、本当は深刻な話だからご家族を呼んでくださいってことじゃないわよね。
圭一　それはないと思う。
美優紀　なんでわかるの？
圭一　だって。

照明スポット。

医師　あ、もし奥様から深刻な話を本人に伝えられなくて呼ばれているとか言われたら、もしかしたらこの病気の原因は奥様に在るかもしれないのでとお伝え下さい。

医師はけ。

圭一　って言われた。
美優紀　私が原因？　そんな病気あるの？
圭一　知らないよ。僕は医者じゃないんだから。
美優紀　もし変な病気だったらどうしよう。
圭一　僕？　君？
美優紀　ふたりとも。
圭一　大丈夫だよ。だって診察結果だって正常だって太鼓判を押されたんだから。
美優紀　でも。
圭一　でもももしももなし。あるのは結果だけだよ。さてと、シュークリームでも食べる？
美優紀　え、あれまだあったの？
圭一　だって誰も食べないからさ。
美優紀　食べていいよ。私、見てるから。
圭一　見てるってなんだよ。

圭一、優しく笑ってはける。戻ってきたとき、手に持ってというか、すでに頬張っているシュークリーム。圭一、椅子に座る。それを見ている美優紀。

圭一　ほんとに見てるんだ。
美優紀　うん。
圭一　なんで？　楽しい？
美優紀　別に。
圭一　そうなんだ。なんか恥ずかしくなってくるよ。

美優紀　そう？　辱めているんだからそれでいいじゃない。
圭一　また。
美優紀　またってなによ。
圭一　またイジワル。
美優紀　いいじゃない。
圭一　いいよ。だって僕、嫌いじゃないから。
美優紀　私も。
圭一　え？
美優紀　私も嫌いじゃないから、あなたがおいしそうに食べてるの見るの。
圭一　そう。
美優紀　うん。

照明変化。圭一はける。ＳＥ鳥の鳴き声。朝。

美優紀　(椅子から立ち上がり)あれから何日が経っただろう。何回目の朝だろう。私はいつもと変わらない朝に苛立ちを覚えていた。頭痛がする。胸焼けがする。最悪な日が始まった。洗面所に向かいいつも通り顔を洗って、新しいタオルで顔についた水を拭う。鏡を見る。正直その時私が見たものの衝撃は共感してもらえないと思う。鏡には私が映っているはずなのに、私が見ているものは誰かの顔に違いないのに、それが誰なのかわからなかったのだ。冷静になろう。こういう時こそ。コーヒーを入れようとするがどういう順番で作業を進めるのだったかわからなかった。冷静になれ私。とりあえず歯でも磨こう。歯ブラシにハミガキ粉を載せるんだったか、ハミガキ粉に歯ブラシを載せるんだったか。何を言っているんだ私は。え、どういう現象なんだろう。ブログに言葉を吐き散らす気にもならない。だからこれは私の独白だ。しかも口にすることはない独白。心の呟き。

美優紀、寝室でまだ眠っているはずの圭一に声をかける。

美優紀　あのさ、ちょっと出てくる。もしかしたら時間かかるかもしれないから、朝とお昼ごはんは自由にしてね。

ＳＥ電話のコール音。指示する男、めんどくさそうに携帯に出る。見知らぬ女入り。

見知らぬ女　ずっと待ってたし。ずっと電話かけたのに。
指示する男　すみません。こちらも立て込んでおりまして。
見知らぬ女　詐欺よねこれ。私のことを騙したんでしょ。
指示する男　違いますよ。そんなことするわけないじゃないですか。

見知らぬ女　私が病院で医師に話していたのを聞いて、騙してやろうと思ったのよね。どれだけ私が深刻に考えているかなんて貴方には関係がないことだものね。

指示する男　だから。参ったなぁ。これは詐欺とかでは決してないですからね。別に私これで儲けてないじゃないですか。私いくらあなたからいただきましたか？　０円ですよ。ボランティアですよ。

見知らぬ女　嘘つきね。どこまでも誤魔化そうとして。のらりくらりとそうやっていればいいわ。いますぐ警察に駆け込んでやるんだから。

指示する男　……いや、まあ、お好きにすればいいんじゃないですか。

見知らぬ女　とうとう。とうとう本性を見せたわね。その口ぶり、全然さっきと違うじゃない。どうしたのボランティア？　奉仕の精神は？

指示する男　うるさいなぁ。いい。もう法テラスでも警察でも自衛隊でもお好きな所に駆け込んで下さい。じゃあ、失礼します。

見知らぬ女　待ちなさいよ。話はまだ終わってな(いんだからね)。

電話を切る指示する男。「あ」という表情をしてすぐにかけ直す見知らぬ女。ＳＥコール音。電話に出ない指示する男。おろおろと落ち着きなく動く見知らぬ女。医師、看護師入り。

○シーン６「再び病院へ」

医師　今日も風邪ですか？　ってこの前来たばかりでしたね。あれ、違う人だったかしら。

美優紀　あ、いえ、この前は風邪で来ました。

医師　よかった。で、どうされたんですか今日は。

美優紀　私、顔がないんです。いやあるんですけど、それが私の顔だとはどうしても思えなくて。

医師　あああありますよねそういうこと。私も二日酔いで目を覚まして洗面所で自分の顔を見た時、誰だよって言いたくなりますもの。

美優紀　違うんです。

医師　ああ、だとすると寝不足で目の下にくまを作った時とかでどうですか？

美優紀　どうですかって言われても、そうじゃなくて。

看護師　あれじゃないですか。コンビニで会計を済ませてお釣りが在るって分かっているのに店員が素知らぬ顔をしているのを呆然と見ている自分。

間。

医師　お題、なんでしたっけ？

美優紀　違います。私お題を出しに来たんじゃないんです。

看護師　先生、診察を。
医師　えーと、顔を認識できないって話ですよね。最近多いみたいですよ、そういう喪失症にかかっている方。
美優紀　病気なんですかこれ。
医師　病気と言われたらホッとされますか？
美優紀　え？
医師　残念ながら病気なのかすらわからない現象です。ただ何故起きたのかについては患者さんの話を聞いて解明できております。
美優紀　何で私に起きているんですか！？
看護師　古賀さん、落ち着いて下さい。先生。
医師　何が起きているかについてですが、

医師、看護師はけ。**照明変化**。

○シーン7「帰宅。夫に拒絶される。そして誰かがいる」

美優紀　どう歩いてきたものか、病院から家までの記憶がない。恐らく歩いて駅まで行って電車に乗って、座ったのか立ったままだったのか、移動して、家の最寄駅で下車、また歩いて。何処かに立ち寄ったかもしれないけど、特に買い物は持ち物を見る限りしてはいないようで。マンションの外壁が見えてきて、時計を見ると14時を過ぎていた。きっと夫君は私の声を眠りの中で聞いていただろうから、仕方ないという感じで料理をしたかもしれないし、どこかに食べに行ったかもしれないと想像しつつ帰宅。玄関のドアを前にして私は深く息を吸って、そして吐いた。大丈夫。

以下、マイム。玄関に鍵を差し込む。ＳＥ鍵が開く音。そしてドアが開くがチェーンで引っかかる音。

美優紀　ねぇ、いる？　なんでチェーンするのよ。

圭一入り。少し離れてドアを見ている。

美優紀　何ぼさっと突っ立ってるの？　開けてよ。
圭一　すみません。どちら様ですか？　鍵閉め忘れたか(と独り言つ)。
美優紀　また。ねえ、いい加減にして。ほらまたやろうか。思い出す儀式。
圭一　あの、なんですか、ほんとに。警察呼びましょうか。
美優紀　ちょっと待ってよ。貴方の奥さんでしょ。警察って。
圭一　奥さん？

美優紀　そうよ。妻。かみさん。奥さん。ワイフ。ユアハニーでしょう！
圭一　奥さん？　ごめんなさい。ちょっと警察呼んで(と奥の誰かに話しかける)。
美優紀　待って、え、誰かいるの？
圭一　なんですか？
美優紀　私がわからない？　妻の古賀美優紀。

間。

美優紀　…わからない？

間。

美優紀　ねえ、ふざけてるんだったらさ、まじで(怒るよ)。
圭一　あの。妻の美優紀は。
美優紀　そうよ。妻の美優紀は？
圭一　(少しの間)もう家におりますが。

照明変化。圭一はけ。

○シーン8「公園。再び探偵たち」

探偵と少年入り。少年の靴紐はまた解けている。※美優紀とのエリアは異なる。

探偵　また。
少年　また？
探偵　靴紐。
少年　靴紐。(見て)解けてますね。
探偵　解けていたら？
少年　(少し考えて)気が向けば結びますね。
探偵　こける前に結びなさい。
少年　探偵は心配症ですか？　それともお母さんですか？　僕はお母さんのことはよくわからないんですが、きっとそういうことなんだと思います。
探偵　そういうこと？
少年　はい。心配して、心配して、心配して、心配しかしない。それがお母さんというものだとこの間、富士そばにいたサラリーマンのおじさんから教わりました。ごちそうさまでした。
探偵　一人だけ何を奢ってもらったんだ君は。
少年　きつねそばをいただきました。

探偵　次は私も呼びなさい。
少年　覚えていればね。
探偵　やれやれ。
少年　探偵はいつから探偵に？
探偵　それは愚問だ。いつからなんてことは私達にとって問題じゃない。ただ人生に迷っていたらいつの間にか探偵になっていた。自分探しをしすぎたせいかね。
少年　あのお姉さん、どうなったと思います？
探偵　どのお姉さん？
少年　ほらこの前、脇目も振らずに走り去っていったお姉さんだよ。
探偵　さあ。でも、また会える気がしているんだよね。
少年　探偵の勘？
探偵　そんなとこかな。ほら、それより靴紐。
少年　もう少ししたらね。

照明変化。美優紀と探偵たちのエリアが繋がる。３人が存在を認識する。

探偵　ほらね。
少年　たまげた。
美優紀　あの。
探偵　なんでしょうか？
美優紀　この前、言ったのって。
探偵　この前。何か言いましたか私。
美優紀　最近誰かのふりをしなかったかって？
探偵　ああ。
美優紀　しましたよ。ええ。それでとんでもないことが起きているんです。
少年　やっと気づいたね。なんで人って生き物は失わないと気づかないんだろうね。
探偵　お話、聞きましょう。
美優紀　というか聞かせて欲しいのよ。何が起きているのか。
少年　すぐに答えを求めようとするのはよくないよ。まずは自分で探さないと。
探偵　そうすると私のように探偵と呼ばれるようになります。(苦笑あるいは嘲笑しつつ)探偵でもないのに。
美優紀　私には時間がない。
探偵　いいえ。こうなってしまった以上、時間しかない、そうは思いませんか。
美優紀　今、家に帰ったんです。
探偵　ええ。
美優紀　そうしたら。
探偵　そうしたら？
美優紀　夫が、妻はもう家にいるって。

探偵　どうやらあなた以外の誰かが生まれてしまったようですね。それとも誰かが貴方のふりをしたのかな。
美優紀　何のメリットがあるのよ。
探偵　メリットとかではないんですよ。
少年　それは引き起こされるだけだからね。
美優紀　あの人は私の夫なの。今もこうしている間に誰かが私のふりをして居座っているのよ。そんなの我慢できない。
探偵　話を聞きたいと貴方は言ったけれど、時間はないとも言う。そして私たちは貴方に伝えられるだけの話を持ち合わせていないんです、実際。
少年　だってまだ探している途中だから。
探偵　話せることと言えば…

照明変化。持ち物はマイムでアンケートを取る人、答える人。それを見ている美優紀。

少年　あ、すみません。
探偵　え。
少年　ちょっとだけよろしいですか？
探偵　なんでしょうか。
少年　今度コンビニで発売するスイーツを発売前にお送りする代わりにアンケートを取らせて頂いているんですが、よろしいですか？
探偵　少しであれば。
少年　ありがとうございます。では、コンビニはよく利用されますか？
探偵　するってほどではないですが、あったら用がなくても寄ってしまいますね。買う買わないは別で。

アンケートを代筆する少年(マイム)。

少年　では。コンビニではどのようなものを買うことが多いでしょうか？
探偵　コンビニで見てしまうのはスイーツのコーナーかな。新しいのが出ていたらちょっと食べてみたいってつい手に取りそうになる。
少年　取りそうになるというのは何か取らない理由があるんですか？
探偵　ちょっと値段が、ね。
少年　ああ。わかります、それ。
探偵　ちょっと高いですよね。
少年　でも売っている側としては言えないんですよ、それ。
探偵　安く出来ない？
少年　ぎりぎりまで下げてますから。

探偵　もっと消費者の声を聞かないと。
少年　はい。ありがとうございました。ではこちらのアンケートにお名前とご住所を記入いただけますか？　後日発売前のスイーツを当選者に送らせて頂きますので。
探偵　抽選なの？
少年　そりゃもう。だってアンケート取らせて頂いた方全員に送ってたら赤字ですよ。
探偵　だったら協力しなかったな。
少年　ま、そう言わずに。せっかくなので。ここで帰られたらただ時間を無駄にしただけですよ。
探偵　うーん。なんだか釈然としない。
少年　どうぞ。

紙とペンを突きつけてくる少年。受け取る探偵。書き始める探偵。**照明変化**。

探偵　どうです。意外と簡単に私と言うものは失えるんですよ。
美優紀　どういうこと？
探偵　実はこの時、私は架空の人物の名前と住所を書き込みました。
美優紀　架空の？
探偵　実際にあるかはわからない番地を書き込み、知り合いにはいないけれどももしかしたらどっかで見たことがある名前のような、そんな嘘情報を書き込んだのです。だから私はもうその名前すら思い出せなくて。
少年　抽選で当たってたら損しかしてない。時間を費やし商品も届かず自分すら失う。
探偵　笑えますね。あはは。
美優紀　笑い事じゃないから。
探偵　でもこの奇妙な状況から抜け出す方法は知っているんでしょう？
少年　それは早々に気づきました。
美優紀　僕も気づいたよ。
探偵　だったらそれを教えてよ。
少年　気づいたとは言ってもそれが合っているとは限らない。
美優紀　そういうこと。
探偵　でも試す価値はある。

探偵と少年、顔を見合わせる。

探偵　誤りを正せばいいんです。あなたが自分を偽るかして失ったのであればその相手を探し出して自分の嘘を告白し、謝罪し、元に戻すんです。本来あるべき姿に。事実を。
美優紀　でも、探し出すって言ったって。無茶よ。だってどこの誰かもわからないってのに。

探偵　だとしたらずっとあなたはそのままですよ。
美優紀　それはいや。私は私だもの。
少年　だったらやるしかないんじゃない。
探偵　あなたが偽物だってことは事実が証明するはずですから、向こうだって気づくんじゃないですか。私が書いた住所が偽物だといつかはバレるように。
少年　そんなに落胆するようなことでもないでしょ。
美優紀　……私、行きますね。
探偵　またお会いしましょう。その時はお互いに自分を取り戻しているといいですが。
少年　バーイ。

美優紀、お辞儀をしてはける。

少年　行った行った。
探偵　行ってしまったねぇ。
少年　これで何人目だっけ。
探偵　何が？
少年　どうやったらこの状況を変えられるのかって聞かれて答えたの？
探偵　まあ、何十人ってところかな。
少年　でもさ探偵。
探偵　ん？
少年　あれって全部作り話なんでしょ。
探偵　失礼だなぁ。作り話じゃあないよ。病院で色んな人から聞いた話をベースにしている私の、そう創作だからね。
少年　だから作り話なんじゃないか。探偵自身の話でもないし。
探偵　言ったじゃないか。私も探しているんだって。前のことなんて…

探偵、ふと何かを思い出しそうになり、はっとするが掴むことができそうな距離にあるのにつかめないというもどかしさとせつなさを感じつつ黙り込む。そんな探偵の表情は見ている方が不安にかられるような笑みを浮かべていることだろう。

少年　どうかした？
探偵　いいや。前のことなんて「無い」のさ私たちには。いっそのこと誰かになってしまった方が気持ち的には楽だったのかもしれない。
少年　そうとは言えない。誰にも他人の人生を勝手に歩む権利はないんだから。
探偵　ごもっともなことを言う。で、そろそろ靴紐結んだら？
少年　ああ、大丈夫。そのうちね、そのうち。
探偵　ちょっと飲み物でも買ってくるよ。

探偵はける。**照明変化(探偵エリアは暗転しない)**。見知らぬ女入り。意気消沈して、心ここにあらずという状態。またお互いに気づかないという体。椅子に座り、ゆっくりとした動作でタバコを取り出し、口に咥える見知らぬ女。それからライターを探すでも、取り出すでもなく、ぼうっとしている。目が虚ろに少年を、少年の靴紐を捉える。少年もその視線に気づく。こそばゆい気持ちになる。結んでいないことを怒られるようなそんな気持ちになっていく。見知らぬ女、立ち上がり、少年のもとに歩いて行き、しゃがみ込む女。どうやら靴紐を結んでいるようだ。

見知らぬ女　　危ないじゃない。靴紐は解けたら結ぶ。そうしないとこけて怪我をするわ。
少年　　ごめんなさい。
見知らぬ女　　ほら、そっちも出す。
少年　　ありがとう。
見知らぬ女　　またこけて膝擦りむいても、おでこぶつけて泣いても知らないよ。
少年　　うん気をつけるよお母さん。

自然に出てしまった言葉。靴紐が結び終わる。そしてゆっくりと立ち上がる見知らぬ女。見つめ合う二人。**照明変化**。二人照明が当たらないエリアへゆっくりと移動。飲み物を買ってきた探偵入り。しかし少年がいないことを確認し、飲み物に視線を投げると、そのままはける。その表情にはほっとしたような寂しいような笑みが浮かんでいた。

○シーン9「病院」

椅子に座っている見知らぬ女と少年、だったモノたち。

元見知らぬ女　　ねえ。
元少年　なに？
元見知らぬ女　　今度デパートにでも行こうか。
元少年　え？
元見知らぬ女　　だってあなたのその格好、まるで男の子じゃない。
元少年　(自分の格好を眺めて)ほんとだわ。
元見知らぬ女　　似合いそうな服、お母さんが選んであげる。
元少年　ありがとう、お母さん。

指示する男入り。電話をしている。

指示する男　　違いますって。私はですね、ああもうめんどくさいなぁ。わかりました。

はい、じゃあ失礼します。

指示する男、見知らぬ女、見合う。お辞儀をする二人。
指示する男、電話がかかってくるが出ない。そのままポケットに突っ込む。ＳＥ
要相談。音がポケットに入れた段階でくぐもることは可能か。

元見知らぬ女　あの。
指示する男　はい。
元見知らぬ女　電話、鳴ってますよ。
指示する男　ええ。そうですね。困っちゃいますよね。鳴らし続けられても。
元見知らぬ女　でも相手も困ってしまうわね。だって出ないんですもの。
指示する男　じゃあ喧嘩両成敗ってことでいいですかね。
元見知らぬ女　いいもんですか。出てあげて下さいよ。
指示する男　何で電話に出させたいんですか。
元見知らぬ女　その人の、かけている人の悲しさに共感するからですわ。

間。指示する男、電話に出る、フリをして「応答」ではなく「拒否」を押す。

指示する男　あ、すみません。お待たせ致しました。はい、はい、その件ですね。それはですね。

元見知らぬ女と元少年が楽しそうにサイレントで話を続ける。
指示する男、照明から外れていくがスイッチするように二人のエリアの照明が消えて、指示する男に照明が。そっと電話を持つ手を下ろし、ポケットにしまいはけ。

看護師入り。追って探偵入り。

探偵　いや、これは本当なんだって。信じてほしいなぁ。
看護師　真実を語るものは信じて欲しいだなんて言わないものだよ。
探偵　屁理屈じゃないか。
看護師　屁理屈じゃないよ。それより君はあれだ、売店の横で営業しないこと。
探偵　私の楽しみを奪うというのかい。
看護師　なぁにが奪うのかいだ。脱走しといて。
探偵　だからそれは謝ってるじゃない。こうして戻ってきたんだからチャラだよ。
看護師　チャラにはならないって言っているだろう。ペナルティとして病棟の掃除を言い渡す。
探偵　そんな殺生な。

ふと立ち止まり元少年の居る方を見遣る探偵。

看護師　どうかした？

探偵　否、知り合いに似た子が居たのでね。さぁて、何処の部屋から掃除をするかなぁ。

医師入り。探偵はけ。照明変化。

看護師　次の方お入り下さい。

美優紀入り。手には茶封筒。

医師　今日の気分はいかがですか。

照明変化。医師、看護師は時間の停止。次の台詞途中で静かに機械音、蛍光灯などが「ジー」と音を立てているような物音がし始める。

美優紀　私は誰ですか。この問いはもう何度もしている。もう誰かだったはずの私はその時の記憶を喪い、今となってはどういう生活をしていたのかすら曖昧になっている。もしかしたら本物の記憶、実際にあったことかもしれないけれど、その保証はどこにもない。夢の残像、残滓を手にしているようなもの。私は一人で暮らしていたのかしら。家族のことすら思い出せない。と、喋っている私の言葉遣いは変わっていないかしら。自分を失ったことで人との接し方も、喋り方もわからなくなってしまって。私は、あたいは、僕は、自分は、……誰？　何が原因でこんなことに、私がこんな目に合わないといけないんでしょうか。この封筒は。このお金は何。誰か、占い師でもいい詐欺師でもいい、いやよくない。そんな人達に答えられるわけがない、そんな経験を私は今強いられている。神様、どうかお答え下さい。私が何をしたのでしょうか。私は元の生活に戻れるのでしょうか。

看護師　神様もそんなこと聞かれても困っちゃいますよ。

照明変化。

美優紀　え？

医師　此処は病院ですからね。

美優紀　先生、私は、

医師　落ち着いて。さぁ治療を始めましょう。

第３話『上書き保存される迷える魂』　了

第４話『あなたに会いたいから私は今日も空を見上げる』

○シーン１「藤島家１」

前の話終わりより、ＳＥ黒電話が鳴っている。しばらくして受話器が上がる音。
明転。椅子に座っている栞里と真司。お互いに本を読んでいる。栞里が読んでいるのは星空の本だ。

栞里　来週の土曜日って何の日でしょうか？
真司　結婚記念日。
栞里　ぶっぶー。適当にそれ言えばいいとか思ってない？
真司　まっさかぁ。

栞里、疑わしい目で真司を見るが、気を取り直して、こほん、と咳払いをする。

栞里　ということで、
真司　え、正解は？
栞里　細かいことはいいとして、来週の土曜日、久しぶりに外出しようと思います。
真司　久しぶりってまるで家から一歩も出ていない人の発言じゃない。おとといだって駅前のデニーズ行ったばかりじゃない。栞里の中ではあれなかったことになってる？
栞里　そうじゃないじゃん私が言ってるのは。レジャーなのバケーションなのバカンスなの。
真司　えーと。ごめん、ちょっとよくわからないんだけど。
栞里　駅前より遠くに行こうよ。デニーズを越えて行こうよ。その先に私達の目的地はある。
真司　じゃあ、隣の駅にあるビックカメラとか。
栞里　カメラに興味ないよ。買い換える予定の電化製品ないよ。
真司　電化製品を侮ってはいけない。あれは見ているだけでも心が和む。そして知識も増える。行ってきたらいいじゃない。
栞里　行かないし。って、言っておくけど、あなたが連れてくんだからね私を。他人事みたいにさっきから言ってるけど。
真司　そっかぁ。じゃあ、何処に行きたいの？
栞里　ふふふふふ。
真司　何その不敵な笑いは？

栞里　ノープラン。ただ私を楽しませたら褒美を取らせよう。
真司　出たよ。それって丸投げじゃないか。褒美とか言ってもチロルチョコ一個とかだろう。やだって、めんどくさい。
栞里　じゃあさ、ここで私が泣き叫んでもっとめんどくさくなるのとプラン考えるのとどっちがまし？

真司、読んでいた本を閉じて、天井を見上げる。そして溜息を吐く。

真司　わかったよ、考えるよ。考えるけど、ないわぁ、とか言うなよ。
栞里　それは聞いてから考えます。
真司　ずりぃな。

栞里、うきうきを表現しながらカレンダー(卓上とか)に丸をつけている。真司そんな栞里を見ている。照明変化(独白から回想へと入っていく)

真司　あの日も妻の栞里はこうやってカレンダーを嬉しそうに眺めていた。自分はと言えば、馬鹿みたいに彼女をこう眺めて、それからどうしたっけ？（切り替え。本を手に取って)ねえこれってもう捨てていいんじゃない？
栞里　だめだよ。え、何基準で捨てていいとか言ってる？
真司　だってさ、ちょっとここ。２００８年って。え、何年前だよ。
栞里　年数は関係ない。
真司　ちょっと待って。今から１０年前って、え、なにこれ。自分たちが高校時代のもの？
栞里　そうそうそう。部室からもらった。
真司　そうなんだ。

間。

真司　え、なに。
栞里　部室からもらった。
真司　許可は？
栞里　誰に？
真司　学校とか先生とか。
栞里　取ってないけどまずかったかな。
真司　君ってそういうところあるよね。
栞里　わかったわよ、今度返してきてよ。
真司　違う。普通は、返してくるわよなら百歩譲ってわかるんだよ今の会話はね。
栞里　誰が返したって同じじゃない。

真司　何が同じなものか。
栞里　だってこの本がね学校の部室の本棚に戻されるっていう結果に変わりはないでしょ。私でも貴方でも。
真司　(絶句したものの慣れている)だ。あのさ、悪いことをしたのは？
栞里　だって捨てられちゃうよ。
真司　捨てられるとしても無断で持ってきていいの？
栞里　悪い。でもさ。
真司　ほら、認めた。
栞里　認めさせられた。

真司、本を栞里に渡す。ぶーたれた顔をして本を受け取る栞里。真司、カレンダーの赤丸に目をやる。

真司　ねぇ、この日って誰かの記念日？
栞里　ああ、それ。ふふふふふ。
真司　え、気持ち悪いんですけど。
栞里　なんとでも言えばいいわ。その赤丸はですねぇ、聞きたいですか？
真司　それほどでも。
栞里　実はその日は、
真司　お茶でも入れてこようかな。

栞里、立ち上がる真司のシャツを掴む。

真司　聞いてほしいの？

栞里、小さく頷く。

真司　じゃあ、お願いしますは？
栞里　お願いします。
真司　よく出来ました。じゃあ、どうぞ。

真司、再び椅子に座る。

栞里　その日私は旅に出ます。
真司　おっと、どうした。初耳なんですけど。
栞里　ずーっと楽しみにしてたの。
真司　だから何を？
栞里　天文台で星を見る会があるんだって。

真司　どこの？
栞里　(地名をぼかす)ほっふぁいお。
真司　なんだって？
栞里　ほっまいごー。

真司、黙って栞里を見つめる。観念する栞里。

栞里　北海道の天文台です。
真司　何で黙ってたの？
栞里　いやぁ、まぁ、ちょっと、距離的にあれかなぁと。
真司　そうだね。遠いね。
栞里　でも私ももう大人なんで、それに結婚する前は一人旅だってよくしてたし。もう申し込んじゃったし。今更キャンセルとか出来ないからね。
真司　でもさ、言わないと。もう君は一人じゃないんだから。
栞里　じゃあ聞くんですけど。ここにカレンダーずっと置いてあったよね。で、私結構聞いて下さいオーラ出してたよね。言葉にも出してたよね。「スーツケース何処しまったかな」とか、「今の季節って北海道寒くないかなぁ」とかさ。でも真司、無視してたじゃん。そこに罪はないんでしょうか。
真司　それはごめんなさい。ただ、別に行っちゃ駄目とか言わないと思うんだけど。
栞里　そうだと思うけど。
真司　自信がなかった？　行かせてもらえるかどうか？
栞里　そう。
真司　そっかぁ。まあ、君の夫としてはね、言ってもらえないと悲しいじゃない。
栞里　うん。
真司　…楽しんでくるといいよ。
栞里　ありがとう。おみやげは木彫りの熊でいいよね。鮭を口に食わえて「うおおおおお」って感じのやつ。

真司、栞里の熊のポーズを見つめながら、「それ熊って言うより劇団四季のライオンキングのやつじゃね(観たことないけど)」みたいなことを考えていた。うきうきと心弾ませながら本を抱えてはけようとする栞里。立ち止まり、そして振り返る。

栞里　あのさ。
真司　うん。
栞里　黙っててごめんなさい。
真司　もういいよ。

栞里を見送る真司。照明変化。※栞里ははけずに椅子に座る。

真司　もしもこの時、僕が止めていたとしたら、どんな未来があったんだろう。

ＳＥ車の走行音。外の音。照明変化。

○シーン２「街中１」

荔枝、悠入り。荔枝の手にはマックシェイク(味はストロベリー)。どうやら悠に買ってもらったようだ。※荔枝、最初は機嫌がいいが、悠と真司の会話中もストローで吸い上げるも全く歯が立たず徐々に苛立ってくる。

真司、仕事の休憩中、太陽観察メガネで天を見ている。

悠　藤島真司さんですね。
真司　え？
悠　藤島真司さんですよね？
真司　(メガネを外して)そうですけど。
悠　(心からほっとして)よかった。一瞬人違いかと思ってしまいました。
荔枝　太陽なんか観て何が面白いのかねぇ。人間のほうがよっぽど面白い存在だよ。
真司　はい？
悠　荔枝。

荔枝、勝手にやってくれよという態度。

悠　(切り替えて)お忙しいところ申し訳ありません。ちょっとだけお時間頂けますか？
真司　時間ですか？
悠　はい。すぐ済みますので。
真司　あのどちら様でしょうか？　それにどういうご用件ですか？
荔枝　なんだよ、シェイク。飲ませるのか飲ませないのかはっきりしろ。こっちは客だぞ！

真司と悠、少し離れたところにいる荔枝を見遣る。

悠　あれは気にしないでください。ああいうものなので。そして我々が何者で、あなたの用件が何であるかについても今は気にしないで頂きたいのです。ここで口にするとお互いに良くない結果となりえますので。

真司　えーと、何かの勧誘ですか？　それとも営業とか。
荔枝　うるさいなぁ。疑問疑問疑問疑問。疑問ばかり並べるんじゃないよ、マジで。黙って私たちについてくればいいって話。すっごいシンプルでしょ。だから誰かもわからない人たちについて行くってのがそもそも無理じゃないですか？
真司　ああ、じれったい。ちょっと来い！
荔枝　荔枝に掴まれて連れて行かれる真司。意外と強い、あるいは真司が弱いのか。
真司　え、なに。ちょっと、すみません、話をですね。誰か助けて！
　という情けない声を残してはける真司。そして荔枝。悠はそれを見送って悠々とあとをついてはける。

○シーン３「藤島家２」

　前シーンが終わる前に莉乃入り。椅子に座る。**照明変化**。
　初美入り。初美の手にはお盆。湯呑みやコップが３つ載っている。

初美　お待たせ。
莉乃　あ、すみません。
栞里　ありがとう。
初美　別に栞里のためにやってるわけじゃないから。私が飲みたいから入れてるだけだし。
栞里　んなこと言ってもさ、初美、私の事好きじゃん。
初美　栞里、そういう人が聞いたらあれなこと言わないでよ。違うんですよ。私別にシスコンとかそういうのじゃないんで。今のは姉妹的な仲の良さっていう表現でね。
莉乃　わかってますわかってます。言い過ぎると逆にシスコンだなって思っちゃいますので。
栞里　私は好きだよお姉ちゃんのこと。あいらぶまいしすたー。
初美　(一刀両断するように話を切る)で、相談って何？　さては夫婦喧嘩でもした？
栞里　楽しそうに話さないでよ。別に喧嘩なんてしないからうちは。
莉乃　ですよねぇ。栞里先輩も真司先輩も高校の頃からずっとお互いのこと好き過ぎですもんね。見守ってるこっちが恥ずいぐらいでした。
栞里　はぁ。何言ってんのよ。別にそんな感じ微塵も出してないし。
初美　これはツンデレというやつね。
莉乃　さすが姉妹。
栞里、初美　一緒にするな！

初美　だから用件は？　せっかくの休みに妹から折り入って相談がとか言われて、こりゃなんかあったなと想像力働かせて駆けつけたんだからさ。もうビビッときたわよ。

栞里、話しにくそうな空気を醸し出す。莉乃も相談内容を知っているので妙な空気が作られていく。

栞里　ま、大したことじゃないと言えば大したことじゃないんだよ。わざわざ休日にお姉ちゃんを呼び出すほどの話じゃ全然ないんだ。

初美　じゃ、帰るわよ。息子の世話を旦那に任せて来てんだから。

莉乃　たまには旦那に任せてもいいんじゃないですか？

初美　うちの旦那を知らないからそんなことが言えるのよ。この前も、ちょっと買い物行ってくるからその間、子供見ててって言ったらさ、あとで畳もうと思っていた洗濯物の山でドッジボール。しまいにはその山にダイブ。見ててってそういう意味じゃないでしょ。

莉乃　まあ、旦那って子供みたいなものですからね。

初美　まるで子供がいます的な発言ね。

莉乃　いないですよ。え、いないですよ。

栞里　あ、それ、取ってくれる？

初美　それ？　え(と言って黒電話に近づいていく)、なにこれ。

そう言って一度上手にはける初美。

○シーン４「街中２」

荔枝に引っ張られて入ってくる真司。手を放す荔枝。悠入り。

荔枝　藤島さんね、ちゃんと返すものは返さないと。

真司　何のことですか？　さっきから返すとか返さないとかって。

荔枝　忘れてる。いや、忘れてるフリか。だとしたら思い出させてあげようか。

真司　待って下さいって。僕、借金とかないですよ。誰かの保証人とかにもなったことないですし。ちゃんと調べて下さい。

荔枝　こんな可愛らしい私が借金取りに見えると？

真司　誰も言ってませんよ。

徐ろに悠が荔枝をどける。あるいは間に割って入る。

悠　藤島さん。

真司　なんですか？
悠　驚かないで聞いて下さいね。…私たちは、神様から遣わされた使者なんです。

間。

真司　へぇ。
悠　その顔は信じていないですね。
真司　つまりは天使ってことですよね？
悠　まあ言い方は色々とありましょうが、天使というのが最もイメージしやすいのであれば否定はしません。
真司　無理やり連行するところがどちらかと言うと悪魔。
荔枝　こいつ殴っていい？
悠　暴力では何も解決出来ません。
真司　まだ(悠を見て)こちらのかたの方が天使ぽい。
悠　ありがとうございます。
荔枝　俺殴る。お前殴られる。よし、そこに座れ。
真司　痛いの嫌ですよ。仕事がまだ残っているというのに、突然こんなところまで連れてこられて、一体何なんですか？　宗教かなにかですか？　僕の名前はどうして知ってるんですか？
荔枝　どうしてだ、何も覚えてないわけ？　私達のことも忘れた？
悠　荔枝、無理な話よ。あの時彼には私たちの姿は見えていなかったはずだし。
荔枝　あーーー、じゃあはじめましてみたいなもんじゃん。
真司　はじめまして。
荔枝　(ヤケ気味)はじめましてっ！
悠　そんなにキレても仕方ないでしょ。
荔枝　だってさぁ。

真司、二人を見ながら何かを考えている。

悠　どうかしました？
真司　いや、…あれ？　既視感？　デジャブ？　なんだろう、どこかでお会いした気がしてきました。
荔枝　ほらほら覚えてるんだって。そういう人もいるんだって。さぁ思い出すんだ。私たちの顔を声を。
真司　貴方達はもしかして。
荔枝　そうだよそうだよ、その調子。
真司　保険のセールスレディさんですね。この押しの強さ当たりでしょ。

悠にシェイクを預け、真司の背後に回り込む荔枝。

荔枝　神様から、遣わされた、使者だって、言ってんだろう。

荔枝、セリフに合わせて真司の背中をバシバシとリズミカルに叩く。

悠　こらこら、人を殴ってはいけませんよ。

悠、荔枝を真司から引き離す。それでも蹴ろうとするが届かず、空を蹴り上げる。

真司　諭すなら殴る前にしてほしいんですけど。

悠　すみませんね。この子、言葉より手や足で説明したほうが早いということに気づいちゃった系なので。

荔枝、悠からシェイクを奪うように取る。

真司　系とか、なのでとか言われてもね。

悠　一つ一つ説明させて頂いた方が良さそうですね。あなたは聞く耳は持っていそうだから。

真司、叩かれた背中を痛がりながらも悠を見る。

○シーン5「藤島家3」

初美、黒電話を持って入り。

初美　こきつかわれる姉。

栞里　ねぇ。

初美　ねぇじゃないわよ。

莉乃　栞里先輩もお姉さんには甘えちゃうんですね。私たち後輩の前ではずっとキリリとしてたのに。

栞里　いつまでも先輩先輩ってさ、高校卒業してもう何年経つのよ。

初美　あなたたち、いつまでもあると思うな、金と若さ。

莉乃　お姉さん、それは失礼だと思います。撤回することを要求します！

初美　ま、それはそれとして、莉乃は栞里と同じ学校だったのよね。

莉乃　そうですよ。家にも何度も遊びに行きました。はっ、待って下さい。ということはお姉さん、もしかして私の事、忘れてますか？

初美　えーと。大丈夫。今覚えたから。

莉乃　ショックです。ちょっと素敵だなとか思ったり思わなかったりしたのに。
初美　どっちよ。
栞里　同じ天文部だったしね。

一瞬間が生まれそうになり、その一瞬生まれかけた静寂を消し去ろうと不自然じゃない程度で反応する初美。

初美　あら、ロマンチストだこと。
栞里　悪い？　私たちロマンチストよね。
莉乃　あ、私、楽な部活探して天文部に。
栞里　そういう子もたまにはいる。
初美　で、これは何？
栞里　え？
初美　え、じゃなくて。
栞里　黒電話。
初美　いや、それは見れば分かるけどさ。
初美　私が今日呼び出された理由は、まさかとは思うけどこの黒電話の回線を繋いでくれとかじゃないわよね。それだったら旦那に頼みなさいよってことになるわ。
栞里　違うよ。っていうかこれがここにあるってことは出来れば真司には知られたくない。だから二人とも今日のことは秘密にしてよ。
初美　どういう意味？
栞里　色々とあるのよ。順番に話すからさ。実はこの電話を持ってきた人たちがいてね。

栞里、黒電話を手にしてその場で立ち上がる。**照明変化**。

○シーン6「藤島家　玄関」

栞里　黒電話。え、なんですか、これ？
荔枝　今言ったじゃん、自分で黒電話って。
栞里　そうじゃなくて、なんで黒電話を私持たされているんですか？
荔枝　受け取ったからだろ。
悠　この電話はあなたに必要なものではありません。お手紙と一緒にあなたの旦那様である藤島真司さんにお渡し下さい。
栞里　何で真司のこと知ってるんですか？　貴方達は、誰？
悠　それについて今はお答えすることが出来ません。ただ真司さんの配偶者であるあなたにも無関係ではないので彼が不在である時間帯にこうしてご挨拶を兼ねて訪ねさせて頂きました。
栞里　だったらこれが何であなたたちが誰なのか言いなさいよ。

悠　ごめんなさいね。
栞里　はぁ？　これ、持って帰って下さい。
悠　それも出来ません。危険なものではありませんのでどうか何もこれ以上聞かずに受け取って頂き、真司さんにお渡し願えませんか。
栞里　爆発したりとか？
悠　しません。
栞里　盗聴器が仕込まれているとか？
悠　(笑いながら)何目的ですか？　ご安心下さい。
栞里　安心出来る材料が何一つないじゃないですか。持って帰って下さい。
荔枝　うるさいなぁ。黙って受け取ればいいんだよ。そうしたら神様から旦那宛に電話がかかってくるから。

間。頭をゆっくりと抱える悠。言ってしまったんだから仕方がないじゃないとでも言いたげに、でもやってしまった感も匂わせている荔枝。

栞里　神様？

照明変化。

○シーン7「藤島家4」

初美　神様？　神様ってのはあの神様であってる？
栞里　どの神様を言っているのかわからないけれど、あってるわよ。
初美　え、確認なんだけど。
栞里　なに？
初美　それはあの神社で祀られている神様のことよね？
栞里　うん。あ、でもわかんない。
初美　わからない？
栞里　だって、この黒電話を渡しにきた二人のうち一人はずっとマックシェイク飲んでるんだもの。そんなの神社とかで祀ってるとか想像できないし。
初美　いや、ちょっと喉渇いたから飲んでたってことでしょう。マックシェイクを。
栞里　しかもストロベリーだったわ。
初美　そのストロベリーシェイクを必死になって飲んでたっていいわけよ。いや、そこじゃない。問題はこの黒電話よ。なに受け取ってるのよ。
栞里　だって、まるで逃げるように去っていったんだもの。
初美　逃げるようにって逃げたのよ、これ置いて。よし、警察に持って行こう。どんな顔だったか覚えてるでしょう。モンタージュ写真作ってもらおう。
栞里　落ち着いてよお姉ちゃん。っていうか、行けないんだよ、警察。

初美　はい？　何か脅されてるの？　わかった！　栞里がその椅子から重いお尻を上げると爆発するような仕掛けが。

栞里、初美を殴る。※栞里はこの時まだ椅子から立たせられないので、初美位置を調整。殴られに行くみたいなアクトにならないように。

初美　地味に痛いから。

栞里　重くないもの。お姉ちゃんよりは。

初美、栞里をつねる。

栞里　痛い。叩くよりつねる方が痛いんだよ。

初美　目には歯をよ。それで、なんで警察行けないわけ。理由を言ってみなさいよ。

栞里　それは。

莉乃　かかってきたからですよ。

初美、間。莉乃を見て、続いて栞里を見る。栞里、目を合わせないが頷く。

初美　神様。どんだけ暇なのよ。そういうイタズラが流行ってるの？　ピンポンダッシュみたいにドア開けたら黒電話を渡されて、しばらくしたら神様と名乗る者から電話が来るような。

栞里　そうじゃないんだよ、お姉ちゃん。

初美　そうじゃないって、何よ。

栞里　イタズラじゃないんだ、これ。

初美　どこからどこまで？　え、あなたたち、これ、信じてるの？　神様。いや、私だって信じてないわけじゃないのよ。元旦には初詣もするし。宝くじ買ったら当てて下さいって神様にお祈りするし。でも、でも黒電話にもしもしって。…そんな神様、初めて耳にするわ。

莉乃　でもかけてきましたからね。電話。出ちゃいましたからね。

間。

初美　そっかぁ。かけてきたかぁ。

頷く面々。

○シーン８「街中３＆回想」

少し前に真司入り。

真司　黒電話ですか？
悠　ええ。届いていると思うのですが。
真司　すみません。受け取っていないですね。

見つめ合う荔枝と悠。

悠　それはおかしいですね。直接、渡しましたから。奥様に。
真司　でも僕は見ていないんですよ、そんな黒電話は。
悠　困りましたね。
荔枝　隠したんじゃないの、あの奥さん。
悠　隠す必要がないでしょう？
荔枝　いや、ほら、神様から電話くるからとか言っちゃったし。
悠　あなたがね。
荔枝　でもさでもさでもさ、私ばっかりは責められないと思いますけど。
悠　なんで？
荔枝　だって話がまとまらないからって黒電話を突きつけて逃げてきたじゃない。
悠　それはあなたが逃げろって言ったから。
荔枝　あーあーあー、なんでもかんでも私のせいにする。神様に言いつけます。評価下げてもらいます。明日から私の下で働いてもらいます。
悠　私の評価だけが下がるとは思えないんですけど。
荔枝　そうやってさ、私のことをいっつも下に見てさ。
悠　下になんて見てないよ全然。

悠、そう言いながら足元を見ている。

荔枝　そんなに下を見るな。私はこっちだ。
悠　あ、どうも。
真司　えーと、お笑いの方たちですか？
荔枝　違うわい。
悠　わいってあなた。…

ちょっと恥ずかしそうにしている荔枝。

悠　はぁ。だから神様もあんなことを仰っていたんですね。あの人達、すぐ電話を切るんだよ。とか。
真司　あの人達？

悠　奥様以外にも出られた方がいたみたいですよ。
真司　誰だろう。でもまあ、妻が電話に出たという事実はあるんですね？
悠　神様曰く。
真司　じゃあ、家にあるのか。
荔枝　とっちめる必要があるね奥さん。
悠　なんでも力づくではいけませんよ、荔枝。
荔枝　その方が早いんだもん。
真司　その子、考え方がヤバイですよ。
悠　いいえ、この子は何も考えないことがヤバイんです。

シュシュシュとパンチを繰り出している荔枝を眺める二人。

真司　そういえば。
悠　なんですか？
真司　いや、確かこの前、何かを隠しているような素振りをされた気が。気のせいだろうと思ってスルーしちゃったんですけどね。

照明変化。
真司、何かを探す素振り。棚などを開けたりするマイム。

真司　おかしいな。
栞里　え！　何してるの？　勝手に変なところ開けないでよ。
真司　なんだよ。この辺に空のＤＶＤしまっておいたと思うんだけど。見なかった？
栞里　ああ、チョット待って。確かどっかにしまった記憶がある。
真司　えー、どこに。そこ重要じゃない。
栞里　ばたばたと片付けちゃったから忘れただけよ。探してみるから、あなたは探さなくていいから。
真司　いいって。使うのは僕だから。君こそ休んでればいいよ、そこに座って再放送のドラマでも見てなよ。

再び探そうとし始める真司。

栞里　あー、そうじゃなくって。ちょーーと待って。言ってるそばから探さないでくれる。えーとね、じゃあ、分かった。そっちから右はあなた。こっちから左を私が探す。ＯＫ？
真司　ＯＫ。…なに、へそくりでも隠してる？　なぁんてね。
栞里　べべべ、別に何も隠してませんけど。私すぐに顔とかに出ちゃうタイプだから隠せないしね。

真司　だよねぇ。隠せないよねぇ。
栞里　そうだよ、隠せないよ。左には何もないよ。

照明変化。

真司　と言うようなことがありました。
荔枝　なんか隠してるじゃん。つーか左側に絶対あるじゃん。
悠　(とてつもない圧を感じる微笑みを浮かべ)家に帰られたら探してみて下さいね。
真司　はい。…

回想再開。栞里、本を取って読み始める。

真司　まだ起きてたんだ？
栞里　夜更かししてもいいでしょ。もう大人なんだから。
真司　お肌に悪い。君もそろそろ気にし始めないと。
栞里　殴るよ。…で、さ。
真司　ん？
栞里　ん？っていう反応やめてくれる。お姉ちゃんと一緒。でね。
真司　うん？
栞里　わざととかやめてよね。
真司　今のは「うん？」であって「ん？」じゃないよ。
栞里　そういう屁理屈、どこで覚えてくるの？
真司　で、何？
栞里　だから、土曜日。もう今週だよ。
真司　ああ。
栞里　ああ、って今の今まで忘れてた？
真司　そんなことあるわけないじゃないか。君じゃあるまいし。
栞里　(カレンダー)ここにも丸書いてあるんだからね。
真司　知ってるよ。丸書いているところ見てたから。
栞里　そうじゃなくてね。ああ、もう。
真司　ごめんごめん。でもちゃんと考えてるし。当日を楽しみにしてればいいじゃない。
　　土曜日は黙っていたって来るんだから。
栞里　そりゃ来るわよ。でも何も用意してなかったらただの土曜日なんだからね。そこ
　　わかってる？
真司　勿論。
栞里　何もしてませんでしたとか、当日適当に考えましたとかだったら、しっぺね。
真司　昭和。発想が昭和だよ、栞里。
栞里　昭和とか言わない！　一応平成生まれだもの。

真司　一応ね。ま、期待していてよ。
栞里　期待ねぇ。

真司、はける。栞里、本を閉じて置く。

○シーン９「藤島家５＆回想」

莉乃　私、栞里先輩からＬＩＮＥもらって、『妙なものを渡された(　；ε；、)』って。
　　あ、あのスタンプかわいいですね。
栞里　でしょ。あれ無料のやつ。
莉乃　すぐダウンロードしちゃいました。
初美　続き。
莉乃　すみません。えーと、だからすぐに駆けつけたんです。そうしたらこれがあって
　　…。かかってきたんです。
初美　なるほどね。
莉乃　そりゃあ、電話ですからね。かかってきますよ。当然じゃないですか。電話はか
　　かってくるものでかけるものなんですから。
栞里　でも私たちが驚いたのはそこじゃないのよ。ま、それが起きたから私たちも神様
　　って存在を信じざるを得なくなったわけだけど。
初美　というと？
栞里　(一呼吸置いて)回線、つなげてないのにかかってきたのよ、これ。

栞里と莉乃、黒電話を見下ろす。初美少し離れて様子を窺う。ＳＥ電話の音、大きくなり**照明変化**。黒電話にびびって抱きつく二人。

栞里　これは出た方がいい？　それとも出ない方がいい？
莉乃　おかしいですよ。だって回線つながってないですよ。
栞里　じゃあ、出ないでいいのね。
莉乃　でも出ないという選択肢も厄介なことになりませんか？
栞里　じゃあ出る。莉乃出てよ。
莉乃　嫌ですよ。なんか祟られる感じするじゃないですか。私、この前電車のドアに挟
　　まれて危うく発車されそうになったんですから。もう誰かに祟られているぐらい
　　には運悪いんですから。
栞里　知らないわよ。
莉乃　そんな殺生な。だってこれ、現象だけ見たらホラーじゃないですか？　絶対嫌で
　　すって。

押し問答を繰り返しつつ、受話器を取る栞里。

莉乃　何で取るんですか？
栞里　いや体が勝手に。…えーと、もしもし……。

ガチャンと音を立てて電話を切ってしまう栞里。

莉乃　え、どうしたんですか？
栞里　いや、『神様ですけど』って言うから。
莉乃　神様の電話切っちゃったんですか？　何してるんですか？
栞里　だってさ、神様なんだもの。突然神様ですけどって言われたらどうする。驚いて切っちゃうでしょうが。
莉乃　でしょうがって言われても。またかかってくるんじゃないですか。電波が悪かったかなと思って。って電波ってなんですか？　私たちの今の会話ほど電波なことはないですよ。
栞里　電波電波うるさいな。じゃあ今度は貴方が出てよ。
莉乃　嫌ですよ。
栞里　部長命令よ。
莉乃　こんな時だけ部長を出さないで下さい。

という押し問答中に電話が鳴る(ＳＥ黒電話)ので莉乃のセリフ終わりに勢いで受話器を取る栞里。そのまま莉乃に渡す。

莉乃　ちょっとー！
栞里　出て出て。
莉乃　嫌ですって。だってこれ真司先輩にかかってきたやつじゃないですか。
栞里　それとこれと話は別！

受話器を押し付けあった結果渡されてしまう莉乃。受話器を受け取り、おずおずと耳に押し当てる。

莉乃　あのー、もしもし。イタズラだったらですねやめていた(だけませんか？)

受話器を置く莉乃。間。

栞里　何で切るの！？
莉乃　だって神様だって言うからぁ。

照明変化。

初美　何やってんのあんたたち。

ひとまず落ち着こうかという空気感のもと椅子に座る面々、そして空になったマグカップに気づいた栞里、足を引きずりながらカップを持ってはける。

莉乃　あ、私やりますよ。

栞里　いい、いい。

莉乃も追ってはけ。ここで初めて栞里は椅子を立ち、足に障害があることが露見する。照明変化。

○シーン１０「街中４」

真司　あの、一つ聞かせてほしいんですけど。

悠　なんですか？　答えられることと答えられないことがありますが。

真司　どうして僕なんですか？

間。荔枝、ようやく吸えるようになったマックシェイクで大人しくなっている。

荔枝　うまし。

悠、そんな荔枝を見遣りつつ、答える。

悠　そうですね。それについてはあなたには知っておく権利があるかもしれませんね。(少し表情曇って、嘲るように)どうせあの神様のことですから、そんな理由知ってどうするとか言われると思いますが。

真司　意外と神様って(言葉を選びに選んだ結果)嫌な方なんですか？

悠　嫌とは私からは申しませんが。…

遠い目でどこかを見つめる。

真司　なんだかごめんなさい。

悠　いいんですよ。ええ、ほんとに。

真司　で、私が選ばれた理由についてなんですが。

悠　ああ、そうでしたね、そのお話でしたね。

真司　全く心当たりがないものですから。

悠　心当たり、あると思いますよあなたは。だってあんなに神様に心から祈りを捧げ

たのですから。

○シーン１１「藤島家６」

初美、手近にあった雑誌を手に取る。星座に関する本。

初美　ねえ、これ。

栞里の後ろから莉乃、お盆にマグカップなどを載せて戻ってくる。

栞里　え？

初美、雑誌を掲げてみせる。

栞里　あれ、お姉ちゃんも興味あった？　ロマンチスト、バカにしてたんじゃないの？
初美　違うわよ。ただね、星空に対する興味ってなくなってないんだなって思っただけ。
栞里　そりゃあそうだよ。私中高と天文部（だったし）。
初美　さっき聞いたよ。他の部員が大変そうよね。
莉乃　ほんとですよ。分かって頂けますか？
栞里　なによそれ。私が部長でみんなに迷惑かけた？
莉乃　自分の胸に手を当ててみればよろしいです。

栞里、自分の胸に手を当てて、聞いている。

栞里　うん、うん、そう、そうよね。全然ないって。
莉乃　自作自演！　副部長がいつも部長のフォローですよ。
栞里　例えば？
莉乃　どこに星座観賞しに行くかとか全然考えてくれないし、部費も集めないし、その割に勝手に部費で星座の本とか買い漁ってるし、あと、なんでしたっけ。……あ、ほら、天体望遠鏡を購入するためにって言ってみんなでお金を積み立ててていたのに何故か太陽観察メガネ１００個とか買ってきちゃうし。
初美　実の妹ながら呆れるわ。
莉乃　他にもですね。
栞里　わかった。もうごめんだよ。ごめんとしか言いようがないよ。
莉乃　それは副部長に言って下さい。観賞する場所見つけて、部費集金して、メガネ返品して、関係各所に謝罪して回ったんですから。
栞里　あなたたちは何してたのよ。
莉乃　見てましたよ。じーっと。

栞里　同類じゃない。
莉乃　(否定の意味で)同類じゃない！
栞里　やだよ。謝るとかさ。
莉乃　子供ですか。
初美　そうね。聞いた限りでは副部長とやらに謝ったほうがいいと私も思うわよ。でも、ちょっと驚いたな。
莉乃　妹の出来の悪さにですか？
初美　ま、それにも驚いたけれど。
栞里　二人して失礼よ。
初美　私が驚いたのはさ。

○シーン１２「街中５＆藤島家７＆回想」

真司　神様に祈ることぐらいしますよ。でもそれで僕ってのはどうも。
悠　あの時あなたは自分の命すら願いが叶うのであれば捨ててもいいと強く思ったはずです。
真司　あの時あの時ってさっきから。……あ。
悠　思い出しました？
真司　あの時か。
悠　あの時のことはあまり思い出したくないですか？

初美、星空の本を置く。

初美　星を見に出かけてあんなことに遭ったのに、ってちょっと思っただけ。
栞里　あんなこと、ね。うん、まあ、そうなんだけどね。
初美　夜空を見るたびに思い出すんじゃない？

真司、栞里それぞれ空を、天上を見上げて。

真司、栞里　思い出しちゃうよ。忘れられるわけない。

照明変化。過去、病院の廊下。椅子に腰を下ろし、ひたすら祈り続ける真司。

悠　神に祈るそこのあなた。もしその願いを叶えたらあなたは何をしてくれますか？
荔枝　君の命と引き換えにとかなら全然。
悠　そんな権限ないでしょ。
荔枝　そんなん悠にもないだろ。
悠　何を張り合ってるんだか。(荔枝から真司に視線を移して)…もう一度伺います。

あなたのその願いが叶ったら、あなたは何をしてくれますか？
真司、その声がまるで聞こえたかのように顔を上げて、まっすぐ前を見つめる。
そして祈りを捧げる。悠、その無言の言葉を耳にして頷く。

悠　なるほど。わかりました。

悠と荔枝顔を見合わせ、空を見上げる。神様とコンタクトを取っている。荔枝、笑みを浮かべる。

荔枝　ＯＫ、出たねぇ。よかったねキミ。んじゃあ、ちょっくら手術室行ってくるわ。
悠　あなたのことは覚えておきましょう。

２人はける。代わりに初美、回想入り。

初美　栞里は？
真司　まだ、手術が終わってなくて。
初美　そう。……そう。

初美、立っているのも落ち着かず、座るものの、再び立ち上がる。そのタイミングで真司、初美に声をかける。

真司　初美さん。
初美　どうかした？
真司　いや、こんなとき何も出来ないなって。人間ってほんと無力だなって思うんですよ。
初美　うん。
真司　だからってわけじゃないんですけど、柄にもなく、
初美　ん？
真司　柄にもなく神様にお祈りしちゃって。
初美　そりゃするわよ。誰だって。
真司　すっげぇかっこ悪いこと今から言いますけど、あいつには絶対言わないで下さいね。
初美　ええ。
真司　あいつのこと救ってくれるならなんでもするからって。もし神様がすっげぇ困ってて、猫の手だろうが人の手だろうが借りたいって思ってたら、飛んでいきますからって。だから、あいつのこと、助けてくださいって。
初美　カッコわる。

真司　ですよね、こんな時ばっか。

初美、手術室の扉を見つめながら。

初美　真司くん。神様はきっと救ってくれるわ。そんだけ祈ってるんだから。

真司　はい。

照明変化。回想から藤島家に戻って。

栞里　足の障害とはずっと付き合っていかないといけないけれど、でも、助かったんだからさ。うん、ラッキーだよ。

初美　そう、よね。ラッキーよ。栞里はついてるわ。

栞里　一生分のラッキー使い果たしちゃったけどね、私は。

栞里　私が地上でどんな目に遭ったとしても、それで星を恨むとか出来ないから。

初美　うん。で、これどうするの？

栞里　さぁて、どうしようかねぇ。

各々、現実逃避するかのごとく、飲み物を飲んだり、思い出に浸ったり、本の表紙に手を触れたりとしていると。ＳＥ黒電話着信。徐ろに栞里、電話線がつながっていないことを初美に見せ、受話器を取る。※ＳＥの音一瞬止まったかなと思わせるが続く。

栞里　もしもし。

しかしＳＥの音やまない。皆不思議そうに辺りを見回しつつ、栞里、自分のポケットから携帯を取り出す。

栞里　こっちか。

初美　紛らわしい着信音にするなって。

栞里　こっちが先だもん。(電話に出て)もしもし。どうしたの？　うん、うん、電話。え、なんのことかな。うん、うん、うん、あ、違う、別に隠してたとか、うん、うん、わかった。出しとく。

電話を切る栞里。

莉乃　先輩？

栞里　真司から。

初美　何だって？

栞里　なんか知らないけど、この電話のことバレた。
初美　はぁ？　何で？
栞里　知らないよ。あとでって言うだけなんだもの。
莉乃　となると私たちって邪魔ですかね…
初美　……あ、私も？
莉乃　一応私たちって、たちって付けましたよね。
初美　私たち来た意味って…。一人で大丈夫？
莉乃　うん。
初美　隣の部屋とかに隠れてた方がいいなら隠れてるわよ。
栞里　大丈夫。あとは夫婦で解決してみる。だってこの電話、もともと真司に来たものだし。
初美　でもなぁ。
莉乃　今日は帰りましょう。でもホントに何かあったらすぐ呼んでくださいね。私、自転車漕いですぐに駆けつけますから。
栞里　ありがとね。お姉ちゃんも。
初美　ん。
莉乃　ほら、行きましょう。

莉乃に押し出されるように部屋を出て行く初美。一人になる栞里。

○シーン１３「藤島家８」

真司入り。黒電話を見つめる。栞里も見つめる。

真司　これか。
栞里　これね。
真司　でもなんで隠してたの？　隠す必要ないじゃない。
栞里　だってこれ。

栞里、電話と一緒に渡された手紙をポケットから出して見せる。読み上げる真司。

真司　「神様を救う約束をお守り下さい」か。
栞里　とことん怪しいんだもの。こんなの真司に見せてどうするのよ。
真司　見せないでも解決しないじゃない。
栞里　どこでこんな約束したの？　私に黙ってさ。
真司　まあ、ちょっとね。
栞里　ちょっとね、で神様と約束なんかしちゃうんだ。どうするのよ？　助けに行くの？

真司　仕方ないじゃない。ご指名なんだからさ。光栄に思わないと。
栞里　じゃあさ、神様から今度連絡あったらさ、聞いてみてよ。やっぱなしでってわけにはいきませんかって。神様クラスだったら心は宇宙のようにお広いでしょうし。
真司　お広いでしょうって言われてもなぁ。栞里、神様に恨みでもあるの？
栞里　そんなの、ないよ。でもさ、だって(私から真司奪おうとしてるんだよ)。

ＳＥ黒電話着信。真司、栞里の携帯が鳴っていると思って。

真司　電話。

栞里、携帯を取り出して見るが着信していないのを確認する。

栞里　違う。そっちみたい。

真司、線がつながっていないことを確認して。

真司　そうか。
栞里　かかってきたよ。
真司　うん。
栞里　出ないの？
真司　出るよ。
栞里　出なよ。
真司　だから出るって。
栞里　うん。…

暫く黒電話を見つめる２人。そして徐ろに受話器を取り上げ、耳に当てる真司。

真司　もしもし。

照明変化。栞里スポットへ。真司は神様と電話をしている状態。「戻ってこられるのか」と聞いたときは栞里を見ることが出来ずに彼女に背を向け、自分が行かないとどうなるのかという問いの答えに「願いがリセットされる」と言われ、栞里を見る。

栞里　それは神様からの電話でした。彼はしどろもどろになりながらも神様からの言葉に耳を澄まして、受け答えしていました。私は、その間、あの事故のことを不図思い出していました。大きな事故に遭ったというのにその瞬間のこと、感じたであろう恐怖、迫りくる死、でも何も、覚えてはいませんでした。気づいたらベッ

ドの上で、病院の天井があって、心配そうに私を見下ろしている彼や姉の姿がありました。あれからまだ一年と少しが経っただけです。でも私は生きている。今こうして見慣れた自分の家にいます。夫と一緒に暮らせています。私は、私が此処に居るというのに、彼は何処に行ってしまうというのだろう。勿論それが彼の意思ではないってわかっていますから彼を責めようとは思いません。(こみ上げるのは悲しみよりも悔しさか)それにしても、それにしてもじゃないですか。

受話器を置く真司。栞里、その様子をじっと見つめる。

栞里　なんだって？

真司　うん。

栞里　……(我慢できず)なに！

真司　ああ。いや、まあ、お待ちしていますよって。

栞里　お待ちしてますって。ホテルやレストランの予約じゃないんだよ。

真司　それはわかってるよ。

栞里　わかってないよ！

真司　そんな怒らなくてもいいだろ。

栞里　怒りたくもなるよ。理不尽だよ。なんで真司なの？　地球上にどれだけの人間がいるか知ってる？　世界だとおよそ７４億１４５１万人。日本だけでも約１億２６７５万人だよ。

真司　そんな地球上に何人いるかなんて神様には関係のないことじゃないかな。

栞里　神様に関係ないことでもこっちとしては大いに関係あるね。ちゃんと納得できる回答をもらえなかったら私は嫌だ。

真司　ワガママだよ、それはさ。

栞里　いい。ワガママでもなんでも。

真司　栞里は子供だな。

間。

栞里　真司、ちゃんと答えてね。今の電話で聞いてたよね。戻れるのかどうかって。それは、なんて言ってたの？

真司　聞いてどうするの？

栞里　答えて。

真司　約束は出来ないって。ただ、

栞里、言葉を待つ。

真司　ただ、帰れた人間はいる、って。だから希望を失わないで欲しいって。

栞里　それさ、帰れなかった人もいるわけじゃない。その割合わかんないし。なんでそんな命かけて行かないといけないの。…私を納得させてよ。
真司　ごめん。
栞里　もし真司が行かなかったらどうなるって？　それも聞いてたでしょ？
真司　うん。
栞里　なんでその時、私のことを見たの？
真司　それは。
栞里　私がどうにかなるって言われたの？
真司　ごめん。
栞里　ごめんごめんって真司が謝らないでよ。私が悪者みたいじゃん。

真司、星の本を取り上げて眺める。暫くして。

真司　(ぺらぺらと頁を繰りながら(しおりを見つけて)あ、これ、おかしいな全部僕が返品したはずなんだけど。

真司、そう言って「しおり」として使われていた太陽観察メガネを装着してみせる。意図的な道化は斯くも悲しいものか。

栞里　ねえ、いつ？
真司　うん。
栞里　いつって言ってた、神様。
真司　今週の、土曜日、だって。

二人して机の上のカレンダーを見遣る。楽しいことが起きるはずの赤丸が今は切ないモノの象徴として其処に刻まれている。

栞里　少しだけ神様のこと恨んでもいいかな。
真司　うん、あっち行ったら、代わりに謝っておくよ。
栞里　お願い。

真司、本を閉じて置き。

真司　あのさ、土曜日、行くところ決めたから。
栞里　どこ？
真司　場所は秘密。
栞里　秘密って。
真司　星を見に行こう。

二人はける。ＳＥ電車の走行音から停車音へ。ドアの開く音。雑踏の音。
照明変化。

○シーン１４「プラネタリウム」

同じような帽子をかぶったもぎりが二人立っている。もぎりたちが「いらっしゃいませ」などと声をかけているようだ。が、実際に声を出すのは微妙な気がするので稽古時に検討する。真司、栞里入り。気遣うように歩幅を合わせる真司。

栞里　（暗さを引っ込めて）ねえねえ、なんでここなの？
真司　なんでって？
栞里　だってプラネタリウムって色々あるじゃない。うちからだったらもう少し近めの所に一つ、大きなのあるよ。なんで？
真司　そうやってさ、本当はなんでか知っているのに聞いてくるところあるよね。栞里って。
栞里　で、なんでなんで？
真司　まあ、ほら。結婚して初めて出かけたのがここだから。それだけ。
栞里　照れてるでしょ、言いながら照れまくってるでしょ。
真司　からかうなって。
もぎりＡ　チケットこちらで拝見致します。
もぎりＢ　こちらでも見ておりますので。

真司、栞里、二人もぎりたちにチケットを渡しつつ、受け取りつつ通過していく。
真司、もぎりの顔を見て、あ、と思うが、そこはスルーしていく。

栞里　ちょっとここで待ってて。
真司　ああ。

栞里はける。その後ろ姿見送る真司。照明変化。もぎりのもとに向かう真司。

真司　何してるんですか？

もぎりＡ、帽子を取ると悠。

悠　あら、ばれました？　奥様にはバレなかったのに。
真司　のにじゃなくてですね。

荔枝も帽子を取って髪を直している。

荔枝　迎えに来てあげたんじゃない。神様からも言われたんでしょ。迎えに行くって。
真司　ですね。
荔枝　じゃ、行こうか。神様も首を長くして待ってたからね。

荔枝、いそいそとはけようとするが。

真司　あの。
悠　はい。
真司　それって、このプラネタリウムを見たあとじゃ、ダメですか？
荔枝　こっちとしてはさっさと神様の所に連れていきたいんですけど。あの方、へそを曲げやすいからさ。
真司　無理ですか。
荔枝　私は面倒くさいことは嫌だね。
悠　わかりました。少しお待ちしましょう。
荔枝　おい悠。何勝手なこと。
悠　ま、いいじゃないですか。ちょっとぐらい、ね。
荔枝　知らないぞ、あとで叱られても。私はすぐに連れて行くって言ったからね。
悠　はいはい。

栞里戻ってくる。荔枝、悠、帽子を再びかぶる。**照明変化**。椅子に座る真司と栞里。もぎりを続ける悠と荔枝。

真司　もうそろそろかな。

真司、腕時計を見て。栞里はパンフレットを見て。

栞里　うん。ねえ、このプラネタリウムってヒーリング効果があるんだって。
真司　じゃあ、栞里はすぐに眠っちゃうかもね。
栞里　私寝ませんけど。最後までちゃんと見上げてますけど。
真司　どうかなぁ。
栞里　ヒーリング効果があるからってみんな寝かされてたら折角の星空が泣くわよ。
真司　そりゃそうか。

栞里、パンフレットを閉じて。

栞里　ねえ。

真司　うん。
栞里　お願いがあるんだけど。
真司　なに？
栞里　…あのね、手を握っててほしいの。
真司　お安いご用で。

真司、栞里の手を握る。すると思っている以上に強く握り返されて。

真司　栞里？
栞里　私、しっかりと握ってるからね。だから暗い間に(消えたりしないで)。

栞里のセリフ中に照明暗くなる。

真司　始まる。

上手端にスポット。悠と荔枝。帽子を取っている。

荔枝　始まったみたいだよ。
悠　そうですね。
荔枝　終わるまで４０分か。
悠　ええ。

悠の電話が鳴る。神様からの電話だ。眉間に皺を寄せる悠。電話に出る悠。

悠　お疲れ様です。はい、はい。わかりました。お連れします。

悠、電話を切る。

荔枝　なんだって？
悠　連れてこいと。
荔枝　今？
悠　今。

荔枝、閉じられている扉を見つめる。そこから二人の様子が見えているようだ。

荔枝　終わってないけど。って言うか今始まったばかりなんですけど。
悠　そうですね。
荔枝　連れてくの？

悠　嫌なの？
荔枝　だって約束しちゃっただろう。終わるのを待つって。
悠　それは私が勝手に約束したことだから。君は守らなくてもいいわけでしょ。何をそんなに反対するの。
荔枝　反対してるわけじゃない。ただ、今じゃないだろう。始まる前ならまだしも、始まってからすぐって。約束は守らないとダメだ。
悠　(逡巡して)わかりましたよ。じゃあこうしましょう。私が先に帰って誤魔化しておきますから。あとで連れてきてくださいよ荔枝が。
荔枝　なんだよそれ。
悠　仕方ないじゃないですか。でないと、神様、降りてきちゃいますよ。ここに。
荔枝　でも悠、それじゃあ。
悠　私のことは大丈夫です。でも、そんなに長くはもたないかもしれません、とだけは言っておきますね。

悠はける。見送る荔枝。再び扉を見つめる。**暗転**。この暗転の間に荔枝、真司はける。少し長めの暗転からゆっくりと**明転**。明転するとシートに一人の栞里。そこに通り掛かる女子高生、花菜が心配そうに栞里を見ている。

花菜　あの、大丈夫ですか？　誰か呼んできましょうか？
栞里　待って。うん、大丈夫だから。
花菜　でも。
栞里　大丈夫だから。あまりにも星がキレイだったからね。
花菜　ええ、忘れられないぐらいにキレイでしたね。私、ここにいましょうか？　いてほしくなければそれはそれで。
栞里　いてもらってもいい？
花菜　(笑顔で)お安いご用です。

栞里、それを受けて、でも笑って。

栞里　ねえ。
花菜　はい？
栞里　それって、流行ってるの？

花菜、「？」という顔をしつつ、星空を思い出すように上を向く。溶暗。

第４話『あなたに会いたいから私は今日も空を見上げる』　了